
時計塔に眠る怪人

keisei1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時計塔に眠る怪人

【Nコード】

N0041Z

【作者名】

keisei1

【あらすじ】

ファンタジー小説家でシングルマザーの優那裸留枷^{ゆいのか}は一人息子の伊瑠^{いる}に話して聴かせている寓話「時計塔に眠る怪人」と一致点が数多く見いだされる「別世界」へとある日運ばれる。そこでは異人種間戦争が行われていた。その「別世界」で出逢った青年は裸留枷の寓話「時計塔に眠る怪人」の主人公と同じ名前、「ジファ・セラヴィナ」を名乗る。彼は政府にA級不穏分子と断定され、特務機関「AMSSOI」に追われていた。ジファと国防軍の争いに巻き込まれた裸留枷は、ジファと「二つの世界」を巡る謎解きの旅へ向か

うのだった。
他サイトに掲載済み。

プロローグ 優那裸留枷

プロローグ
優那裸留枷
ゆうなはだか

今夜は私の七作目の小説、「ザ・ドロービング・ナイフ」の出版を祝う食事が催されていた。出席者は私と私の一人息子、伊瑠を含めた7人。まず編集者の芳賀夏芽^{はがなつめ}。二十代半ばなのに娯楽小説の将来を見据える好青年だ。次に挿絵を担当したグラフィックデザイナーの瀬戸香納世^{せとかなせ}。40間近に迫り、より鋭い絵画センスを磨く男性。時折小難しい美術用語を使うのがクセだ。三人目は宣伝部長の七敷河雉^{ななしきかじ}。三十代後半の才色兼備の女性。男性からは引く手あまた。それなのにビジネス上の成功を最優先する独立独歩の人。彼女の流通術は素晴らしく、私の前作が5万部を売り上げたのは彼女のおかげだと言われている。そして私の親友、新進気鋭の小劇団を主催する橋音々^{はしおと}（たちばなねね）。才能を早くから評価され、将来を期待されている。それにも関わらず本人は意に關せず。余暇にはギャンブル、クラブ巡り、ロックバンドのライブなどを楽しむ女。まっ自由人だ。六人目が私の同業者、同じファンタジー小説家の風氏^{ふうし}塔^{とう}。私より五つ上の男性。お互いライバル心を抱きあつて切磋琢磨^{せさくさ}といきたいところだが、なにぶん、彼は拍子抜けするほどマイペース人間。しのぎ合おうにも彼の心はどこか夢現。イメージネーションの空間にいるのだ。作家とはそもそも空想家。しかたないといえはそうだが少し肩すかし。寂しい気もする。最後に忘れてはならないのが六才になる我が愛すべき息子、優那伊瑠^{ゆうないる}。生意気ざかりだが家に帰ればまだまだ甘えたい年頃。子供時代なんて瞬く間なのでこれが最後とばかりに甘えさせてあげようと思っている。さて肝心の伊瑠の父親と言えはここにはいない。そう、私は離婚経験者のシングルマザーなのだ。離婚してもう二年経つ。イラストレーターをし

ていた元夫、河橋乃？は私の仕事にも理解があつたし、夫婦生活も円満だった。何より彼は優しく柔軟な発想の持ち主。収入の夫婦間格差なんて気にもとめないおおらかさがあつた。伊瑠の子育て、世話も進んで引き受けてくれた。何一つ申し分ない夫婦関係。それなのに不意に糸が切れるように愛情が薄れてしまった。多分信頼関係だけではコントロール出来ない感情の機微が二人に働いたのだろう。離婚手続きはスムーズだった、親権は私に託され、養育費、慰謝料は私から遠慮させてもらった。彼の独身生活の方が厳しくなるのが私にはたやすく予想出来たからだ。私は彼が新しい家族を築くのを望んでいる。だから前妻とのトラブルが再婚のハードルにならないようにしたかったのだ。週に二回の伊瑠との面会も私から提案したし、わだかまりは何一つなく別れた。ただことなく気丈に振る舞いすぎたと悔いが残つたのもホントのトコロ。譲つて、譲つてあげたのに、彼は時折涼しげに感謝の言葉を口にするだけ。「それはないんじゃない？」と不平の一つも漏らしたくなる。だけどここはグツとこらえて未来志向でいよう思っている。それが何より伊瑠のためにもなるのだから。フランス料理屋の長卓を囲んだ面々は、おのおの「ザ・ドローピング・ナイフ」の感想を口にする。皆、クリエティブなお仕事についてるせいかな、辛辣ながらも的を射た意見。おおむね好評なのはありがたいことだ。ザ・ドローピング・ナイフは直訳通り、「突き立てられるナイフ」からドラマが始まる。拡張戦争ばかりにウツツを抜かし、内政をおざなりする国王マヌカ。その父マヌカの寝首を息子ケルファが襲う。だが！首筋にナイフを突き立てたケルファはすんでのところであらう、思い止まる。彼は王国を捨てて、単身旅に出る。彼は旅先で様々な出来事、人々と出逢い、変わっていく。そう。ザ・ドローピング・ナイフとは自らの正義と、善悪の基準の狭間で揺れるケルファの心の変遷を描いた物語なのだ。香納世が美術的な角度から話をする。

「初め、ケルファがマヌカを襲うシーンが絵描きとして刺激的だった。ケルファの人格もイメージしやすかつたし、彼の情熱的な荒々

しさが表現されていて良かった。でも彼の最後の選択はどうだったんだろう。読者の間でも賛否が分かれるんじゃないかな。」

夏芽が直情家らしく、ファンタジー小説の新機軸を打ち出す。

「僕は小説の根っこ自体覆すのも一案だと思います。ケルファがそのまま父を刺し殺して始まって良かったと思うんですよ。その事実を隠し、王となり君臨する。その彼が一政治家としてどんな政治的手腕を振るうか。ちょっと知的な話になりますが、新しい発想の作品になると思いますよ。」

おい、それは物語を全否定するような意見だぞ。夏芽君。私の長きに渡る執筆活動をくつがえす斬新なご意見。どうもありがとう。チエインスモーカーの河雉？が煙草を吹かしながら言う。彼女には妖しげな魅力が常につきまとう。

「ケルファ君、青年期にある彼のセクシャリテイ、妖艶さが存分に描かれて良かったんじゃない？若い女性読者層に訴えかける要素がありあり。新しい購買者の開拓は常に意識しないとね。まっ、話事態はどうでも良かったけど。」

おい。書き手は目の前にいるぞ。遠慮のない奴だ。彼女らしいと言えばそれまでだが。ワインを大量にたしなみ、すでに「出来上がっている」音々が、味も素っ気もなく、愛すべき主人公ケルファ君を断罪する。

「仕事熱心な親父を刺し殺そうってんだから、早い話しつけがなかったたつてとこだな。てめえが政治をやってみろってんだ。きつと苦労すつから。」

彼女は果物ジュースを口に含む伊瑠の髪の毛をくしゃくしゃに撫でて、くだを巻く。

「なっ、伊瑠。世の中にやあ誘惑が多い。パパとママの言う事しっかり聞いて立派な男になれよ。決して人殺しを正当化するような人間だけにはなんなよ。」

もつともだ。でも彼女自身が誘惑に溺れた人間そのものに思えてならないが。頼むから伊瑠に悪影響だけは与えないでくれ。あんた

の暮しぶりはお世辞にも褒められたもんじゃないんだから。河雉？が、フランス料理の珍味を黙々と味わう塔？に話を振る。彼は賑やかな談笑には加わらず、食材の一つ一つを凝視し、何やら考えている。相変わらずマイペースな男だ。

「塔？君。君はどう思う？ケルファ君の行動原理は理解出来た？ストーリーの展開にも納得出来た？」

しばらく塔？は黙っていた。その間も皆の話は続く。河雉？がげんな顔をして、煙の立ち込める煙草を持つ手を止めると、もう一度塔？に呼び掛ける。

「塔？君？塔？君。塔？君。」

塔？は夢から覚めたように河雉？の声に反応する。

「はい？なんですか？河雉？さん。何の話です？」

河雉？が少し苛立たしげに（その圧迫感が男を取り逃がす原因なのだ。彼女はそこに気付いていない）彼を問いただす。

「何って。だから！「ザ・ドローピング・ナイフ」の感想。今夜はその出版記念の食事会でしょ？」

塔？は掛けていたハロルド眼鏡をあげると、心ここにあらずといった様子で、それでいながら鋭い分析をしてきた。

「感想。はい、感想ですね。良かったと思いますよ。価値感が混沌とする、昨今の時代背景を反映した壮大なストーリーだったんじゃないでしょうか。若い読者の共感も集めるコト請け合い。彼らに現代を生き抜くヒントを与えたんじゃないでしょうか。僕は思い悩むケルファ君の姿に大いに共鳴しましたね。とにもかくにも素晴らしい作品でした。」

河雉？の煙草の灰が零れ落ちそうだった。河雉？は呆気に取られて、これまたもどかしげに塔？をせき立てた。

「塔？君、しっかりした批評眼持つてるじゃない。その調子でより良い作品作りに励むように。裸留枷はあなたのライバル。いい競争相手なんだから。」

塔？は笑みを絶やさなかった。

「はいこれからも精進いたします。」

その後も話は賑やかに続き、食事は終わった。（塔？はその間中、ほぼ全時間に渡って料理の素材を神妙な面持ちで観察していた）帰り際、皆が店先でそれぞれ勝手気ままな要求を私に押しつけてきた。香納世。

「裸留枷さん。これからはもつとエロティシズムの暗喩を作品に入れて下さい。美術史とは厳格なモラルを持つアカデミズムと奔放な人間性を描写する反アカデミズムの闘いの歴史なんですから。」

「はい、充分に考慮します。」

夏芽。彼もかなり酔いが回っている。舌がかなりおぼつかない。

「裸留枷さん。自作はもつと冒険的で野心的な作品に挑戦しましょう。裸留枷さんの才能はファンタジー小説という一つのジャンルに留まらない。社会全体を巻き込むようなムーブメントを引き起こす。」

・・・うつ、吐き気が。」

大丈夫か？夏芽君。私は彼の評価を好ましく聴いていた。

「はい。ありがとう。夏芽君。これからもアドバイスよろしくね。」

「飲み過ぎたか？僕は大量の身勝手な要求も飲み過ぎたか？」

・・・つまらん。河雉？。彼女は私の肩を叩く。

「さつ、これからも商業的利益を徹底的に追求して頑張ろう。目標は高く掲げて十万部だ。それぐらい尊大にしてもいいんだよ。作り手つてのは。」

「つくづく身にしみるお言葉です。」

「謙遜しなさんな。ニューウェーブの担い手さんよ。」

「ニューウェーブ」という言葉に彼女の世代、年齢を感じる。私はそのセリフが喉まで出掛かって飲み込んだ。音々。彼女は完全に出来上がっている。

「つまりなんだ。少年少女を相手にする物書きつてのは窮屈なもんだ。たまには私の劇団に遊びに来な。本流から外れた大人の演劇つて奴を見せてやつから。」

私は音々に言い返した。

「あんたの生活ぶり見てりゃ、作風も大体想像がつく。要はアンダーグラウンドでしょ。」

「固いこと言わない。人間何事も勉強、学習。好奇心がなくなったらおしまいよ。」

わりかしまともなことを言う。しらふだと支離滅裂で、酔ってるともともなのか。彼女はもう一度、伊瑠の髪をくしゃくしゃにした。こら、その子はお前の愛玩犬か。

「少年、伊瑠よ。お前はと思うんだ。ユア・マザーが作り上げた作品を。正直に感想言っていんだぞ。」

伊瑠はしばらく黙り込んだ。全員が伊瑠の顔を覗き込み、息を飲む。伊瑠は意を決して口にした。

「母さんの作品はただの娯楽小説じゃないと思う。啓発本っていうか、そんな感じかな。」

伊瑠の予想外の大人びた批評に皆、照れくさそうに襟を正した。音々だけは例外で大笑いしていた。

「一番のインテリ、教養の持ち主は幼稚園出立てのガキだったってわけだ。こりゃ灯台下暗しって奴だ。」

彼女は大笑いしていた。とにかく酔うと彼女は何でも楽しいらしい。親友の息子をガキ呼ばわりしてまでも。河雉？がもう一度塔？に意見を求めた。彼はポケットから取り出したレシートを物言わず見つめていた。

「さっ、塔？君。締めくくりの一言をどうぞ。あんた今夜ほとんど喋らなかつたんだから。」

「そうですね。皆の人生前途洋々、希望に満ち溢れていると行ったところでしょうか。僭越ながらも、それが率直な感想です。」

河雉？は眉をひそめた。

「締めまりねえなあ。塔？君も言葉のプロでしょ。もっと表現を選ぶ！分かった！？」

彼は気にも留めていないようだった。

「以後気をつけます。」

皆満足した表情で帰路についた。駐車場へ向かう私について来る伊瑠の頭を私は抱きしめた。伊瑠は物静かにしていた。

「ありがとう。伊瑠。でもそんなに背伸びしなくていいんだよ。子供は無邪気でいいの。じゃないと後で「反動」って奴が来るから。」

伊瑠は顔をしかめた。

「だって収拾つかないんだもん。あの人達。」

「違う。」

私は声をあげて笑った。私は伊瑠と愛車に乗り込むとエンジンを掛けた。こうして騒がしくも、愛おしくもある食事は終わった。私は帰りの車中、伊瑠と母子二人きりの時間を満喫していた。それは彼が青年になるまでの束の間の時間であると知りながら。私は存分に満たされていた。夜の街灯がほんのりと車を褐色に照らしだしていた。

ファントム 1 優那裸留枷

ファントム

優那裸留枷

自宅はマンションの小振りな一室。私は顔を洗い、着替えを済ませると、眠りかけの伊瑠を寝かしつけた。伊瑠は眠たげな目をこすりながらベッドに横になる。そして伊瑠はいつものように私お手製の寓話を聴かせるよう私にせがむのだった。離婚して以来毎晩のように物語を私が伊瑠に話して聴かせてあげるのが眠る時の習慣なのだ。私は作家としての力量をいかになく發揮して、これまで幾つものオリジナルストーリーを伊瑠に聞かせてきた。黒豹の顔を持つ男の憎悪に満ちた流浪の物語。奢侈に溺れる貴族令嬢と、澄みきった哲学を持つ浮浪者の青年の争いと恋。頬に火傷の痕を持つ美しい女騎士の英雄物語。冤罪で右足をもぎ取られた航海士が新大陸へ到達するまでの叙事詩。権力闘争に脅える王子と奴隷の青年との友情。幽閉された科学者と教皇との親交。その他諸々。伊瑠の年頃はスポンジのように吸収力があり、少しばかり難しい話でも夢中になってくれた。私は私で、教養なんて無視してエンターテインメント性を追求した。作家の趣味嗜好が先走りして母親としての自覚が足りなかったかと思いましたが。伊瑠が一番気に入ってくれたのが黒豹の男の物語だった。クライマックス、黒豹の男が戦争賛美者の公爵の喉元に刀剣を突き立てるシーンを聴いた夜は、伊瑠は興奮して眠れなかったほどだ。その時は少し刺激が強すぎたとさすがの私も反省した。ただ伊瑠も血気さかな男の子らしく、壮大でヒロイックな話がお好みのおうだった。以前、試みに難聴の青年画家と高級娼婦の恋物語をお披露目した時はほぼ無反応だった。私は案外気に入っていたのだが。私は伊瑠の髪を優しく撫でて、時にドラマティックに、時に抑え目にして演出に幅を利かせた。今、話して聴かせている物語

は、かつて、王族の男が絞首刑にされた広場の中央に立つ時計塔。その地下に広がる水路の奥に身をくらませる「ファントム・怪人」と、純粹無垢な少年との心の交流の物語だ。この筋書きを伊瑠はとても気に入っているようで、続きを毎晩ねだった。私は陰影を滲ませて情景の描写を始める。伊瑠は静かに瞼を閉じた。

「少年ジファは今宵も夜闇に紛れて部屋を抜け出します。家族が寝静まるのを見はからい。朧な月は彼の暗い心を艶やかにあぶり出すように輝いていました。」

私は伊瑠との濃密な母子の時間を過ごし始めた。この物語のあらすじはこうだ。・・・百年もの昔。王位継承権争いの敗残者、壮年の男カルツァが公衆の面前で処刑された「琥珀の広場」が舞台となる。カルツァの処刑。民衆はその惨劇を疎み、隠蔽するかのようになり、広場を閉ざし、近寄る者は誰一人としていなかった。広場に立つ時計塔から、戯曲を好んだカルツァの死を悼むかのように舞台台詞を読み上げる声が滔々と、朧月夜に響き渡るのを幾人もが耳にしていた。人々はいつしか時計塔には、カルツァの怨念が乗り移った亡霊が徘徊しているのだと噂し始めた。彼らはやがてその亡霊を「時計塔に眠る怪人」と呼び、恐れた。閉ざされた時計塔は放置され、さびれるままになっていく。「琥珀の広場」から人々の足は遠のき、訪問者は途絶えた。そんな時代に人々の迷信をぬぐうべく時計塔に忍び込む一人の少年がいた。その少年の名はジファ。ジファ・セラヴィナと言った。ジファは肌が白く透き通った中性的な面立ちの少年で、指は妖艶な程に細く長く、爪先にまでその蠱惑的な魅力が溢れていた。野性味と優雅さをかね備えた瞳の奥には冷たさと深い憂いが潜んでいる。彼は夜更けを迎えては一人時計塔に赴き、固く閉ざされた扉を開くと時計塔の地下水路を探索した。今は動かない時計仕掛けの歯車を仰ぎ見ては、入り組んだ地下水路を彼は進んでいく。時折響くうめき声は、彼に「亡霊」、怪人の存在を確信させた。一夜、一夜ごとに水路の構造を把握していく彼はやがて気付く。地下水路が八角形状の空洞を水路全体の中央に形作っているのを。彼

は壁を調べていくと、かすかに変色した煉瓦の一つを見つける。閃くジファ。彼は煉瓦の接合部分にナイフで切り込みを入れ煉瓦を取り出す。すると壁面が動き、隠し部屋への扉が開く。ジファは甘美な香りの漂う室内に誘われるように足を踏み出していく。調度品、骨董の数々と飾られた美術品、室内の装飾。そして天球模型、顕微鏡、散らばる多くの実験器具は、部屋の主人の聡明さと、背徳の香りを思わせた。部屋の奥、華やかな刺繍を施されたベッドにその男は腰掛けていた。男は顔を両手で覆い、うなだれ、絶望と苦悶の間を漂う。彼の口から戯曲の長台詞が零れ落ちる。

「死に憧れる者、生に執着する者。皆押し並べて自然の奴隷でしかないとしたら？人間の意志は、崇高さは、高潔さは！まことに存在しえるのか。人の世はいかにして意味を持ち得るのか。果ては称えられるべきか。全てが無意味な気まぐれと怠慢、放恣によって決められているのなら、人の尊厳は存在しうるのか。私は気まぐれに左右される哀れな獣の一群に過ぎないのか。ならば私の嘆きよ、哀しみよ、怒りよ！どうか一つの真理に私を導いて欲しい。」

ジファは優れた表現力を持つこの部屋の主、鬱屈と心を閉ざす彼こそ、時計塔の亡霊。「時計塔に眠る怪人」であると知った。男は顔をあげると重厚な声でジファに尋ねる。

「少年。無辜なる魂。お前は誰だ。」

薄明かりに灯される男の左目は痛ましくただれていた。ジファは震える心を奮い立たせて答える。

「俺はジファ。ジファ・セラヴィナ。鞆職人をなりわいにするロウ・セラヴィナの息子だ。」

男はカンテラを片手に立ち上がり、ジファに歩み寄る。その眼差しは濁りがなく、透明な輝きを放っていた。だが、ジファは彼の瞳に鈍い光と深い悲しみが刻まれているのも感じ取った。男は優雅な物腰でジファを手招きする。

「聞こう。君の探究心は何に由来するのか。単なる好奇と愚昧さからか。それとも高尚なる人格ゆえか。・・・聞こう。」

ジファは暗示に掛かったように男に近づいた。

「俺は・・・」

それが少年と怪人の初めての出逢いだった。ふと見ると伊瑠は静かに寝息を立てている。心地よい夢でも見ているのだろう。彼は微笑んで寝返りをうつた。私は彼に毛布を掛けると残っていた仕事を片づけて早々と眠りについた。翌朝、私は自宅に程近い執筆オフィスで次回作の準備に追われていた。こまごまとした資料、アカデミック読本。歴史空想小説まで多岐に渡って調べていた。次の小説は日本史に「IF」を持ち込んだファンタジー歴史小説だ。このアイデアは気楽に見ていた小学生向けの雑誌記事に触発されたものだ。それは「もし本能寺の変で信長が討ち死にしていなければ」との記事だった。その記事は五つ「IF」をあげていた。その内、私が特に興味をひかれたのが、信長は日本を統一した後、中華大陸に進軍し、明を制圧しただろうというものだった。記事の内容はさらに広がりを見せる。信長は、明の支配者となった後、ユーラシア大陸を制圧し、果てはイベリア半島にまで進軍する。そして世界帝国形成のためにスペインの無敵艦隊とも戦ったかもしれないとしていた。なかなか面白いではないか。何しろ世界帝国を作った歴史上の人物、国家は覇権を握るとともに、文明の発展にも大きく貢献したのだから。アレキサンダー、ローマ帝国、チンギス・ハン、イスラム帝国、ナポレオンなどなど。いずれも東西に別れた文化の一つにまとめて新しい文明圏を作り上げたのだ。信長もその役割を十六世紀に担っていたとしたら・・・私のイマジネーションはふくらみ、記事に熱中してしまった。おおいに日本人のプライドをくすぐる面白歴史読み物だったが、強く印象に残っていたのだ。夏芽が資料箱を重々しく抱えて部屋に入ってくる。彼は私の構想に口を出す。

「信長は戦国時代マニアにとっては英雄ですからね。西洋の科学、軍事、経済の考え方をいち早く取り入れたのも彼だ。鉄で艦船を作っていたとも言われるし、抜きんでた武将であったのも確かです。ただどうでしょう。秀吉も朝鮮出兵に失敗している。その上信長は

人格的に欠陥あった。だから多くの家臣から謀叛の標的にされていた。世界帝国どころか、日本統一さえまならなかったんじゃないかって僕は思いますよ。」

私は笑顔で応じた。

「そこはそれ、歴史ファンタジーの自由なトコでしょ？イマジネーションをふくらませて夢物語を完成させる。悪くないアイデアよ。きつと。」

「反対はしませんが。賛否両論だと思いますよ。熱心な裸留枷ファンの間では。もちろん協力は惜しみませんが。」

夏芽君の指摘はさておき私のアイデアはこうだ。貧困と飢餓に苦しんでいた明に住む陶芸家の息子が主人公。彼は科举制度を経て官僚となり、祖国を救うのを夢見ている。そこへ信長率いる日本軍が明を制圧、新指導者として君臨し始める。機転の利くその青年は信長に仕官し、信長の世界統一の野望における良き参謀となる。それと共に中華民族の再興も暗に計画する。信長の野心に心酔しながらも、日本と漢民族のアイデンティティーの狭間で揺れ動く彼。破壊と建設、殺戮と救済を繰り返しつつ領土拡張していく信長の軍勢。その青年主人公がユーラシア大陸の西の果てイベリアで見た光景とは……。なかなか面白そうではないか。自分で組み立てながら興奮しちまいたい。私は信長の政治家としての力量を象徴するエピソードの一つ一つに目を通し、プロットをふくらませていった。その時、ふと文章の文字がかすみ、読めないほどになった。文字を長時間見つめっていると文字を識別出来なくなる症状があるらしいが、それが。顔を上げると夏芽君の声も遠く聞こえる。視界に入る光景が波打っている。疲れがたまっているのか。私が頭を抱えた瞬間、現実と空想の境目が壊れるような音が私の耳をつんざいた。私が耳をふさいで俯き瞳を閉じると、現実が遠く離れていった。・・・私は気がつくとも見知らぬ街並みに放り出されていた。街に人影はほとんどない。私は戸惑いながらも、整然と区画、整備された街路を歩いていった。バランスを重視した都市の景観はどこか未来的だった。

都市計画も緻密なのだろう。とてもキレイだった。するとひときわ大きな交差点に一人、白いシャツ、黒いズボン姿の青年が嘲弄的に誰かを挑発している。彼の近くからは重々しく甲鉄板がきしむ音が響く。私は青年にここがどこなのか尋ねようと無警戒に駆け寄った。私は自分の置かれたシチュエーションを全く理解出来ていなかったのだ。その瞬間、軽やかで躍動感に溢れていた彼の仕種、表情が強張り、緊張が走った。周りを見渡すと装甲車、機動隊が彼を包囲している。ターゲットは彼のようなのだ。射出機が彼に標準を合わせ、砲撃が一斉に行われる。と同時に、ただ呆然と立ち尽くす私に青年が走り寄り、私の体を軽々と抱き抱える。次の瞬間には彼の体は地面すれすれを滑空し、弾丸を巧みに交わしながら、空に舞い上がっていた。全面硝子張りの高層ビル。螺旋を描く構造の塔。左右非対称の天井を持つ建物が目に入る。風にあおられながら、見下ろす都市の景観はアートポリスとしてのおもむきさえあった。風にたなびく青年の髪は銀髪と黒髪が入り交じり、独特の異国情緒を醸しだしている。唇は薄く、仄かに青紫に染まっている。右目は赤、左目はエメラルドグリーンに輝き、右目だけが奥二重で、多層的な人格を表しているようでもあった。青年はほの暗い陰影の滲む声で囁き掛けた。

「避難勧告が出ていたはずだ。君は危険を予知する能力に欠けている。近代人らしく防衛本能にもとる。君も例に洩れずシステムティックピープルの一人ではないのか？外出禁止令下の一人歩きは婦人には似合わない。」

彼の瞳は潤み、優しい笑みを浮かべた。私は少し照れ隠しに咳払いを一度すると彼に尋ねた。出逢ったばかりの青年に抱擁されて宙に舞い上がる。中々に非現実的で、メルヘンチックではないか。質問は率直だった。

「ここ・・・どこ？あなた誰？命でも狙われてるの？」

「ここは格納可能防衛都市、第七新都だ。第三期極東紛争のさなかにある。極端な管理体制の下で俺は反体制分子として政府に登録さ

れている。破壊活動、要人暗殺を企む暴徒の一人というわけだ。これで理解出来たか？」

彼の説明は簡潔だった。ただし、私の疑問は収まらない。これは妄想か、幻覚か。私は白昼夢を見ているだけなのか？私は矢継ぎ早に彼に問い掛けた。

「あなた名前は？今は西暦何年？私の故郷東京はどこ？あなたもちらん東京は知っているでしょ？」

青年は涼しげに遠くを眺める。

「西暦？それはいつの時代の話だ。今は・・・OLG167年。人類が衛星メロウにコロニーを建設して植民を開始して以来の年号だ。」

私は耳を疑った。衛星メロウ、OLG167。それらは全て私が既刊書のスペースオペラで使用した設定だからだ。私は現実とフィクションの区別がつかない妄想にでも追い込まれたのか？青年は楽しげに青空を舞いながら答えた。

「東京。東京は知らないな。ただ自分の名前は知ってる。」

涼しい風が吹き抜けていく。青年の瞳は爽快さに満ち溢れていた。

「俺は・・・俺の名前はジファ。ジファ・セラヴィナ。」

名も無き鳥の一群が翼を羽ばたかせ、遠のいていく。私はただ黙りこみ言葉を失った。ジファ。ジファ・セラヴィナ。その名前は間違いなく私の寓話、伊瑠への子守歌代わりの物語に登場する主人公と同じ名前。時計塔に眠る怪人と心通わす少年と同じ名前だったからだ。私はジファの顔を覗き込んだ。彼の顔は涼しげだった。透き通った顔立ち、超俗的でもあった。白い肌、中性的な面差し。私のイメージと一致する特長が際立つ。色違いの眼球、奥二重の右目。銀髪と黒髪の混じり合った髪。細かいデイトールも私の趣味嗜好に近い。私はつぶさに彼の顔を観察した。ジファは楽しげに話し掛ける。

「男の顔を品定めするのが趣味なのか？男も女も仮初めの姿形に翻弄されてると本質を見失う。気をつけた方がいい。」

そう言つて彼はカラカラと笑い声を立てた。案外陽気な男のようだ。彼はひときわ力強く私の腕を握り締めると飛び立つ速度を増していく。彼は呟いた。

「国務部隊の顔貌照合を経て君の生体構造は情報登録されたはずだ。国政方針を拒絶するA級不穏分子に感化された要注意人物として君は追われるだろう。しばらく保護させてもらうよ。」

「どこへ？」

「俺の活動拠点の一つだ。」

私はとつさに閃いた。いや妥当だというべきか。彼に尋ねる。

「それつて「琥珀の広場」？時計塔の地下水路？」

彼はいぶかしげな表情を見せた。

「正解だ。なぜ分かった。君は内部情報に精通しているフリーライターか何かか？それとも俺の身辺調査をする政府のスパイ？」

途端に彼は表情を一変させて艶やかな笑みを浮かべた。

「俺の見当違いだ。用意周到であるべき職務の人間が、不用意に戦闘現場をうろついているはずもない。それに……。」

彼は少しためらった後、私から視線を逸らして口にした。

「無邪気な顔をした女の子が危険な任務に服しているとも思えない。……俺も、容姿に振り回されているのかな。」

女の子？失礼な。私は曲がりなりにも経済的に自立したシングルマザーだぞ。顔が幼いせいとか？童顔といえども限度があるだろう。

大人げなく、すねる私を横目に彼は最後に、少し修正した。

「「地下水路」は間違いだ。君の情報源には若干の誤りがある。琥珀の広場、時計塔界限には広大な領域の地下街がある。無秩序で複雑に入り組み、無計画に増殖した居住エリア。その外観はさながらラビリンスだ。政府の方針に同調しない人間、反発する人間の格好の潜伏先になっている。政府関係者も日に日に変貌する地下街の全容を把握しきれないはずだ。それとも、必要悪の一つ、組織だった活動の出来ない一団だと見限っているのか。あるいは絶対的な監視下でコントロール出来ると思っているのか。真意は掴めない。」

ほら、見えてきた。あれが・・・琥珀の広場だ。」

私は「この場所」の戦争の原因。現在の政治体制、政府と反政府勢力の対立。彼の活動、彼の特殊な身体能力。私は「今」何を知覚しているのか。そして何より・・・時計塔には、「ファントム」、怪人が眠っているのかどうか。尋ねたいことはたくさんあったが口をつぐんだ。私はしばらくこの境遇に甘んじるしかないと思えたからだ。眼下に見渡せる琥珀の広場は私の空想と似て、紫紺と赤褐色の石畳で半円を美しく形作っていた。広場の中央に立つ時計塔は二つの扇形の土台に支えられ三層構造になっていた。一段目は擦じれた棒状の装飾が華やかな造形美を見せている。二段目は薄紅で色付けされた大陸地図が彫り込まれている。そして不遜な笑みを浮かべる太陽が描かれていた。六面に分割された三段目、四つの平面には波状に曲がった時計が置かれ、針は止まっている。残り二つの面にある時計の時針、秒針はS字型で、私には読めない鏡文字で書かれた時刻を指して、動いていた。ジファは私を抱えて軽く地面に舞い降りた。そして私を琥珀の広場の片隅にある釣鐘形をした入り口へと案内した。彼は妖しげな笑みを浮かべる。

「第七新都の貧民窟。地下街、ラビリンス。アウトサイドへの入り口だ。」

私は彼に連れられて曲がりくねった通路を降りていった。何度も曲線を描く通路を歩いている間、ジファと私は押し黙ったままだった。やがて二人は淡い光の射し込む出口へと足を踏み出した。そこが時計塔の地下街だった。一目見たただと地下街は商店の立ち並び賑やかな繁華街にも見えた。でもすぐに私はこの地下街の異質さに気付いた。行き交う人々の目が淀み、どこか妄執的で退廃の香りが溢れていたのだ。彼らは私に視線を向けては関心を失い、内面の官能に酔っている。私は強い警戒心を抱き、ジファの服の裾を握った。彼は私の気持ちを敏感に感じ取り、優しく耳元に囁いた。

「大丈夫。ここの住民は表面だけでは計り知れない。個人主義的で利己的な一方、思想的には高潔で、改革的精神に満ちている。彼ら

は君が嫌うような腐敗した人間じゃない。じきに分かる。一面的な判断基準など表層を撫でるだけの偏見でしかないのを。」

そう言うジファは自信に満ち溢れ、彼特有の気品を漂わせていた。ジファは人込みをかき分けて、尖塔と建物の間、細い裏通りへと紛れ込んだ。路地裏は菱形の石材が敷き詰められ、幾つもの方角に枝分かれしている。まるで地下街の無秩序振りとい帳面さが混ざり合っているようだった。そこはラビリンス。正にその形容が相応しかった。建物の壁には幾何学紋様を組み合わせたペイントアートが描かれている。時折すれ違うヴェールで口元を覆う女性は娼婦を思わせた。ただ私は邪推をしなかった。ジファの言う通り、私の思い込みかもしれないのだから。路地はより込み入り、狭まっていった。幾つもの道が交差している。やがて私達は赤煉瓦を積み上げた建物に辿り着いた。建物は情緒的でありながらどこか寂しげでもあった。ジファは笑顔を見せると、軽やかな足取りで私の手を引き、赤煉瓦の建物の階段に近づいた。彼は言う。

「さあ。俺の知性と野性の本拠へとご案内だ。」

ファントム 2

煉瓦の建物、一つ一つ踏み締める階段は幻惑的な音を響かせていく。私は沸き上がる愉悦を噛み締めていた。最後の石段を降りると灰色にくすんだ通路が一直線に伸びている。壁には部屋の扉が幾つも向かい合う。天井の蛍光灯は明滅を繰り返し、蛾が粉を撒き散らしながら、まわりついている。ジファは褐色の扉、（塗装がところどころ剥げ落ちている）に近づく指紋と顔貌の照合を終えた。セキュリティは案外シンプルらしい。扉は音もなく開き、ジファと私を招き入れる。室内は思いのほか片づけられていた。部屋の中央に銀色の楕円卓が置かれ、その周りには花飾の椅子が三脚あった。書棚には適度な読書量を思わせる本が綺麗に収められている。窓際のテーブルにはキーボードが一つ。そしてホログラムモニターがあった。彼の情報源、集めたデータ全てが保存されているのだろう。また部屋には熱帯魚の立体映像が浮かび、白い壁に飾られた額縁には静物画が収められている。私が想像する「時計塔の怪人」の隠し部屋と似通っているのはその絵画一つだけだった。ジファは私を部屋に置き去りに、コーヒーを煎れると言い残してキッチンへ向かった。私は私で室内を観察してまわり、透明な水溶液で満たされた特殊なカタチの水槽を見つけた。一センチ程の大きさのニューロンとシナプスが結合と分離、増殖のプロセスを繰り返している。その使い道、システムは私には分からなかった。やがてコーヒーカップを両手に持ったジファが私の隣に立った

「人工知能のシミュレーションモデルだ。人間の神経細胞は経験、学習を繰り返して新しい行動、思考様式を手に入れる。人工知能も同じ仕組みだ。単純な計算、判断を重ねる内により高いレベルの働きをするようになる。最終的には意識、心、精神さえ形成するの也有可能だ。人間の脳の働きは単なる化学的、電気的反応の一つに過ぎないというわけだ。」

ジファは私を椅子に座るよう促した。彼はコーヒーを口に含むと呟いた。

「ただ、その解釈が全ての悲劇の始まりでもある。」

彼が細めた瞳は冷淡で酷薄、残虐なおもむきさであった。一転、彼は少年のようなあどけない表情に変わり、好奇心にまかせて私に尋ねた。

「ところで君は、なぜあんな危険区域にいたんだ？武装もしてないし、武器も持っていない。無防備で思慮に欠ける。計画的じゃない。突発的で気まぐれだ。一体何をしてたんだ？」

私は口ごもった。私自身、何が起きているのか良く飲み込めていないのだ。私は黙り込んだ。ジファは意外に淡白だった。

「答えたくないのならそれでいい。人間、秘密や隠し事の一つや二つはある。いずれにしても君は政府直属の諜報機関に標的にされるだろう。誰かの保護が必要だ。俺と行動する方がいい。多少居心地が悪くとも納得出来るか？」

私は小さく頷いた。

「名前は？名前さえ明かせない秘密主義者か？まさかA君、Bさんと呼び合うわけにもいかないだろう。君の名前は？」

「裸留枷。優那裸留枷。」

「ユウナ・ラルカ。変わった名前だな。良く覚えておくよ。」

私の意識は沸き出るいくつもの疑問で収拾がつかなかった。少しパニックに陥った私の口から衝動的に一つの質問がついて出た。

「・・・怪人。琥珀の広場。時計塔の地下に眠る怪人について何か知らない？あなたの知り合いが親友か。それとも仲間か。」

私も唐突な質問であるのは分かっていた。それなのにジファの顔は「怪人」という言葉に敏感に反応し、カゲリが射した。彼は言う。「そう呼ばれる男のことは良く知っている。なぜ君がそれを？」

私は現実と非現実の境目が崩れていく奇妙な感覚にとらわれた。閃きにも似た強い衝撃が私の体中を駆け巡った。私は断片だけでも私の知っている事実を打ち明けた方がいいと思った。

「私、「怪人」についてよく知ってる。彼が迫害された理由も。私はあなたのことも知っている。ジファ、あなたと怪人の関係も。なぜって全て私が創り出したものだから。」

ジファにとつては荒唐無稽な話に聞こえただろう。彼には空想とリアリティの一致など非現実的であるに違いないからだ。彼は彼の世界で生きている。私はその世界に紛れ込んだだけなのだ。彼からすれば私は妄想家に見えただろう。ジファは不信感を露わにした。

「何を言ってる？俺と彼の関わりを把握しているのは諜報機関「秘匿情報管理課、略称AMSSOI」と「汎用科学技術協会」そして軍、国家軍略機構、政府の上層部だけだ。君の告白が真実なら、俺達二人は敵対関係にあると想像出来る。どこまで知っている？返事次第では君と俺は離反せざるを得ない。最悪の場合は・・・。」

私は真摯に彼を見つめた。私の境遇を理解してもらおうと懸命だったのだ。

「怪人、彼が迫害された理由、それは彼が癩病患者だったから。彼は無理解な市民の恐怖心に追い立てられて時計塔に逃げ込んだ。長く時計塔の地下の隠し部屋に潜み、「時計塔に眠る怪人」と呼ばれるようになった。違う？」

瞬間、ジファの顔から緊張が消え、頬が緩んだ。彼は自身の疑いが杞憂に終わったのに安心していうようだった。

「裸留枷。君はたいそうなストーリーテラーだ。ファンタジーとして良く出来てる。ただ残念ながら事実と異なる。君の推測は妄想に過ぎない。安心したよ。裸留枷、君は事情に通じていない。俺と彼の関係についても見当違いな憶測だろう。」

私は戸惑うと同時に拍子抜けした。私の寓話とこの幻想世界との絶妙な一致は単なる偶然でしかない？私の誇大な想像力とイマジネーションが混ざっただけ？なら、今私が知覚しているこの空間も、白昼夢か幻視？私は気負いが取れてリラックスした。そして私の作り出した物語の登場人物の名前をスラスラと並べ立てた。

「そうね。きっと私の思い違いね。私って職業柄思い込みが激しい

ところがあるから。あなたを動揺させてゴメンね。二人の緊張関係はめでたく解消。じゃあ、琥珀の広場で処刑された王族カルツアなんて男も、あなたを助け出そうとする司祭ステファリなんて男も実在しないのね。怪人の名前もオルザヴァじゃないんだ。創造力がたくましいのも考えものね。良かった。」

笑ってコーヒーを嗜む私を見つめるジファの顔つきが一変した。彼は再び深い疑心にとらわれていた。

「カルツアも、ストルツアも・・・存在する。彼らは王族でもなく、司祭でもない。カルツアは謀殺された科学者。ステファリはAMSOIの最高幹部だ。どうしてそんな機密事項を知っている？それに・・・怪人の名前は正しく・・・、オルザヴァだ。裸留枷。君は何を知っているんだ。君は一体誰なんだ？」

私は固まった笑みを浮かべてひたすら呆然としていた。きつと間の抜けた顔をしていたに違いない。私は聞いた。

「・・・どうなってるの？」

その時、ジファの目つきが変わった。私の言葉をさえぎって私に沈黙を強いた。けたたましい足音が戸外に響く。私は小声で囁き掛ける。

「どうしたの？」

「AMSOIだ。長く潜伏先として最適だったが探知されたりしい。慌てないでいい。別室へ。」

彼は私を隣室へ連れていった。部屋の外では何やら指示を出す指揮官の声が響いている。隣室には電磁気を放電する球形をしたオブジェが飾られていた。ジファは二センチ程の大きさをしたソレノイドをオブジェの凹版にはめ込んだ。すると壁面全体を飾るスクリーンが植物の孔辺細胞のように開いた。ジファが私の手を誘い出しスクリーンの奥の通路に飛び込む。するとスクリーンは音もなく閉じ、すれ違うように銃弾の乱射音が鳴り響いた。私はジファのエスコートのまま逃避行へと赴いた。ジファは寡黙を通しながらも一言呟いた。

「君の手引きでないのを願うよ。」

私はジファが根拠のない信頼を私に寄せているのに気付いた。私は口をつぐみ、私の細い腕を優しく引き寄せるジファの背中から離れなかった。二人は絡み合う導線のように入り組んだ通路を進んだ。通路は白銀色の光を反射させる水路へと通じていた。出口へと進みながらジファは尋ねた。

「カルツアをなぜ王族だと？ ストルツアを司祭だと決めた理由は？ まるで前近代的なお伽話だ。それに・・・君が全て創り出したとはどういう意味だ。それには俺も含まれているのか？」

「私も良く分からない。自分でも状況が掴めてないの。ただ子供の為に作った寓話と共通点が多過ぎたから。」

「子供？ 裸留枷。君は子供がいるのか？」

「うん、どうして？」

「別に。そう見えないだけだ。」

私はふと水路に揺れる水面を覗き込んだ。そこにはまだあどけなさの残る、瑞々しい顔をした私が映っていた。なんだ？ まるで十代の少女だ。適度に大人の女性の魅力を持っていた私はどこに行ったんだ？ ジファが「女の子」と呼ぶはずだ。私はこの世界の原理が理解出来なかったが、とりあえずは適応することにした。だって楽しいじゃん。十代に若返った私。端整な顔立ちの美青年とのレジスタンス。我ながら能天気、危機感の欠ける奴だ。私は少し上機嫌になってジファに聞いた。

「ジファ。あなたのお父さんの名前はロウ・セラヴィナ？ 職業は鞆職人？」

ジファは階上へと繋がるハシゴを登りながら答えた。

「俺の父親は鞆職人じゃない。脳生理学者だ。汎用科学技術協会の一員だった。」

私は少し胸を撫で下ろした。そこまで一致するはずもないか。幾ら何でもね。ジファと私がハシゴを登りつめると、そこは露店の立ち並ぶ街路の裏通りだった。私の体を引き上げるジファが一言付け

添えた。

「ただ・・・名前は合ってる。俺の父親はロウ・セラヴィナだ。」

その表情には蒼い憂いがさしていた。私は戸惑いと高揚感で複雑な心持ちにとらわれていた。明らかに私のフィクションと、この謎めいた世界には関係がある。すると考える間もなくジファが露店通りへと踏み出していく。私は慌てて後を追った。露店には野菜や果物。織物や衣服。貴金属で作られた装飾品、いかがわしげな薬、多彩な花々などが売りに出されていた。ジファはその一切に関心がなさそうに私を先導した。私は華やかなかんざしを差し、東洋的な絹織物に身を包んだ女性の一派に視線を奪われ、魅了された。それなのに足早に先を急ぐジファについていかざるを得なかった。ジファは思い詰めてふさぎ込んだ様子だった。私は彼に尋ねた。

「目的地はどこ？逃亡先を決めてる？抵抗組織の活動拠点かどこか？追ってきたのはAMSOSSIだけ？彼らの襲撃に仲間を巻き込んでしまうんじゃない？あなたの身体能力があれば彼らを一扫出来たんじゃない？」

ジファは淡々として冷たい口調だった。

「一つ一つ質問に答えていくか。少し黙ってくれと一喝するか。どっちがいい？」

私も大人げなく少しふてくされて愛想なく応じた。彼に助けられているのも忘れて。

「丁寧の一つずつ解答。」

「目的地はサロンの役割も持つ酒場だ。逃亡先は決めてない。俺の計画の始動させるために理解者の潜伏地を点々とする。ただそこは抵抗組織の活動拠点じゃない。彼らと親交はあっても俺と彼らは独立した関係にある。追ってきたのはAMSOSSI、正解だ。良く覚えられたな。次の質問の答え、俺の知人は常にAMSOSSIの脅威に晒されている。俺がいよいよといまいと関係ない。そして最後の質問への答えだ。俺の身体能力があれば彼らを一扫出来たかって？出来ただろう。ただ君の安全を保障出来なかった。満足出来たか？俺

にも少し考えるゆとりをくれ。君の空想物語と現実が一致するのを俺も奇妙に思ってるんだ。君自身、戸惑ってるだろう。」

私は頷くと同時に、彼の一見冷たい人格に優しさも同居しているのが分かって嬉しかった。事実、私の寓話「時計塔に眠る怪人」のジファはそういう少年だからだ。私は闇雲に憶測するよりも、このシチュエーションを楽しもうとした。それが解決策の一つになると感じたからだ。考えても答えは出ない。そう感じたのだ。やがて私達二人は通りの一角にある、銀細工の建物に足を運んだ。建物のネオンが女性の耽美な指先をかたどっている。ここがジファの言う酒場だろうか。サロンの役割も果たすという。私は店の雰囲気想像を膨らませた。二人が入った店内は貴族趣味とネイチャリストの趣味が混ざったような特有の美意識を持っていた。植物がアール・ヌーヴォーを思わせる装飾性をそなえ、その植物が絡みつく床下、天井、柱全体は水槽になっている。水槽を泳ぐのは遺伝子改良でもされた新種だろうか。見たこともない不思議な鑑賞魚ばかりだった。ウェイターはどこか格式張っていた。お店の趣向だとすれば徹底している。店の奥のスクリーンで流れているのは・・・どうやら戦時報告映像らしい。戦争のニュースを淡々と告げていた。少し無機質にも聞こえる女性アナウンサーの声が響く。

「深閑間基地から出撃した爆撃機の一団は艦船ベガを空母とする空軍連隊とオビル砂漠で合流、更に空中給油を経由した別部隊と連携大戦隊を編成し、敵陣、枢要軍事施設八ヶ所を空爆。多大な戦果を挙げた模様。国防省は今作戦の従軍パイロットの勲功を称える声明を発表。臨戦態勢の継続を示唆した。」

戦争報道はプロパガンダそのもので、ジャーナリスティックな批評精神に欠けていた。ただひたすら機械的に戦況を報道している。そんな印象だった。ジファは何かを考え込みながら、奥まった場所のソファに腰掛けた。私は特別ジファに話し掛けることもなく店の雰囲気を満喫しながら彼の隣に座った。客の一人一人を観察すると、一人一人が酔いすぎないほど、適量のアルコールを嗜んでいる。だ

けど議論や討論を交わす「サロン」の装いはない。個人主義的な価値観、孤独が染み渡っている。自動演奏のグランドピアノから流れる静かな旋律が彼らの孤立感を際立たせていた。ウェイターはジファの持て成しに手慣れているようだった。ウェイターは赤紫の酒類と見慣れない甲殻類の料理をテーブルに置くと会釈をして立ち去った。ジファはグラス一杯分の酒を喉に流し込み、ソファに背をもたれた。すると彼の目線の先、二階席へと続く螺旋階段から一人の女性が降りてきた。彼女のミドルヘアの髪先は軽く波打っていた。キレイな黒髪には金色、赤茶色、灰色の髪も混じっている。彼女がラフに着こなす琥珀色のシャツには、水辺で番傘をさす少女が描かれていた。彼女は鮮やかで、美しい、くすんだ緑色の瞳をしていた。奇抜なファッションの彼女は同性の私から見ても魅力的だった。彼女は私を無関心に一瞥するとジファの隣にすわった。二人は視線さえ合わせずに言葉だけを交わす。彼女の声は乾いていて凜々しかった。

「第五区画、第二次産業地域、A75居住エリアの反政府グループが一斉検挙された。国連大使の訪問に合わせた迎賓館占拠を計画している矢先だった。内通者がいる。政府も関連組織の一斉淘汰を目論んでいる。状況は刻一刻と加速度的に進行する。戦争の終結、和平プロセスへの移行は望めそうにない。ジファ、あなたの手助けが必要よ。単独行動では限界があるでしょう。あなたの動機が個人的ではあっても、私達の標的は同じ。協力するのはいいアイデア。同志として活動するのも不本意ではないでしょう？」

ジファは冷淡だった。彼には政治的情熱、変革の意志というものがない。そう私の目には映った。

「悪いな。組織だった活動には関われない。俺は反戦が目的じゃない。俺の行動は報復の原理に基づいている。時にエゴイスティックですらある。共闘すれば抵抗組織自体に損害を与える可能性があるだろう。お互い適度の距離を置いた方がいい。俺は汎用科学技術協

会の機密を知る暗躍者。政府にとっては抹殺が至上命題。俺が抵抗運動に関わるほど、弾圧が本格化する。俺は国賊として脅威なんだ。

「女性は一瞬に笑みを浮かべた。朱色に染まる薄い唇は仄かに潤っていた。」

「技術協会の機密は最早あなた自身ではないかしら。極限にまで拡張された身体能力の由来に見当がつくのは国家権力以外にないだろうから。」

ジファは彼女の言葉に興味がなさそうだった。

「それはどうだろうな。それよりAMSSOIの動きが活発になっている。俺の本拠の一つが襲撃された。俺も目的を一つずつ遂行していく。幾つか潜伏先を確保してくれないか。」

「交換条件は？」

「AMSSOIの戦略パターン、電子空間における彼らのネットワークの提供。不足か？」

「充分。」

ジファは冷酷に呟く。彼の瞳は鈍く鋭い輝きを放っていた。

「いよいよ「怪人」の復讐劇の始まりだ。」

私が息を潜めていると、ミドルヘアの彼女が気さくで愛嬌のある調子でジファに聞いた。

「ところでこのお嬢ちゃん是谁？」

お嬢ちゃん。確かに若い頃の私は童顔で中学生によく見間違えられたが。私はこれでも子育て、仕事を両立するキャリアウーマンだぞ。ジファが答える。言ってやって、言ってやってジファ。

「俺も良く知らないんだ。外出禁止令時、俺と機動隊との交戦下に現れて……。A級不穏分子に登録されたはずだから、しばらく俺がかくまっている。名前は裸留枷。優那裸留枷。不思議な力を持っているね。驚くよ。」

彼女は親しげに私に握手を求めてきた

「よろしくね。裸留枷ちゃん。」

私はとつさに閃いて彼女に言った。

「あなたジファの幼馴染みでしょ？彼に仄かに恋心を寄せていて、名前はローズ・ジニー。趣味と特技はキルト織りと時計細工。当たつてる？」

彼女は野性と理性が織りなす美しい顔立ちを少しも崩さなかった。「私とジファは幼馴染みじゃないわ。出逢ったのは数年前。それに趣味と特技はキルト織りでも時計細工でもない。」

私は彼女の細く綺麗な手をしっかりと握った。若干気落ちしながらも。それでいて私は彼女の言葉を聞き逃さなかった。

「ただ、名前は合ってる。どうして？」

ジファが愉快そうに足でリズムを踏んだ。

「なっ、不思議だろ？」

当惑する彼女。ローズ・ジニーをよそに私は声を出して笑うしかなかった。

「アッハッハッハ。」

酒場のピアノの旋律と私の演技がかった笑い声が絶妙のハーモニーを奏でていた。ローズ・ジニーは立ち上がり、彼女の案内で私達は螺旋階段へ向かった。ローズ・ジニーとジファは気心のしれた様子で談笑し、笑い合っていた。互いの利益が保障された上、方向が一致したせいで、二人の殺伐とした気持ちが落ち着いたのだろう。私は少し安心しながらも（だって怖いんだもん。この二人）ちよつと嫉妬心に近い感情も芽生えていた。失敗した。ローズ・ジニーとジファをこんなに親密にするべきじゃなかった。現実に戻ったら寓話の構成を変えよう。二人に喧嘩させて仲違いさせよう。そして異国から訪問してきた私がジファと仲良くしよう。そんな大人げない発想を巡らせながら私は二人の背中を追って行った。

ファントム 3

三階フロアに到着すると一人の小柄な、猫背の男が立っていた。

風貌はどこか浅ましい感じがした。ただ狡猾で処世術、世渡り術には長けているようだった。私はこのシビアな世界の裏社会を軽妙に生き抜く知恵を彼に見出した気がした。男はジファを見とがめると早速低姿勢で歩み寄り、交渉を持ち掛けてきた。

「ジファ。レジスタンスに協力せずに活動基盤を拝借しようなんて都合が良すぎやしねえか。俺の情報網は広くてね。もうお前の拠点の幾つかは制圧された。言わばお前はAMSSOIの籠の鳥だ。足がつくのも時間の問題だ。いいや！分かってる。ローズと取引が成立したのは。ただそれは俺にとっちゃ面白い。政治理念を共有しようなんて無理は言わねえ。ただ宰相ノルガバの拡張戦争の理論は支離滅裂だ。おまけに何を狙ってるのかも分かりやしない。だからだ！反体制運動に加わってる組織や個人をお前さんが拒否するのは妙案ではないね。利己的な人間が俺は嫌いだ。お前が単独行動を貫き通すなら、俺はAMSSOIにお前を売り渡すかもしれない。これはテイのいい脅迫だ。俺の行動範囲の広さ、フットワークの軽さについて知らないわけじゃないだろ？」

ジファは冷静だった。この猫背の男もあくどい人間ではない。多少あざといだけなのだ。

「ギヤド。要求は？」

「一週間ごとに現金で一千万クローン。出せない額じゃない。相互扶助で持ちつ持たれつだ。」

ローズ・ジニーが仲裁する。

「ギヤド、無闇な干渉はやめて。情報屋のあなたが抵抗運動に共鳴してくれているのは嬉しい。ただジファは敵対者じゃない。自分の方法が私達と相容れないと思ってるだけよ。彼も最後には政府中枢の機能停止を狙っているんだから、ターゲットは同じ。トラブルが

生じるはずもないわ。」

弁護するローズ・ジニーを押し退けてジファは一步足を踏み出した。

「一千万クローンでいいのか。」

「ああ。」

「今、光センサー透過チップを渡す。俺の口座に六千万クローン程保管してある。時宜にに応じて下ろすといい。」

ギアドは満面の笑みを浮かべた。

「賢明な判断だ。その姿勢があれば、アウトサイドでも、暗黒街においてでさえも生きて行ける。よくよくも聡明な男だ。」

ジファはしたり顔のギアドに歩み寄ると、瞬間、小型の針を彼の首筋に刺した。慌てふためいて後ずさりするギアド。手足が震えてるれつが回らない。

「な、何を・・・！？」

ジファは事も無げに言った。

「大脳の言語中枢を麻痺させる特殊な化学溶液を注入した。一ヶ月から一カ月半程度言語駆使能力が停止するだろう。小脳も機能不全に陥る。体の均衡感覚が失われ、正常な生活は出来ない。独立看護師でも雇って看病してもらうといい。ギアド、お前が快復する頃には俺のプランも完結する。その時は一緒に祝杯でもあげよう。」

ギアドはふらついて膝から崩れ落ちた。

「おま・・・え！」

酒場のスタッフがすみやかにギアドを介抱し、カプセルに収監すると運んでいった。彼らはトラブルをトラブルとも思わないのだろう。思惑の入り乱れる「サロン」。ここはそういう場所なのだ。私は平然と立ち去るジファに危ういアンモラルな香りをも嗅ぎ取っていた。ローズ・ジニーが私達二人にあてがってくれたのは美術館の天井部屋だった。部屋は酒場から空中回廊で繋がれていて互に行き来できた。天井部屋、「美術館のアトリエ」はキャンバスや画材道具、モチーフの数々、デッサンの多くで散らばっていた。白い壁

はアトリエを澄みきった印象にしていた。それはこの天井部屋の主人、画家の心の平穏を保っているようでもあった。ローズ・ジニーは簡潔に言った。

「アトリエの主人は絵の素材を求めて放浪中。しばらく帰らない。ジファ、あなたが計画を実行する段階になったら一声、声を掛けて何も言わず命を危険に晒すのはあなたの悪い癖。お願いね。」

そう言い残してローズ・ジニーは席を外した。本当に洗練された女性だ。女性という性別に甘んじる事もなく、過度にフェミニンステイックな要求もしない。バランスのある安定した女性だった。ジファはキャンバスの一つを抱えあげると私に尋ねた。

「どう思う？」

キャンバスには様々なカタチの文字、多国籍の言語が並べられているだけだった。その「絵」は青紫色を土台にしていた。実験的抽象画。私はそれ以上の感想は抱けなかった。文章の一つがアルファベットで書かれていて、読み取れる。

「林檎は食べられる。林檎は栄養素を多分に含む。林檎を食べる人間は健康体を維持出来る。・・・ジファ。何これ？」

ジファはキャンバスを画架に立て掛けると言った。

「人工知能の分析だよ。このアトリエの主人とは親交が深くてね。俺のアイデアで絵画を幾つか描いてくれた。」

「この抽象画も？人口知能の解析？どういうこと？」

ジファは落ちて着いていた。まるで思索家だった。その表情は彼の抱く暗い計略と相対しているようだった。

「人工知能の言語読解力をつくり上げる基礎は演繹法、三段論法から始まったんだ。そう、この林檎に関する文章のようにね。食べられる林檎。栄養素を含む林檎。その林檎を消化吸収する人間は健康体になる。この三つの意味を三段階に分けて人工知能に理解させた。単純なものだよ。」

私は彼が何を言っているのか理解出来なかった。人工知能について彼が話するのはこれで二度目だ。何か彼に関わりがあるのだろ

うか。彼は続ける。

「人工知能の更なる発展には言語解析学と認知科学の発展が必要だった。研究初期においては、当時としては最高峰の知性を持つ技術者達が共同研究に参加した。彼らは文字列を区切って、一つ一つの単語を機械に理解させ、一つの文章が文法的に正しいかどうかを判別させる作業を行った。「形態素解析」という奴だ。これが予想以上に手間の掛かる作業でね。名詞、助詞、動詞など品詞ごとに分類してその意味を人口知能に理解させなければならなかった。人口知能の開発なんて初めは可愛いものだったんだよ。皆が無邪気に熱中し、人間の思考プロセスをどこまで再現出来るか期待に胸を膨らませていたんだ。親父もその無邪気な科学者の協力関係に憧れて汎用科学技術協会に入会した。・・・それが大きな災いをもたらすものだとは知らずに。」

私は何気なく彼の父親について尋ねた。

「殺された科学者カルツアとあなたのお父さんは同僚？研究仲間だったの？」

ジファはしばらく考えて答えた。

「そうだ。お互い国家軍略機構の意向にそぐわなくてね。目の敵にされていた。理想主義的な学識者など国家にはいらんというわけだ。」

「汎用科学技術協会っていうのが開発、研究していたのは人工知能だけ？何か・・・問題か？」

「軍事、経済、社会活動、あらゆる分野において文字通り「汎用」出来るテクノロジーを進歩させていた。人工知能のセクシオンに配属されていたのが、親父、カルツア、後数名の科学者兼技術者だった。」

そう言うときジファはもう一枚の絵画を私に見せてくれた。それらは螺旋構造をしたDNAのカタチを使って女性の肖像を描いたダブルイメージの絵画だった。構成が素晴らしく完璧に近いクオリティだった。この絵には絵画にうとい満足出来た。

「これは？」

ジファは確信犯的な笑みを浮かべた。

「膨大な量のヒトゲノムが解析されて、人類が望んだのは知的、運動、創造能力の覚醒。病の根絶。そして延命だった。事実、塩基配列を組み換え、生体を再構成すれば、超人的な能力を持つ人間を作るのも可能だった。・・・ただしその遺伝子改良をほどこすには人間の知性をはるかに凌ぐ知性体が存在しなければならなかった。少し情報の断片が繋がって来ただろう？」

「良く分からないわ。」

「ならそれでいい。おいおい、明らかになるだろうから。」

ジファは私に近づくと半透明のシールを私の首筋に貼り付けた。彼は説明した。

「このシールを首筋に貼っておくと、微量な電気信号が脳内に伝達され映像を喚起する。俺の首筋と通信性を持つていて、俺には君の動向が、君には俺の動向が把握出来る。君と常に行動するわけにもいかない。同時に君の気まぐれにも任せられない。俺には君を保護する責任がある。君の秘密の謎解きにも興味があるからね。」

「二人はいつも一緒というわけね。」

「そう。うら若い乙女としてはもつとスタイリッシュな男が良かったか？」

「アッハッハッハ。」

ジファも微笑んでアトリエから離れた。私は初めの抽象画。文字が羅列された絵画を眺めた。すると不思議で気味の悪い立ち眩みが私を襲った。私はこめかみを抑え、頭痛に耐えた。この感覚、良く似ている。良く覚えている。あの時、あの時と一緒だ。文字が認識出来なくなり、この空間に移された時と一緒だ。私は目を見開くと絵画の文章を読み解こうとした。文字が解体し、無意味な線の重複にしか見えない。私は痛みを感じ、苦しくなって目を閉じた。遠く・・・意識が離れていく。気がつくと私は再び自分の現実、執筆オフィスの椅子に腰掛けていた。目の前には陽気にポップソングを

口ずさむ夏芽がいた。私は気の抜けた口調で彼に呼び掛けた。

「夏芽君？」

夏芽も気の抜けた顔をしていた。

「どうしました？何かありましたか？裸留枷さん。」

私は彼の何気ない言葉で自分が現実に戻ってきたのがわかった。

私の日常は平和で、ジファやローズ・ジニーが発散していた緊張感とはほど遠かった。窓の外からは雀のさえずる鳴き声が響いてきている。私はとりあえず、何事もなかったように取り繕い、小説の資料をめくっていった。外はとても穏やかな陽気だった。

冷血 1 優那裸留枷

物凄い効果音だ。ノイズと電流の進む音、亜熱帯地方の鳥の鳴き声にも似た音が混ざったS Eが舞台上に響き渡る。舞台装置も細かいディテールに凝っていて斬新で奇抜。舞台両脇には三メートルほどの大きさの、女性のデスマスクが置かれている。そして筒状の鉄管が女性の顔に巻きついて彼女の口を塞いでいる。舞台中央には解体された懷中時計が砂丘に埋もれて時を刻む。舞台美術は白銀色をした裸婦像だった。美しい体を晒す女性がしなやかな媚態を示し、まゆの中から今にも姿を現そうとしている。さらに色とりどりの紋様のチョウチョウ、極彩色に染まるトンボ、光を明滅させる蛍などの昆虫が、硝子張りの近代的尖塔に向かって飛び立っている。美術の両隅には三つずつ鏡台が立て掛けられていて役者達の姿を映し出している。客席で煙管を吹かして、愉悦にふける音々がハスキーな声で演技指導をしている。彼女の要求は動きから発音に至るまで細密で事細かく、具体的に何より細心の注意が払われていた。役者たちは、この若干、アンモラルな雰囲気を漂わせる現代演劇の旗手に心酔していた。だが同時に彼らは自分の意見をも口にしていった。意見交換は活発で民主的な舞台作りが心掛けられているらしい。私は言うつとあの出来事、私が確かに経験したあの現象について音々に相談しに来ていた。音々も私と同じクリエーター。創作に行き詰まると心のバランスが崩れて幻視でも見るのかと確認でもしたかったのだ。私は音々より八つ程座席を隔てた椅子に腰掛けて、舞台上の稽古の風景を眺めていた。音々は片目を見開いて特有の雅やかさを振りまく。彼女は煙管の煙を宙に吐き出すと私の隣に腰掛けた。「で、どうなのよ。もどかしい恋心？子育ての悩み？創作の行き詰まり？私を霊媒師並みにあてにしてきたの？何か相談事があるんでしょう？」

私と音々は遠慮する間柄ではないが、話の内容が余りに突飛なの

でマトモに取り合ってくれるのか私には気掛かりだった。私はしばし口ごもった後、淡々と話を始めた。音々は夢現の状態で舞台の隅々に目を配り、演出家としての仕事を全うしていた。私の話の中頃になって音々が気付いた。

「えっ？あんたもう話始まってたの？あんたそんなぼつーと一人語りする女だったっけ？もつと覇気出せよ。」

「じゃあ、聞いてた？私の話。」

「大まかにね。」

私は経験した内容を丁寧に音々へ話し終えた。音々は口から吐き出す煙で輪っかを作り出すと私を潤んだ瞳で見つめてにやけた。

「あんた、ヒロインかコカインでもやってんの？駄目だよ。手え出すんなら大麻まで。幻覚作用のある薬物には手出ししない事。法を破るなら自分の心身状態を正常に保つ程度まで。分かった？」

「音々、私の話真剣に聞いてた？」

「聞いてた。聞いてた。自分の寓話と名前が一致するレジスタンスの連中と会ったんだろ？夢が具体化してめでたいこった。さあ、打倒悪の帝王。」

「こら、やっぱり私の話、真に受けてないだろ！」

私は悪ふざけで音々をヘッドロックした。音々は足をばたつかせて叫んだ。

「Oh！レフリー！チョーク！チョーク！」

はしゃいで、戯れ合っている私と音々を、舞台上の役者達が演技の手を止めて呆然と見つめている。私はしとやかにしおらしく、乱れた服装を整えた。音々はカラカラと笑い声を立てた。

「どうしたの？みんな？稽古に集中、集中。舞台初日まで後間近だぞ。」

とりあえずは信奉されている舞台作家の言葉とあって役者達は再び演技に没頭し始めた。音々は煙管の火を消して懷に仕舞った。

「まっ、なんだ。私達クリエーターは何かと神経磨り減らす機会の多い人種。同業者にでも請け合ってみな。私も出来る範囲で手助け

してやつからさ。あんまり思い悩みなさんな。いざとなったら乃？の奴から伊瑠の養育費、もぎとりやいいんだから。」

「そりゃ暴論だ。私から断つたんだから。それに・・・同業者って誰？」

「いるでしょうが。気配りが利いてて思いやりの深い！情感あふれる優しい作家が。」

「誰？」

「あんだね。周りが見えないの？いるでしょうが。塔？。風氏塔？君。頼りがいがあるぞー。」

そう言つて二人は顔を見合わせてため息混じりに声を合わせて笑った。

「そう。塔？君。」

実際、私には彼がどことなく頼りなく見えたのだ。まあ気休め程度にはなるかもしれない。彼、沈着で穏やか。教養も充分だからいかも。音々みたいなアングラ女と実りのない総合格闘技に励んでいる場合ではない。すると音々が私に振り返つて尋ねた。

「何か言つた。裸留枷。」

「凄い。あなたテレパシー能力でもあるの？」

「それがあるんだ。覚醒したのは七つの時の小学生の夏。蝉取りに出掛けた私は鬱蒼と生い茂る森の繁みの中で・・・。」

「じゃ、行くね、私。いろいろアリガト。」

「ここからがいい所なのに。クライマックス！クライマックス！」

「また機会があつたらね。」

「そうかい。」

ふてくされる音々を残して、私は携帯でアポを取ると、塔？の執筆オフィスに向かった。突然の訪問だったのに、塔？は快く迎えてくれた。私がオフィスのインターホンを押すと毛並、色艶のいいシヤム猫を抱えた塔？が出迎える。

「あつ、いらつしゃい裸留枷さん。どうぞ上がってください。」

「品のいいシヤム猫ね。血統書付き？飼ってるの？」

「はい。この街の近くに引っ越して以来の付き合いです。店構えのいいペットショップで購入したんですよ。珍しかったなあ。この動物。」

「珍しい？猫が？」

私と塔？は他愛のない猫談義を交わしながら、彼のオフィスに向かった。塔？のオフィスには観葉植物が所狭しと置かれていた。それはさながら熱帯地方の密林のようだった。橙色の二十センチ程の花弁を持つ花の上では七色の原色を持つ物珍しいオウムがクチバシで翼をケアしていた。

「このオウムは飼ってるの？」

「いえ、このオウムはいつの間にやら紛れ込んだんです。自分の生まれ故郷とこの執筆オフィスの環境が似ているから馴染んだんでしょう。」

「このオウム、日本には生息してないよ。ペット業者が輸入して取り逃がしたのかな。」

「そうですね。外来種が土着すると生態系が壊れますからね。由々しき問題だ。」

私は振り返って塔？の顔を見た。自然保護に無関心なのか興味がないのか、漠然と感想を述べる彼は掴み所がなかった。塔？はにこやかな笑みを浮かべている。ハロルド眼鏡の奥には気負いのない知性が滲み出ていた。塔？は三毛猫を床に下ろすとキッチンへ向かった。

「何か飲みます？ダージリンティーなんて如何です？癖があつて美味しいですよ。」

「じゃ、よろしく。」

「猫のペットフード「ペディグリーチャム」なんておつまみにどうです？中々に口当たりが良くて美味しいですよ。」

私は苦笑いを浮かべた。

「結構！」

私はオフィスの中央の足下、硬質ガラスで隔てられた水槽を覗き

込んだ。熱帯魚が優雅に泳いでいる。熱帯魚は可憐で躍動的だった。するとティーセットとお茶菓子を持って塔？が戻ってきた。

「中々、品のいいインテリア、室内装飾でしょう？その硬質ガラスの水槽も業者の方に無理にお願いして作ってもらったんです。」

「世話が大変でしょう？」

「いいえ。多少手間が掛かってもらってこれだけリラックス出来るならば苦痛じゃないですよ。」

「そうなんだ。」

私は塔？の運んできた盆を覗き込んだ。どうやら「ペディグリーチャム」はないらしい。ちょっと安心した。

「どうかしましたか？」

「いいえ何も。」

「じゃあ、あの籐椅子にでも座って話をしましょうか？急な用事なんでしょう？音々さんからも電話が掛かってきましたから。「ノイローゼ気味だから構ってやれって。おかしくなったら近所のストレスケア医院にでも送ってやれ」って。」

私は拳を握り締めた。

「音々、あいつめ。」

私は憤懣やる方ない思いを押し殺しつつ、塔？と話し込んだ。私の身に起こった出来事、別世界と自分の寓話との類似、そして別世界の現実味について。私は一部始終を塔？に伝えた。塔？はしばらく考え込んで、閃いたように樂觀的な顔つきになった。

「一つの推理です。あくまでも。ひょっとしてそれはREM睡眠状態で見た夢じゃないですか。夢には覚醒時に機能していない脳の働きを活性化し、刺激し続ける作用があるんです。裸留枷さん、何か欲求不満があるとか、抑鬱状態にあるのではないですか？だから抑えられている脳の働きを回復させるためにそんな夢を見た。違いますか？」

私は案外、的を得た塔？の解釈に感心した。

「うん鋭い指摘ね。私、子育てと仕事に追われているから。現実逃

避をして心身双方の療養が必要だったのかも。」

「でしよう。」

「ただ何度も同じ種類の夢を見るなら問題ね。音々の忠告も意外に的外れではないのかも。」

塔？は間を置いて、もう一つの分析を提示してきた。

「別の解釈をすれば、・・・少しオカルティックです。パラレルワールドという考えをご存じですか？」

「うん、知ってる。現実と似ていながらも、少しずつ違いがある別世界。その一つに私が取り込まれたとでも？」

「参考の一つ。推理の助けにはなるでしょう。継続的にその現象が起こるのならば可能性の一つとして考えるのもいいですね。」

「非科学的な発想は余り好きじゃない。ただ現実には科学で説明出来ない不思議な現象があるのも事実。・・・塔？君。参考になったわ。」

「もういいんですか？裸留枷さん。僕でよければいつでも力になりますよ。」

私は籐椅子から立ち上がった。塔？も私を見送ってくれるようだ。私は最後、お茶請けに出されたお菓子を口に一つ放り込んだ。

「ところでこの緑色と赤茶色をしたおつまみは何？コリコリとした歯ごたえで美味しいけど。」

「ああ、それキャットフードです。」

おいコラ！私は後味の悪い食感に苛まれながら帰宅の途についた。すると私の紺色の軽自動車の前方に黒い車が車線変更してくる。交通マナー違反もはなはだしい。そう思うが早く、黒い車の後部座席のガラス窓が開くと、そこから二人の黒服の男が風に衣服をたなびかせながら、私のミニのボンネットに飛び移った。信じられんことをする奴だ。私は状況が把握出来ずに、ハンドルを切り、男達を振り落とそうとした。人間、パニックに陥ると妙に冷徹で非情になるものだ。私は激しく蛇行運転を繰り返した。すると男二人は吸盤状の金属手袋を窓ガラスに密着させると体を固定させる。おい、二人

とも、もう少し私の常識の許容範囲の行動をしてくれないかい？ 男達二人は頑強な面持ちで拳を私のミニのフロントガラスを殴りつけ始めた。ひび割れ、壊れていくガラス。イカン。これはイツカンの終わりだ。死ぬんならもう少しハートウォーミングな死に方をしたかった。こんな理不尽な結末なんて私は想像だになかったぞ。そんな気持ち心がをよぎった瞬間、あの偏頭痛、現実感の離れていく感覚が私に起こった。景色の動きが緩慢になり、実体が薄れていく。すると私の体と心は私にとっての現実から離れ、「時計塔に眠る怪人」。私の寓話の世界へと移されていった。遠のいていく私の意識は黒服の男達の胸元に小さく刺繍された文字を読み取った。そこには確かに「AM SOSI」と綴られていた。気がつくとは美術館天井部屋のアトリエのベッドに横たわっていた。かすかな眠気と気だるさが私の体を襲う。私は情報をまとめようとした。私がこの別世界を行き来出来るのは、百歩譲って納得できるとしよう。REM睡眠なり、精神障害なり、過労の蓄積なり。どうしても解釈出来る。ただ、何だ？ あの男達は？ 胸元の刺繍には明らかに「AM SOSI」の文字があつたぞ。二つの世界を行き来できるのは私だけではないのかい？ さらに彼らには「確実に！」私への殺意があつた。そんな過剰なバイオレンスの論法で物事を進めるのはやめにしないか？ イカン。考えがまとまらない。私はパニックで立ち眩みを起こしそうだった。取り敢えずはベッドから起きて、一杯煎れたコーヒーで一呼吸置くことにした。鏡に映る私の顔は、純粹無垢な少女の面影の残る顔立ちにまた戻っていた。一々意味を分析してたら、おかしくなりそうだ。私は画架の周りに置かれたテーブルにコーヒーを置いて、椅子に腰を下ろした。辺りを見回してもジファはいない。こんな時に限って、怪人と心通わせる少年がいないのだ。この一連の騒動、現象を分析出来る可能性が最も高いのはおそらくジファであるはずだ。彼ならAM SOSIの機密情報の内容を知っているだろうし、私が襲われた理由にも見当がつくだろう。

「おい、ジファ。」

私が優しげに呼び掛けても返事なし。ジファ。なぜ今この窮地に、なぜ今このピンチにいない。私は神経質に、苛立つ心を鎮めながらコーヒーをたしなんだ。リラックスすると人間、脳の働きが良くなるのか、いいアイデアが浮かぶものだ。私はジファが私の首筋に貼ってくれた半透明のシールを思い出した。今現在もジファがシールを首に貼りつけていて、なおかつこの高度にハイテクノロジーな道具がお利口に機能するなら、ジファの居場所を私に脳内伝達してくれるはずだ。そう閃くと私はコーヒーに一口、口をつけて瞳を閉じて心を穏やかにした。私が軽い瞑想状態に入るとぼんやりと映像が頭に浮かんだ。

冷血 2

どこか仄暗い室内が見える。その部屋の壁の四方には、据えつけられた発光ダイオードが紺碧に点灯している。そしてU字型のデスクに男が座っている。その男は、楕円形の直系五メートルはあるだろう湖面を隔ててジファと向かい合っているようだ。水面には天井から規則的に水滴が零れ落ち、同心円上に波紋を広げていく。紺碧の灯が湖面を群青色に染めていた。ジファとその男は旧知の間柄らしい。互いに胸を開いて話をしているようだ。ジファが若干鋭い口調で男を問い質した。

「ドージ・カルメロ。あなたの政府上層部への密告がなければ、カルツアはもちろん、俺の父も・・・（ノイズ音で聞こえない）。汎用科学技術協会の計画は頓挫、もしくは中長期的に停滞したはずだった。あなたは傲慢で、なおかつ権力迎合的な追従者だ。宰相ノルガバにおもねるのを拒否しなかった。科学的知性を除けば、あなたは殺戮の道具を作る機械的技術者だ。人間性に欠けている。あなたは報いを受けなければならない。」

ドージ・カルメロと呼ばれた男。薄明かりで、ぼんやりとしか顔が見えない。白髪の間髪を混じるあご鬚と、まだ壮年の意気盛んな研究者としての顔が不調和を見せていた。

「ジファ。ロウの背任、カルツアとの共謀は技術協会への背反に他ならなかった。技術協会と言えども自由な機関、組織ではない。政府の、そして宰相ノルガバの直属、統括下にあるのだ。彼の政治的意志にそむく人間ならば、排斥されても仕方がない。君の父親ロウとカルツアの・・・（またノイズだ）避けられなかった。」

ジファはドージ・カルメロを問い詰める。その口振りは凄絶で攻撃性に満ちている。怒りさえ滲ませているようだ。

「あなたは汎用科学技術協会の一員としてではなく、一人の人間として良識的な判断を下すべきだった。ましてや正常な見識を働かせ

た同僚を権力に引き渡すなどやるべきではなかった。」

ドージ・カルメロはジファの批難にも動じる気配はない。自らの哲学と政治信条、科学観を口にした。

「A Iの研究は軍事利用が出来るか、出来ないかの分水嶺にまで来ていた。そこにモラルや倫理、自己規制などの夾雑物が入り込む余地などない。科学は発展するべくして発展し、進歩するべくして進歩するのだ。初めは拒絶感があるう。だが民衆はやがて馴れ親しみ、常識として受け入れる。科学の探訪とはそういうものだ。君の父親とカルツアは夾雑物そのものだったんだよ。抹消すべきだった。それが我々の職務でもあったのだ。」

ジファの声に、より鋭さが増す。彼は激情を押し殺し、冷徹に彼を責め立てる。

「あなたは国家の軍略に組み込まれたテクノロジーに疑問の一つさえ抱かなかったのか？真理の探究、科学の人類への貢献、テクノロジーの世界的普及なんて俺も奇麗事は言わない。ただ一学識者としての思考はもつと柔軟で良かっただろう。取るべき手段は多岐に渡っていた。権威への同調だけが選択肢ではなかったはずだ。」

ドージ・カルメロは冷淡だった。彼は国情と世界情勢を克明に分析していた。

「ジファ。理想論は必要ない。我々は戦争をしているのだ。しかも苛烈で過酷な。国際法の庇護などまるでない陰惨な戦争だ。あらゆる手段を講じなければ我々は、君も！私もだ！殺されるんだよ。そこには融和思想も人類としての連帯感などもまるでない。そこには生存競争に邁進する人間の衝動が存在するだけだ。我々は進化の過程で淘汰される人種になつてはならないんだよ。勝利は必須なのだ。そのためにはあらゆる手立てを尽くすべきだ。そうだろう？ジファ。」

ジファの口調にかすかな穏やかさが宿った。彼は大きく息を吐き出す。

「あなたの見解は存分にわかった。それでは俺が裁定を下す番だ。」

俺自身が律法となり、規律となり、不文律となり、一人一人裁いていくだろう。俺の価値指標に背く人間、逸脱者は皆、押し並べて粛清される。俺は執行人だ。審判はそうなるべくして下されるだろう。暗澹と、嘆きの岸辺に立つ俺自身の手によって。」

一瞬の静寂。湖面を雫が静かに、周期的に弾いている。ドージ・カルメロは最後に尋ねた。

「一つ聞こう。君の復讐劇が始まったとして、なぜまず最初に私を狙う？なぜ一介の科学者に過ぎない人間を標的に選んだ？社会的衝撃、政府への打撃を考えるならば、政府高官、軍幹部、技術協会会長ノマ・ゲルマノなど幾らでもいただろう。」

ジファは丁寧に応じていく。彼の心は静けさに満ちているようだった。

「俺の報復。体制、軍産複合体への反逆はヒエラルキーの頂点を徐々に目指していく。そのプレリユードがドージ・カルメロ。あなただったというだけだ。」

「私は下層域に生息する貧民というわけか。それもいいだろう。君の歌劇を開演するといい。」

ジファは銃口をドージ・カルメロに向けた。ジファは何かの著作の一節を暗唱する。

「罪深き者と清廉なる者を分ける境界が崩れし時、かの人はある者には光を照らし、ある者には闇をもたらすだろう。かの人の意志において、かつて私自身が復讐すると宣言したかの人の名において鉄槌は振り下ろされる。濃紺の空に裁きの声は響き渡り。我はただ祈り、永久の安息を願うのみである。ここに切なる願いを込めて、祈りを捧げん。」

引き金が引かれ、銃声が響き渡ると同時に映像は途絶えた。私は瞑想状態から覚めると状況を整理した。ジファは復讐のため？人を殺している？ジファは復讐心？何か妄信にとらわれていて、殺人に手を染めている？彼はヒエラルキーの頂点を目指すと言った。ならば彼は殺人を繰り返すつもりなのだろうか。私は瞬時に思った。彼

を止めなければ。例えどんな怒りと苦悩の理由があつたとしても。

私は考えるよりも早く、本能的に、駆り立てられるように美術館のアトリエを飛び出していた。私は回廊を走り抜け、螺旋階段を降りていくと酒場のバーカウンターに掛け合った。私が激しく取り乱していたので、高潔さを装う店員は取り澄ました顔を崩さずに、怪訝そうにしているだけだった。私は面識の一切ないその店員にひたすら訴えた。私は困惑していて口にする言葉は乱れていた。

「ローズ！ローズ・ジニー！彼女に、彼女に、私が！私に彼女を会わせて！酒場の一角に拠点、彼女は本拠を置いてる。そうでしょう！？」

店員は口止めをされているのか、真剣に私の要求を取り合ってくれなかった。するとカウンターの奥から身軽なファッションを身に纏った三十代前半程の男が現れた。赤と黒を基調にしたジャケットが鮮やかな男性だった。少し不精でフランクな印象、右目は見開いているものの、左目は不均衡に半覚醒状態にあり、気さくな顔立ちが親しみが持てた。私は動揺しながらも妙に冷静だった。私は彼を目にとめるなり、こう言った。

「あなたの名前はカザ・ノルティ。ローズ・ジニーとジファの級友。ジファとローズ・ジニーの仲に嫉妬して司祭ストルツァにジファを引き渡した男。趣味は天体観測と、惑星運行の計算。」

男は戸惑って、眉間に皺を寄せると返答した。

「お、おお。大部分は不正解だが、名前は合ってる。良く分かったな。お嬢さん。」

私は嬉々として彼を指差した。

「でしょう！？あなたは優しくて義理深い性格なんだから嫉妬しちゃ駄目よ。嫉妬は人間の心に破滅をもたらす毒の密。気をつけて。」

カザは私に気押されていた。

「わ、分かった。」

彼の柔軟な態度を見て、私は我に返った。こんな話をしている場

合ではない。

「カザさん。ローズは！？ローズ・ジニーはどこ？彼女に会わせて！」

カザは冷静だった。私の話を慎重に検討していった。

「ジファが殺人に手を染めた？彼には彼のプランがあるだろう。この動乱下にある国情では対立する陣営の死傷者、犠牲者は避けられない。彼は彼の計画を軌道に乗せた。それだけのことだ。」

私はカザの瞳をひたむきに見つめた。

「ローズに。ローズ・ジニーに私を会わせて。」

私の切実な思いが彼に通じたのか、カザは沈黙し、了解してくれた。

「裸留枷。優那裸留枷だったな。君を信賴して、彼女の「オフィス」に案内しよう。ただし、口外は無用だ。」

「もちろん。」

私とカザはバーカウンターの扉の向こう、楔字型の通路を幾度か右折、左折を繰り返し、ローズ・ジニーの「オフィス」に辿り着いた。・・・はずだが扉がない。白い壁に紫の染みが数ヶ所、目につくだけだった。カザが薄く黒い掌大の感光板を紫の染みにあてるとセンサーが反応して「オフィス」への扉、壁にしか見えなかった場所が両開きの扉として開いた。感光板の電磁気信号がカザを判別したのだらう。「オフィス」は足の踏み場もないほど、導線やコンピュータの配線、そしてコードが入り組んでいた。室内中にメカニカルな電子機器と回路があり、壁に敷き詰められた機械基盤が私を圧倒した。薄暗い電灯で照らされ、ディスプレイが幾つも配置されている。そしてディスプレイの一つが置かれたデスクの前、簡素なデザインの椅子にローズ・ジニーは座っていた。彼女は振り返るとカザに尋ねた。彼女は眼鏡を掛けていた。

「何？どうしたの？カザ。そんなに慌てて。」

彼女、ローズ・ジニーは膨大な事務処理と情報整理を行っていた。彼女は理知的な顔をしている。そしてどこか冷たい印象もぬぐえな

かった。カザは事情を彼女に話した。彼女は軽く頷くと私に優しく話し掛けた。まるでごねる娘をなだめる母親のようだった。

「裸留枷。私達は互いのテリトリーに踏み込まない条件で交流している。あなた達に滞在先を確保したのも過干渉を避けられる前提があつたから。彼は私達への協力を拒んだし、私達も彼への過度の要求を控えた。双方が分かち合ったのは機密情報と滞在先。何の過不足もない。理解出来た？」

私は真っ向から彼女に反論した。

「手段やプロセス、動機が違つても標的は同じだと言つたのはローズ・ジニー。あなたでしよう？一度は協力を求めた人間、同胞の一人だと解釈しても矛盾はないはず。彼の危機を救つても矛盾しない。私の主張は決して子供染みてはいないはずよ。」

ローズ・ジニーは誠実に私の意見に耳を傾けていた。ただ彼女の返答は私の期待を裏切るものだった。

「裸留枷、あなたは直情的に考え過ぎてる。確かに私達とジファは目的を共有するのも可能。ただ誤解しないで。私達とジファは協力関係にない。双方の方法論に不可侵だからこそ、互いに警戒心を抱かないし、緊張感もない。筋道立つた論理だと思うけど。どう？納得出来た？」

私は彼女を軽蔑的にとがめた。

「ローズ・ジニー、あなたはリスクとメリットを数値的に考えるのね。時に理不尽で不合理な感情が入り込む余地を自分自身に与えてもいいんじゃない？この「オフィス」のようにあなたの思考は機械的よ。」

彼女は即座に反論した。

「機械や数値を蔑視するのは間違い。感情や心の選択基準も人間の経験的な知識、データで構築されている。私は無機的で感情のない人間ではない。何よりも私は組織の利益を優先する模範でなければならぬ。私的な問題であればあるほど、繊細に自己分析をしなければならぬのよ。・・・理解して。」

私は覚悟を決めた。ローズ・ジニーとは別れる。私一人でもジファを助けに行く。彼を死の危険から遠ざけたいし、彼がカルマを重ねるのも止めたい。私は彼女を責めた。

「組織ね。あなた達、反戦組織でしょ？一人の人間が人を殺し、殺される可能性を秘めているのに、それを見過ごして何が反戦？自己倒錯にも程がある。幻滅してあきらめるわ。あなたは自己弁明しているだけ。独善的なのは、戦争を遂行している国家でも、独立的なジファでもない。独善に溺れてるのはローズ・ジニー、あなたの方よ。」

ローズ・ジニーは穏やかな瞳で私を見つめていた。私は踵を返して駆け出した。「オフィス」を出ようとする私の腕を力ザが引き留めた。

「どこへ行く！？裸留枷！」

「決まってる。私だけでジファを救い出す。彼の苦しみから、彼が胸に秘めた憎悪から。」

力ザは説得する。

「感情に流されるな。裸留枷。武器も持っていない、ジファの所在地も分からない。君一人で何が出来るっていうんだ。」

私は力ザの手を振りほどいた。

「離してよ！」

すると沈黙していたローズ・ジニーが私に呼び掛けた。

「いいわ。裸留枷、いらっしやい。あなたの衝動を尊重するわ。来なさい。」

「ローズ・・・。」

彼女は手早くコンピューターを駆使してデータ検索を始めた。私は誘われるように彼女のそばに歩み寄った。モニターには国家機関の施設の数々。そしてその構造が大きく表示された。

「あなたの情報は断片的ね。手掛りは？」

「ジファは相手の名をドージ・カルメロと呼んでいた。」

「それで充分。ドージ・カルメロは汎用科学技術協会の理論的スポ

「クスマン。恐らく場所は技術協会の施設内ね。他には？」

ローズ・ジニーはプログラムをチェックし、技術協会の設計図をモニターに映し出した。

「楕円の湖が部屋の中央に。曲線の電灯？それが壁に据えつけられていた。後、観葉植物が室内装飾になっていたような・・・。」

ローズ・ジニーは事実の切れ端をヒントに、あてはまる部屋を探した。すると私の記憶に鮮明に残る室内の間取りが拡大して映し出された。

「ここ！ここだ！」

私は叫んだ。ローズ・ジニーは落ち着いて、解き明かす。

「ドージ・カルメロの第三執務室ね。リラクゼーションと黙想を兼ねたメデイテーション・ルーム。観葉植物は彼のエコロジストとしての一面を表している。」

カザがローズに尋ねる。

「侵入経路は？」

「ジファは空路を辿ったはず。第三執務室までのプロテクト・遮断扉は十二。それぞれ10の30万乗程度のセキュリティ・コードが記録され、一日ごとに更新されている。ジファが持つアルゴリズムを利用すれば解析出来る。完全な乱数ではない。周期的に相似値を幾度か示したはずだから。」

ローズ・ジニーはせわしげに立ち上がると武器収納庫を開き、兵器を装備、装填した。私にはレーザー・ガンを手渡す。戸惑う私に彼女は事も無げに言った。

「あなた、彼の事好きなんでしょ？」

私は自分の頬が火照るのを感じて慌てて取り繕った。

「えっいや。そんなんじゃない・・・。えっと確かに嫌いではないけど・・・。」

ローズ・ジニーは瞳に微笑を浮かべた。

「行くわよ。裸留枷。彼の援護射撃に。」

「はい！」

私は力強く頷いた。私とローズ・ジニー、カザの三人は「オフィス」から出て、空へと？がる格納庫へと向かった。

冷血 3

そこには幾つものマシンが待機していた。

「凄い。」

私は感嘆の溜め息を漏らした。ローズ・ジニーは言う。

「今回は少数進撃だから柔軟可変駆動機、略称「FVM」を使う。ついて来て。」

私は鈍い銀色の光を放つボディ、「FVM」を恍惚として見つめた。ローズ・ジニーは手短に機能の説明してくれた。彼女の頭脳は明晰だった。

「見た印象は陸路専用を彷彿とさせる。実際は水路、空路いずれも推進可能にする変形型のマシン。「柔軟」で「可变的」と呼ばれる由縁ね。胴体は直立型二足歩行のマシンにも変型する。装備は迎撃・追撃弾道弾、光高密度エネルギー、電磁波燃烧装置、光波ソード、誘導砲弾、光学シールド。以上よ。搭載されたAI機能が操縦技術を補助してくれる。不可視領域の攻撃も回避出来るわ。AIが導入されている分、ジファは「FVM」を毛嫌いしてたけどね。」

んぬぬ、なにやら難しいが、性能もなんとかわかった。心の準備も整ったことだし。それにしても「FVM」の能力を力説するローズ・ジニーの目はちよつと怖かった。私とローズ・ジニー、カザは「FVM」に乗り込んだ。格納庫の扉が開いて、「FVM」は空へと飛びたった。瞬く間に遠ざかる琥珀の広場の全景。「FVM」のサーチシステムが汎用技術協会の位置を特定し、AIが安全経路を確保した。ローズ・ジニーは空路を経て都市部に侵入した後、技術協会へと向かうつもりらしい。夜闇を滑空する「FVM」から眺める夜景は壮観だった。私はふと小さく息を漏らした。「FVM」はネオンの華々しい都市中枢、高層ビル群の狭間へと進み、加速していく。エアカーの行き交う交通路は混雑していて、ニアミスが頻発している。自動操縦機能で衝突事故を防いでいるのだろうか。にし

てもローズ・ジニーの操縦はやけに荒い。私は試しに聞いてみた。

「ローズ・ジニー。運転はマニュアル？オート？」

ローズ・ジニーは昂揚している。

「オート？マニュアル？随分古い表現ね。人間の神経系統とAIが連動して安全運転を！ディレクトしてくれるのよ！任せておいて！」

・・・ローズ・ジニーの目は怖かった。彼女はハンドルを握ると人格が変わるタイプらしい。彼女も「可変的」なのか。ナビシステムが技術協会のある区域へと「FVM」を誘導する。遠くに見える技術協会敷地内ではなにやら騒ぎが起きている。噴き上がる爆炎。ジファと護衛システムが争っているのだろうか。ローズ・ジニーが「FVM」の指示系統を調整すると、「FVM」は噴煙の立ち上る場所へと進む。瞬間！機体が激しい反動を受けた。ローズ・ジニーが叫ぶ。彼女の目つきは異様に鋭い。

「技術協会区画内の防護電磁場ね。テクノロジーの進歩は体制側だけじゃないのよ。あなどらないで。」

「FVM」の侵入を阻む防護電磁場。ローズ・ジニーは素早く「FVM」を人型二足歩行のボディに変形した。立て続けに光波ソードを「FVM」に装備させて、防護電磁場を切り裂く。ほとばしる閃光。ローズ・ジニーは叫ぶ。

「カザ！機体主要部の均衡維持、衝撃緩和を！」

カザは速やかに機器の点検を行い、ローズ・ジニーの要求に応じたようだ。私は汗の滲む手でレーザー・ガンを握り締めたままひたすらジファを探した。すると技術協会を守る駆動機が放つ光熱波で芝生が燃えあがった。そこに高く飛びあがる人影が見えた。私はとっさに叫んでいた。

「ジファだ！」

同時に「FVM」の光波ソードが防護電磁場を切り裂き、凄まじい波動音を響かせて機体を敷地内に入らせた。ジファは駆動機の一台上に飛び乗り、装甲板をはぎ取ると破壊している。爆発する駆動機。ジファの超人的な力に私は震えた。私は彼の動きを目で追う。飛び

退くジファを護衛システムの光熱波が追尾していく。ジファは私達「FVM」を目にとめたようだ。光熱波を交わしていくジファ。光熱波はターゲットを見失い、防壁に衝突すると光、熱エネルギーを鮮やかに放って消えた。ローズ・ジニーの指先が射出機のトリガーを巧みに操る。「FVM」は駆動機目掛けて追撃弾道弾を発射した。身を軽やかにしりぞけるジファが私の目に映った。彼の姿は月明かりにシルエットを映す軽業師のように美しく華麗だった。追撃弾道弾は駆動機を的確に仕留めて、次々と破壊させていく。駆動機と防護システムは標的をジファから「FVM」に変えたようだ。けたたましいサイレンも鳴り響く。出撃してきた機動隊と警護駆動機が連隊を組む。彼らはターゲットを「FVM」に絞ると、光熱波、ミサイル、砲弾で波状攻撃してきた。AI機能が自動回避システムで「FVM」を安全な場所へと移動させて行く。ローズ・ジニーは素早い動きで操縦席の電動レバーを回して、光・熱エネルギーを充填開始した。カザもAI機能と連携するため、計測機器類の確認、操作に必死だ。連隊の一斉砲撃が一瞬止まった隙に、人口音声が「FVM」のコックピット内に響く。光・熱エネルギーの充填が完了したようだ。ローズ・ジニーはわずかの迷いもなく放射トリガーを引いた。眩いほどの輝きを放ち、光高密度エネルギーは放射された。夜闇を光が満たして、周囲を照らした。破滅的に溢れる光高密度エネルギーは警護駆動機を飲み込み、溶かしていった。機動隊はおびえて、散り散りに逃げていく。私はそのカラストロフィーに圧倒され目を見開いていた。やがて光は収まり、駆動機の残骸だけが残った。「FVM」は技術協会内に着地し、ジファを迎え入れる態勢を整えた。コックピットの扉が開き、私は焼け焦げた芝生に足を降ろした。ローズ・ジニーとカザは緊張から開放され、乱れた呼吸を整えている。私は、よろめき、歩いてくるジファに呼び掛けた。

「ジファ！」

その時破壊されたはずの警護駆動機のコックピットが開いた。そこから顔をのぞかせる操縦士がレイ・ガンをジファに向けて構えて

いるのが私には見えた。私はとっさの判断でレーザー・ガンの引き金を引いた。ジファの叫ぶ声が私の耳に響いた。

「撃つな！」

私の放った光波は操縦士の体を通き、彼は力無く倒れ込んだ。私の指は、体は、硬直し、震えていた。ジファが私にゆっくりと歩み寄り、私の両手を握り締め、私が構えたレーザー・ガンを降ろしてくれた。彼の声は悲しみに満ちていた。

「どうして来たんだ。裸留枷……。」

私は目眩にも似た感覚を覚えて、ジファの胸に倒れ込んだ。彼の白いシャツには赤い血が染みついていた。……夢の中。流れる砂がなだらかな砂丘を形作り、砂の波がゆるやかな起伏の砂漠を流れていく。空は青く澄み渡り、雲一つなく、乾いた冷たい風が吹き抜けていく。私はシルクで織られた衣服を身に纏い、凍える冷気を感じながら歩いていく。あてもなく流浪した先、所々磨耗した大理石の円卓が砂の中に埋もれているのを私は見つけた。卓上に浮かぶホログラムのモニターにはおびただしい量の遺伝情報と塩基配列が記されている。アデニン、チミン、グアニン、シトシンの並びが絶えず変えられていく。乱数で制御されているのか。カオティックに配置されていくようだった。これは意味を持つ塩基の配列ではない、ただのA・T・C・G、アルファベットの無秩序な並びだ。私がそう感じた瞬間、上半身裸の少年が私へ背中越しに話し掛けてきた。彼の体には白い絵の具が乱雑に塗られている。彼は言う。

「遺伝子間領域。『ジャンクDNA』と呼ばれる。遺伝情報をほとんど持たないと断定された二十二億の塩基。ただ彼は気付いた。生体構成に影響しないはずの寄生DNAにこそ、人間を突然変異的に進化させる鍵が隠されているのを。」

少年の顔には見覚えがある。いやむしろ私がかつて作り上げたと言っべきだろうか。性超越的な透明感のある横顔。赤とエメラルドグリーンの瞳。私は少年に聞いた。

「君、名前は？」

少年の澄んだ鋭い瞳がひときわ輝いた。風が彼の髪をなびかせていく。

「俺の名は・・・ジファ。彼は・・・「怪人」オルザヴア。」

その途端、風が吹き抜け、砂塵が舞い上がり、視界がさえぎられた。そして私は夢から覚めた。・・・身体中に脱力感を感じる。頭が重く、こめかみを締め付けるような痛みがあった。場所は・・・、美術館のアトリエだ。二つの別室に仕切られた寝室の内一つに、私はいた。薄い扉一枚でさえぎられたアトリエから軽い言い争いをする声が聞こえる。口振りは抑え目で、物静かで穏やか。激情とはほど遠い印象。ただ声からは怒りを強く感じているのがわかる。声の主は・・・ジファだ。

「二つに分かれて政府中枢を打倒するはずだった。お互いに。」

もう一人の声はローズ・ジニーだ。

「救援が必要なかったとでも？そう、私自身、あなたとの暗黙のルールを守るうとした。ただ裸留枷、彼女は素晴らしい考えの持ち主。彼女の差し迫った想いを無視出来なかった。女性的な感情だと蔑むなら蔑んでもいい。・・・ただ、あなたは自分の能力を乱用し過ぎだ。体に変化が来ているのも分かるでしょう。あの時、私達が援護しなければあなたは危険な・・・。」

ジファが言葉をさえぎる。

「俺の肉体的、精神的変化など心配しなくていい。俺は目的を達成した後、破綻するならそれでいいと思っている。気づかいはいらない。大切なのは、野兵戦の経験が一切ない一般女性を連れてきたことだ。しかも無思慮に武器まで持たせて。軽率に過ぎる。彼女は・・・心に深い痛手を負ったはずだ。」

ローズ・ジニーは自分の考えを言う。

「戦闘経験があろうとなかろうと防衛手段として装備は不可欠よ。あなたは少数が多数を撃退するゲリラ的戦術に通じていない。その分、私達の考えを理解出来ない。彼女を無防備にするわけにはいかなかった。それに・・・彼女は待機命令を出しても、かたくな

に拒否したでしょうね。無理強いにでも「FVM」に同乗したはず。彼女、あなたを・・・強く思っているのよ。」

ジファの激情が吐き出された。

「そのために！あの娘は！」

私は朦朧とした意識で、乱れた髪、服装のまま、寝室からアトリ工に出た。ジファとローズ・ジニーは口論を中断し、静かに私を出迎えてくれた。私は何か重要な事件を起こしたのをぼんやりと覚えていた。でも具体的ではなかった。私は沈黙を通す二人にかける言葉が見つからなくて、ぎこちない挨拶をした。

「おはよう。ローズ・ジニー。ジファ。今朝の朝食はトーストとパスタ、コールスローに紅茶にしようと思ってる。二人とも朝食は済んだ？まだなら私が用意するわよ。」

ローズ・ジニーが優しい瞳で私に話し掛けた。

「私達は平気よ。長期戦線に耐えるため、絶食訓練も受けてるから、多少の空腹は気にならない。それより裸留枷。あなたの調子はどう？気分は？」

私は記憶の名残をたどり、この疲れ、不安定な感情の原因を探した。その瞬間、私にとって余りに痛切な思い出が蘇った。放射されるレーザー・ガン。撃ち抜かれ絶命する操縦士。徐々に私は震えが止まらなくなり、軽いパニックに襲われた。

「私・・・私・・・人を、殺した。殺してしまった。ジファを助け出すなんて意気込んで。この世界のことを理解すらしないで、正義を気取って・・・。」

ジファは私に近づくとそっと私の頭を抱き寄せてくれた。

「裸留枷。大丈夫。全部、君の作り出した物語、「時計塔に眠る怪人」の中での出来事だよ。君にとっての現実じゃない。全部作り話だ。だから・・・大丈夫。」

私はジファの優しい呼び掛けに涙がひとしずく、零れ落ちるのを感じた。ローズ・ジニーはただ口元に手をあてがい沈思していた。とても静かで穏やかな時間が過ぎていくようだった。私の涙はしば

らくやむことはなかった。少しの静寂の後、アトリエへ扉越しに力ザの呼び掛ける声が響いた。

「ローズ・ジニー。緊急情報伝達だ。すぐに来てくれ。」

ローズ・ジニーは気まずそうに服装を整え、小さく深呼吸をすると、私とジファに一度視線を送り、品よく会釈してアトリエを出た。「失礼。」

アトリエの壁面にはホログラムモニターが映され、ニュース映像がネット配信されていた。昨晚の事件を伝える報道に私は自然と引き込まれていた。

「昨日深夜未明、汎用科学技術協会にA急不穏分子「A・130F」が不法に侵入。技術協会のスポークスマンでもあり、人工知能開発の主要研究者の一人、ドクター・ドージ・カルメロを射殺した模様なおかつ、技術協会の警護システムを破壊し、「A・130F」の逃走を手助けた反体制組織の駆動機は、人工衛星上からの所在特定を遮蔽膜で防護。政府の追跡を免れました。今回の謀殺事件についてアノマ・カロメ第二執政官は会見に応じ、声明を発表、反政府組織の一掃を宣言しました。」

アノマ・カロメと呼ばれた女性。モニターに映る女性はまだ三代で黒いスーツとパンツを着こなし颯爽としていて気品に溢れていた。彼女は清廉とした印象の女性だった。ジファが呟く。

「第二執政官、つまりは宰相ノルガバに次ぐ政府のナンバー2だ。外交的には穏健。強硬な戦争推進派ではない一方、内政面、特に反体制組織、反体制活動家に対しては強硬だ。それは彼女の幼児期の惨劇に理由がある。」

「幼児期の惨劇？」

ジファは押し黙り、反体制組織掃討を宣言する第二執政官アノマ・カロメのスピーチに聞き入っていた。肩口で切り揃えられたアノマ・カロメのストレートの黒髪は光輝で潤い、可憐だった。瞳は幻惑的で、神秘掛かった求心力を持っている。彼女の芯が強く、透き通った声に私は魅了された。

「戦時下に体制転覆を画策し、混沌と無秩序を蔓延させ、市民の安全を脅威に晒す反戦活動家は、民衆、並びに公共の敵であり、自己矛盾を抱えた暴徒である。私は彼ら組織の末端まで解体、壊滅させるのに僅かばかりの躊躇もない。彼らの活動がどんな理想で粉飾されていようと、私は彼らの奸計、奸智に屈伏するつもりはない。徹底的に打撃を与え、彼らを拘禁し、断罪する。彼らに弁明、弁解の余地はない。私は、これより宰相ノルガバの許可を受け「反戦活動組織掃討計画」を発動させる。彼らの潜伏地、拠点、本拠は速やかに一掃されるだろう。これは市民の静穏で安全な生活を保障するものである。私は国民の理解を求めると共に国民の不安を解消すると約束する。長引く戦局は国益を拡張し、終息すると確約して私の会見を終了させてもらう。」

映像は切り替わり、質疑に応じる老政治家を映し出した。落ち着いた口調で原稿を読み上げるキャスターの声が響く。

「なお、ギラルド国務大臣はキナ湾岸戦線での空域、陸域双方での良好な戦果を報告。「湾岸作戦」における……。」

ジファはニュースに関心を失ったように呟いた。

「琥珀の広場。時計塔の地下街も、もう安全ではないかもしれない。ここもやがて危険にさらされる。あるいは……琥珀の広場の活動家を監視下において放置。反政府組織のネットワークをつかんだ後、一網打尽にするか。いずれにせよ。事態は変わった。俺は俺で目的を達成しなければならぬ。限られた時間内で……。」

私はたくさんの情報と記憶の中からジファに伝えるべき事実を探していた。確か……、そうだ！

「ジファ。奇妙で信じにくい話だけど。この世界についての別世界、私にとっての現実で、存在するはずのないAMSSOIが私を襲った。ジファの現実と私の現実とは隔たれながらも？がつている。私も良く理解出来てない。でも……！」

AMSSOIの名前を聞いてジファの顔色が変わった。私という不可思議な存在について、私の寓話と彼の現実との奇妙な一致につ

いて、ジファは思い当たる節があるようだった。彼は流れるような植物装飾の椅子に私を座らせると、私の瞳を見つめた。

「詳しく・・・、話を聞こうか。」

雪降る夜 1 アノマ・カロメ

10月7日。その夜は肌寒く、季節外れの雪が降っていた。その日は電灯が全世帯に普及したのを記念する祝祭日で、子供達にとっては祭が行われる心楽しい一日だった。各家屋は室内の灯を消して闇の精霊に扮装した子供達が来るのを待つ。闇の精霊に灯を燈すよう警告された大人達は全部屋の電気を点灯させ、暗闇から救済してくれた闇の精霊へのお礼にチョコチップクッキーをあげる。子供達は儀礼の意味合いにはさして関心がなく、お目当てはプレゼントされるクッキーだった。私と級友達は二十を超える家庭で闇の精霊としての名演をこなし、胸一杯のクッキーにあずかっていた。当時12才だった私は両手から零れ落ちんばかりのクッキーを胸に、祭のゴール、私の自宅へと急いでいた。国防省長官を務めていた父は厳格な印象が強く、その父が笑顔で子供達と祭事でコミュニケーションしてくれるのは、私にとっても特別な出来事だったのだ。黒と白でペイントした自分の顔がとても愛おしく感じたのを覚えている。吐く息は白く、指はかじかんでいた。住宅街から一区画離れた、人通りの少ない場所に父の邸宅があり、その姿を坂道の高台から見ることが出来た。自宅の灯は消えている。仕事人間で頑なな雰囲気のある父が子供達と一緒に遊んでくれるのが何よりも私には嬉しかった。高台に待ちかまえる級友達は身震いし、中には萎縮する子もいた。父のパブリックイメージは軍備拡張を推し進める好戦的閣僚で、簡単に言えば子供達の言葉が通じない強面の大臣様だったのだ。私は、じゃれて、ふざけ合い、緊張を解きほぐす級友達をよそに自宅を見下ろした。静かな印象の家屋は、悪戯好きで、時に人を脅かす闇の精霊の到来を今や遅しと待ちかまえていた。私は父との数少ないコミュニケーションの機会に胸を踊らせた。私には父との遊びこそ最大の報酬だったのだ。ふくらむ期待を温め、いよいよ覚悟を決めたその時、自宅の窓ガラスから異変が確

認出来た。ほとばしり、明滅する光、しばらくの間隔を置いて再度瞬く光。級友達是不穏な予感を感じて押し黙った。祝祭の高揚感はいずれから消えていた。胸騒ぎがした私は急いで坂道を駆け下り、自宅の扉を開いた。鍵は開いていた。電気は全て消えていて朧げにしか室内の様子は確認出来ない。私は震える足取りで父と母の待つリビングへと向かった。足元に液体のぬめりを感じる。私は恐怖と動揺がない交ぜになり、こわばった指先でリビングの灯を点けた。そこはフロア一面に溢れんばかりの血が流れており、ソファに座る父と母が無残に銃殺されていた。必要以上の銃弾を体中に撃ち込まれてその光景は私の目に今でも生々しく焼きついている。のちに、葬儀の席で国防省の官吏から、父が軍拡に反対する反政府組織から標的にされていたのを知られた。軍縮を声高に主張しながら、暗殺に手を染める。その日から、矛盾した論理を持つ反政府分子は私にとって復讐と怒りの対象となった。あれから22年経つ。10月7日、嫌な日だ。折りしも両親が反政府組織に謀殺された命日に、反政府組織の掃討計画を娘である私の自身が宣言しなければならないとは皮肉な巡り合わせだ。物思い……。回想から現実に戻った私の耳には、執務室で午後のスケジュールを告げる秘書の声が届いていた。

「2：30海軍航空母艦の開発プロジェクト機構の技術者、設計者による航空母艦の開発状況及び戦略的意義の説明会。6：30反戦組織掃討計画遂行チーム幹部との食事会。8：30反戦組織掃討計画第七課の夜間訓練の視察。11：00遺伝子解析機構・枢要機密保管庫にてノルガバ宰相との会談です。」

「ご苦労。」

私は無感情に秘書をねぎらった。山積みの軍務は私に気力を与えてくれる。現在、内政的にも外交的にも政権は安泰ではない。だが存分に対処は出来る。戦争は国論を二分しているが、民主的に選ばれた宰相が宣戦布告し、開戦したからには、勝利へと祖国を導くのが、私達政治家の役目だ。きっかけや大義について検証する余裕な

どありはしない。それが私の愛国的姿勢でもある。国家の保護下にありながら政策に反抗かしない、怠惰で無気力な連中との妥協など一切しない。私は彼らを一掃するだろう。彼ら自身を自己倒錯から開放してやるためにも。私は執務室を後にし、「枢要協議議事堂」から出ると黒塗りの車に乗り込んだ。護衛管、運転手の動きや振る舞いは形式的だった。それが効率を重視する私には不快でならなかった。伝統を敬うだけの虚飾など必要ないはずだ。私は少しけわしい顔つきで、小型モニターに記録された空母船設計図を見た。車はやがて空路を経て、海軍軍事施設「F・2075D」に着いた。セキユリティチェックは政府要人として例外ではない。ゲノム解析機で塩基配列を瞬時に読み取った後、人物を特定する。私はこの洗練されたテクノロジが好きだ。科学に停滞は許されない。それが私の考えだからだ。私はセキユリティチェックをすませると、海軍施設管理者ナノ・メタムに会議室へと案内された。関係者はすでに集まっていた、私を待ちわびていた。私は浮遊型の椅子に腰をおろすと新空母の性能と戦略的意義について、技術者と軍幹部の話を聞いた。彼らの説明が少し冗長だったので私は要点をまとめるよう求めた。彼らは兵器開発と戦争が趣味の人間で、私は彼らの戯れにつき合うつもりはなかった。なによりもシンプルさが必要だ。技術者の一人、イノ・ゲラは若干不服ながらもすぐに要求に応じた。

「満載排水量は18万6000。我が国最大級の規模です。標準搭載機は爆撃機210、偵察機70、機動的小型機50。総乗員8000。新空母はナド駆逐艦15隻、潜水艦3隻と部隊を組み進軍します。搭載した対地ミサイルの射程距離は惑星の直径を網羅。特殊な電波妨害シールドにより、新空母の座標特定は不可能。戦略上担う役割は多重的。艦隊同士との戦闘で対抗し得る艦船は存在しません。攻撃力は卓越しています。」

私は冷たく聞いた。

「完成予定日と建造費は？」

「後一ヶ月もすれば進水出来ます。建造費は予算内に。技術者、開

発者の協働も効率的だったと報告しましょう。」

私は辛辣に見解を述べた。

「巨大な航空母船で敵国を威嚇する「砲艦外交」はすでに終わりを告げた。政府首脳が求めるのは実地的な軍事力だ。機動性、攻撃力、防衛機能に劣るのならば、そんなものは必要ない。予算を食い潰すだけのミリタリーなどいらぬ。みな、自覚するように。」

イノ・ゲラは自信に満ちていた。まだ二十代後半の青年だ。それがプロジェクトを牽引している。彼の才能と人望は私も認める。彼は言う。

「第二執政官を必ずや満足させます。新艦は戦争をいち早く終わらせるでしょう。」

「それは結構。」

私はなるべく感情を控えめにして応じた。その後、新空母の戦略性と軍事攻撃のパターンについて議論が交わされ、会議は終わった。時間にして2時間10分弱。多少ムダな議論も私には見受けられた。私は退席する時、会議室の室内装飾を見た。歴史的叙事詩をモチーフにしたホログラムの天井画が描かれている。財務、軍事、外交。国家の行く末を決めるべき場所に美意識を無闇やたらと刺激する美術は無用で低俗。必要ないと私には思えた。・・・「悪趣味だ」私は胸の内で静かに呟いて「F・2075D」から離れ、次の仕事、反戦組織掃討計画幹部との食事会へと赴いた。私の耳には、計画が始まり、ものの半日も経たない内に、個別に活動する反体制活動家三人を拘束したとの報告がすでに届いていた。拘束された人間は組織の中間層に位置する人間で、組織全体への影響、衝撃は少ない。言わばこれは反体制組織への宣戦布告、威嚇行為のようなものだった。私はホログラムモニターで三人の詳細情報を確認した。「ノウ・ミラボウ・37才・証券会社勤務、居住区・N380阿賀区、扶養家族・妻ノウ・32才、息子・チャベル・5才」。茶褐色の瞳をしたノウ。仕事から見て彼は社会的成功者の一人だろう。経歴からも平穏な社会生活を営んでいたと推測出来る。彼を秘密裏の反戦活動

に駆り立てた動機は何か。彼の心、ポリシーは速やかに暴かれるはずだ。ノウの瞳が私には少しくすんで疲れているようにも見えた。私は映像を切り換える。「ナグマ・ゼイヤ・28才・大手ネット出版社「ラグロー」勤務、居住区・DG24若葉区、扶養家族、なし、独身。」。ラグローと言えばこの十五年で急速に成長した新興企業で、言論、社会派、カウンターカルチャー、エンターテインメントなど幅広いジャンルの電子書籍を売っている会社だ。社員は待遇も良く、一つの政治姿勢にかたよらないよう社員教育もされていたとも聞く。中立の精神を持つ企業の社員が極端な反体制活動に加わる。戦争による国家・社会の二極化を私は感じた。私は映像をまた切り替える。「二ナ・シャラビィ・24才・斎葉工科大学大学院在籍、居住区・S971仁科区、両親と同居」。斎葉工科大学大学院、ナノテクノロジー研究の国際的権威、アオキ・ガクジンら、名のしれた教授がいる名門大学。インテリ学生が政治に関わるのは珍しくない。反権威思想に心酔し、学生運動に加わるのはたやすい。ただ斎葉工科大学は組織だった運動はなかったはず。加えて創設当初から学生風土は穏やか。政治にはノンポリシーの大学だったと私は認識している。政治や社会活動を軽視しがちな、きわめて学者肌の知識人を輩出しているのでも有名だ。反戦の気運は学生気質を変えるほど浸透しているようだ。私は、そんな物憂い思いを抱きながら、食事会会場へと足を運び、席についた。食事会では計画の最高幹部、ガカ・ジャナメが計画をつぶさに説明していった。私自身が計画の立案者でもあるので彼の能力は頼もしくもあった。彼は言う。

「現在の反体制活動家の特長は組織立っていないという点です。拘禁した三人の活動家も組織の上層部に通じるような情報は持っていません。隠蔽工作がよほど手慣れているのでしょうか。しかし、いかに活動が個別的であろうともグループの所在地、潜伏先の特定は出来ます。すでに十七に及ぶ活動拠点が特定済みです。彼らは我々計画遂行チームの管理下にあると解釈していいでしょう。」

私は人指し指を口元にあてがい、尋ねた。

「計画の第一段階は？」

「初動期にあります。今回検挙した三人がシンボリックな存在です。まず個人活動家を一人一人、拘束していきます。これは特定出来ている22の反政府組織への揺動作戦です。そして組織が極わずかな動きでも見せ次第、計画は第二段階に入ります。彼らの活動拠点を第四、第五、第七課の掃討チームが占拠するでしょう。幾人かの死傷者が予想されますが鎮圧に時間は掛かりません。特に今夜、第二執政官が視察なさる第七課はエリート部隊です。首尾よく成果を挙げましょう。」

私は黙って聞いていた。彼は続ける。

「影響力の強い組織が制圧されれば、民衆が大きな動乱を起こす可能性もあります。予測される事態です。軍とAMSSOSI、そして掃討計画チームの連携が必要となります。もし反乱が起これば、潜在的な不穏分子をも大量に拘束出来るはず。全ては「スムーズに」です。」

ここで私は彼に最も重要なポイントについて尋ねた。

「琥珀の広場。時計塔の地下街については？」

ガ力は指を組み合わせて、得意気な面持ちで話した。

「時計塔の地下街、時に法の介入さえ拒む無法地帯。デカタンに溺れる、腐敗し、倒錯した独自のコミュニティ。この地下街にキーパースンの多くが潜伏しているのは確実です。我々は自己増殖を繰り返す、この謎めいた地下迷宮に手出しが出来ないのか？いいえ決してそうではない。超A級不穏分子「A・130F」の拠点も三つ陥落させて、管理下に置いていく。国家内自治領とでも言うべき共同体、「時計塔の地下街」を我々は制圧可能なのです。」

私はガ力の含みを持たせた言い回しに興味を惹かれた。

「じゃあどうする。地下街にいるだけの無辜なる民をも巻き添えにして銃撃戦でも起こすのか。」

「いいえ、地下街の反政府組織には表向き自由を与えます。当然我々の管理下における制限された自由です。」

私はガカの話の核心をついた。

「それで彼らのネットワーク、活動パターンを把握する。後、即座に、反政府組織に壊滅的な打撃を加える。」

ガカは私の指摘に満足げだった。そして彼の顔は私の指摘以上の目論見があるのを仄めかせていた。ガカは続ける。

「それだけでは終わりません。我々は彼らに・・・、罪を犯させるのです。彼らが正しいと信じている反戦活動が、時に残虐で非人道的であるのを彼ら自身に自覚させるのです。彼らがプランを実行すればする程、彼らは暴徒として認識され、人々の心は離れていく。支持基盤の一切を失い、弱体化した彼らを、我々は一掃します。戦争と反戦の二元論がいかにも毛であるかを国民は理解するはず。反戦家のアンモラルが、国家間戦争の正しさを逆に浮かび上がらせるのです。鮮明に。」

私はガカの計略に体制のマキャベリズムを垣間見て、少し不快だった。だが同時に勝利に酔う優越感も感じた。私は最後に彼に尋ねた。

「怪人。怪人「オルザヴァ」については？」

ガカは思わせぶりだった。有能さゆえだろう。彼の顔には自分の能力へのプライドが深く刻まれていた。彼の鋭い瞳は才気で満ちていた

「オルザヴァ。彼は時計塔の地下街にいます。確実に。彼は死んでもいなければ、研究材料の一つとして解体されたのでもない。そして民衆に迫害されて時計塔に逃げたのでもない。彼は自らの思想と哲学を浸透させるべく、隠遁しながらも活動しています。彼の手となり足となる人間を利用しながら。彼は着実に！自分を生み出した権力中枢に近づいていくでしょう。対抗し得るのはAMSOIと我々特務部隊だけです。どうかご期待のほどを。」

私はガカの表情から改めて知った。体制と反体制側との対立という以上に、根深い思想上の対立を「怪人」は作り出しているのだと。国家計画の全容、怪人についての断片的な情報について、知ってい

ることは人それぞれであつても、怪人の存在は人の心に争いの火種を落としているのだ。私はガ力と深く握手すると、憂えた思いで料理店から離れた。それからすぐに私は第七課の訓練施設へと向かった。最下層空路をエアカーで走っていると、私の視界に、闇の精霊に扮した子供達の姿が飛び込んできた。そう、今日は闇の精霊の祝祭日だ。住宅街の電気も消えている。子供達はみんな、衣装を工夫していて、私の子供時代とはまた一風変わった趣があつた。顔のペイントも白や黒の単色ではなく、鮮やかな蛍光原色を多く使っていた。私の心はほんの一瞬、わずかな時間だけ子供時代に戻り、両親が暗殺された記憶を思いだしかけて、その寸前、現実へと再び引き戻された。私の振り返るべき幼少期が閉ざされているのならば、それはそれで構わない。自己防衛本能の一つだろう。私の心は感傷には一切浸ることなく、感情にやや起伏のない成人としての今！現在に適応し、子供達の姿が遥か後方に遠のいて行くのを見送った。

雪降る夜 2

私を乗せる車は夜闇を走り抜けて、第七課の訓練施設に到着した。施設の訓練所は、防弾壁でガードされた半径二百メートル程の巨大屋内だ。そこは触感のあるホログラムで幾つもの戦況をシミュレーション出来る場所だった。トレーニング光景は眺覧室から、直接に、もしくは映像で間接的にモニタリング出来た。私が教官に眺覧室へ案内されると早速、訓練が始まった。シチュエーション一、反体制組織が立て籠もる本拠での戦闘。十五人程で編成された第七課のエキスパート達は速やかに敵陣を包囲し、多種多様な戦闘パターンを見せていく、銃火器類、レーザーガン、パーサイト・ボムによる攻撃。駆動機、ランチャーによる奇襲。地雷の妨害。彼らは幾つものトラップを押し退けて、緻密に組み立てられた敵戦闘プログラムを打ち破る。何千万種に及ぶフォーメーション、戦闘の展開を予想したプログラムは、予測不可能な第七課の動きに対応出来ず、本拠への侵入を許す。第七課は複雑に設計された敵本拠を突破し、屋内戦に勝利、敵リーダーを拘束すると本拠を陥落させた。私は彼らのフォーメーションに幾分の不備があったと教官に指摘した。教官も納得ずくの様子でプログラムをいち早く組立て直すと私に約束した。シチュエーション二、密林に逃亡した不穏分子達とのゲリラ戦。先の本拠戦と違い、自然環境でのランダムな戦闘。密林での銃撃戦にのぞむ第七課の連携は華麗で優雅、とても洗練されているように私の目には映った。多彩に仕掛けられたトラップを避けて、不穏分子を追い詰めていく第七課。「スマート」。私の脳裏に一つの単語がよぎった。結果、犠牲者一名、負傷者一名を出したものの潜伏した敵対者を全て拘束、あるいは射殺した。私はシチュエーション一より、シチュエーション二の方が第七課の技量が発揮されていると評価した。教官は今回の訓練データを記録すると、敵戦闘プログラムをさらに向上させたようだった。彼は優れたプログラマーでもある

のだ。二時間に及ぶ訓練が終了した第七課のメンバーは眺覧室に敬礼すると武器のメンテナンスルームへと退室していった。ただ一人、第七課のリーダー、カザキ・クサバラ特尉が眺覧室へと私に面会に来た。彼は引き締まった筋肉質の体、スリムな体型で、軍人氣質とは程遠いラフで洒落た印象の男だった。彼は私に一礼すると質問してきた。

「いかがでしたか？第二執政官。第七課の活躍振りは。」

私は彼らの技術を称えるときにも慢心をいさめた。カザキは意に介さない様子で会話を続けた。私の表情は冷徹そのものだっただろう。私は会話を楽しむつもりなど一切なかったのだから。カザキは言う。

「第七課にとって小規模な戦闘における連携は、もはや反射神経的です。考える間なく、体が反応する。意思疎通の素早さには抜きんでいます。」

私はカザキに有能さと軽薄さの二つを見てとった。彼には隊員を率いて、仲間とともに死の危険をおかすリーダーとしての資質にやや欠けている。角度を変えればゲーム、スポーツ、お遊び感覚でミッションを遂行できるセンスは、仲間の恐怖心を和らげる能力とも言えるかもしれない。私は彼が優れた特殊戦闘員であるのには肯定的だったので、彼にリーダーの自覚を促すような言葉は一切かけなかった。彼の才能をただ単に褒めて、彼の戦意を昂揚させる、彼の優越感を刺激する言葉に徹した。

「反戦組織の軍勢力、および屋内戦、僻地戦、市街戦、ゲリラ戦における能力は一般人武装のレベルを遥かにしのぐ。それでいながら完成された第七課の戦闘能力に私は信任を置く。私は第七課がノルガバ宰相の要求に応えられる唯一の部隊だと考える。さらなる精進を私は期待する。」

カザキの目が一瞬、冷淡で侮蔑的になった。この男も単純な男ではないようだ。指図するだけで部下を殺し合いの駒として扱う政治家に反感、軽蔑に近い感情もわずかながら持っている。一瞬だけ垣

間見えた彼の本心はすぐに彼のラフでフラット、表面的な人格の一つに隠蔽された。彼は微笑んだ。

「私達第七課は、宰相、第二執政官の杞憂を一掃し、反政府組織を一網打尽にすることでしょう。存分にご期待ください。」

彼の瞳は鮮烈で、猟奇的でさえあった。獰猛な攻撃性を私は彼に感じた。そしてここで秘書が私に時間を伝えた。

「第二執政官。お時間です。宰相との会談が近づいています。お早く。」

私は秘書に尋ねた。

「宰相の今日の公務は？」

事務的な声で秘書は答える。

「宰相は一日、陸海空、各軍の將軍と戦況の検討。そして戦略の確認、再修正に従務されました。十二時間作戦会議室に籠もりきりでした。」

「分かった。ご苦労。」

私は秘書にそう伝えるとカザキと教官を一瞥し、訓練施設を去った。訓練施設から離陸する車内で、私の瞳の奥に瞬く光の洪水が再生された。レーザーガン、爆弾の光と熱、発熱灯の七色の光。鮮やかで、凄惨。美しい光景だった。あの迸る光が人を殺すのだ。軽く憂い、物思いに耽る私の心に、闇の精霊の衣装を纏った子供達の姿が蘇った。彼らの顔にペインティングされた螢光塗料は、兵器と同じ光を反射させながらもその役割は余りにも違う。そのささいな「気づき」が私の心を揺さぶった。一方は幸せを、もう一方は惨劇をもたらすのだ。私はその惨劇が避けられないとは知ってはいたが。憂愁にとらわれた私の胸に、子供達の無邪気な笑顔がもう一度よぎった。束の間の安らぎ。例えどんな境遇にも心の置き場はあるものだ。私はそう感じ、小さく息を吐き出した。車は空路を経て、宰相との会談の席、遺伝子解析機構へと飛び立って行った。遺伝子解析機構・枢要機密保管庫。いつ訪問しても冷たい印象のする場所だ。人間の生体の仕組み、構造を繙きながらも、解読した科学的発見に

謎めいた神秘のヴェールを被せてしまった場所。私は地下十二階A・75にある枢要機密保管庫へと向かう。戦争のきっかけを作ったイデオロギーの安置室。国際的融和を目指していた生命理学研究者達に隠蔽体質をもたらした岩窟。人々に屈折した思想を植え付けた、心の澱の貯蔵庫。それが枢要機密保管庫だ。私は円筒状のエレベーターで降下しながら、人間が科学で自然に踏み込んでいいのは一体どこまでなのかに思いを巡らせていた。私はセキュリティの厳重なチェックを経て、保管庫へと入室した。薄暗がりの中には仄かな灯を燈す、二つの球体、「生体維持装置」が設置されている。硬質ガラスで作られたその生体維持装置の中、半透明な培養液には、体毛がやや濃い、成長初期にある霊長類の幼子「二人」が膝を抱えて浮かんでいる。二人は静かに眠っていた。おぼろげで淡い光に照らされて、装置を仰ぎ見る人影は宰相ノルガバだった。聡明な政治家であり、理論、思考洋式は明晰。火種となる思想など作り得ない人間。小脳の異常を及ぼす遺伝子の異常によって、左目の視力が極端に悪く、眼球がぎこちなく移動し、両目が同じように動かない障害を持つ男。それがノルガバ・アルフォネ、彼だ。ノルガバは口元に微笑みを浮かべて私を歓迎してくれた。ノルガバは日ごとに増す、過酷な公務、重責、疲労などわずかながらも感じさせない、才気煥発な面持ちで私を一瞥し、再度「二人」の霊長類の赤子を眺めた。彼の表情、顔つき、血色は若々しく精悍。軽く波打ち、赤毛の混じる髪を後ろに撫でつけた彼はスタイリッシュで、年齢が五十代半ばだと思うのは難しかった。私は彼の隣にそばだち、話し掛けた。

「陸、海、空の將軍達との軍略構想は首尾よく練り上げましたが、彼らは時に血気にはやるタイプの人間。統率するには強力なリーダーシップ、主導権が必要でしょう。」

ノルガバは意に介していなかった。強靱な意志により、彼の確信は揺るがない様子だった。

「戦争の目的が崇高である程人間は協力し、合理性を重視するようになる。些細な意見の違いは乗り越えられるよ。」

私は沈黙した。ノルガバは政治指導者の素質に恵まれ、求心力が満ち溢れていた。彼は楽しげで少し、愉悅に酔う瞳で生体維持装置を見つめた

「アノマ。いつ観察しても素晴らしい生体だと思わないか。約四百万年前に分岐した二種の猿人、ラムダとオメガ。遺伝的不一致は、各個人のゲノムの差0・1%を下回る0・02%。そのわずかな差が二つの猿人の進化系統樹を変えたのだ。」

私は静穏とした瞳で、戦争を起こした純粋な二つの生体を観察した。二人の猿人は生体維持装置内の液体内で静かに呼吸をしている。培養液が特殊な溶液であり、哺乳類でさえ水分に溶け込んだ酸素を吸引出来るのだ。その寝顔は健やかで瞑想的だった。私は期せずして唇に人指し指と中指を充てた。ノルガバは言う。

「そしてラムダは私達、黄色人種の血統を形成し、オメガは赤褐色人種の遺伝的形質を継承した。脳の容量の差は僅かに27g。それは人種間対立を成立させるに充分だった。」

私は呼吸を繰り返し、水の泡を吐き出す二人の猿人を見つめていた。ノルガバは透き通る声で言明した。

「ジェノサイドは、人類の一体性を保つために必要だ。全てが不可避なのだ。その劇的政変の中心的人物になれたのに私は誇りを持っている。人類の進化系統樹を完成させるプロジェクトに私は参加出来たのだから。これは私の誇りになるだろう。」

そう語るノルガバの瞳は優しく、柔和でありながら、どこか恍惚的だった。私は生体維持装置をもう一度見つめる。そこには自らの背負ったカルマの悲劇性に一切気付くことなく、ラムダとオメガが安らかに寝息を立てていた。

模造の身体 1 優那裸留枷

模造の身体
優那裸留枷

私は、ジファが私の首筋に張ったシールで、彼の行動を無意識的にイメージしていた。場所は・・・、高級住宅街。一棟、一棟適度な距離があり、敷地は広く、上流階級の優雅な暮しぶりがかげえる。細やかに装飾された庭園。そこに、夜闇、閃く一筋の炎が色とりどりの花籠に舞い落ちる。燃え移っていく炎。立ち上る煙。噴煙とガーデンの狭間から警護用駆動機が現れ、襲撃者を迎え撃つ。弧を描いて追尾するレーザーから身体を逸らすのは・・・、ジファだ。彼は軽い身のこなしで飛びあがり、身をひるがえらせて駆動機のコックピットに飛び乗ると、掲げた右拳を振り降ろし、駆動機を破壊した。粉碎された駆動機から噴き出る爆炎の向こうに、ショットガンを構えた壮年の男が立っている。彼はこの破滅的なシチュエーションを予期していたようだった。落ち着き払っていて冷静だ。彼は言う。

「ジファ・・・。ジファ・セラヴィナ。類稀な知性とヒューマニズムを兼ね備えたロウ。ロウ・セラヴィナの息子。ロウ。その理想主義と言動で国家軍略機構の反発を招いた男だ。彼の・・・（ノイズ音が入る）は避けられなかった。軍民一体の政体を作ろうとする宰相ノルガバにとっても排除の対象であったはずだ。私が手を下さずとも彼・・・（また雑音）はまぬがれなかったはずだ。」

ジファは悠然とした足取りで一步、一步男に近づいていく。

「国家軍略機構は、常軌を逸したノルガバの思想と戦略におもねる妄執的な組織だ。機構長であるあなた、デユカ・タガハシにはノルガバを妄信に陥らせた責任がある。」

デユカと呼ばれた男はショットガンを一弾、一弾と発砲していく。

ジファは軽やかに弾丸を交わす。デュカも毅然として微動だにしない。

「責任？我々にあるのは義務だけだ。職務、軍務とでも形容出来る。国益と民衆の生命護持を最優先する。国家軍略機構の担う役割とは国政の安泰。誰もが嫌悪するが誰かが守らなければならない。そういうものだ。」

弾丸は直線的な軌道を残し、幾度もジファの頬を掠めていく。

「それでもあなたの独断的な策略、そしてロウ……（音が途絶える）あなたの罪過は、決して消えはしない。」

ジファは鋭いサヴァイバルナイフを取り出しデュカをその先端で指し示す。デュカも動揺する気配はない。

「激動下における望まざる流血はまぬがれ得ない葛藤がある。誰であるうと。保守派であるうと、革新派であるうと、中庸の立場を取ろうと！それは私とて、君であっても例外ではない。」

ジファは瞬間的に加速し、デュカの懷に飛び込むと彼の胸元にナイフを突き立てた。血しぶきが迸り、ジファは返り血を浴びた。

「巧みな話術で俺を翻意出来るとも？あなたは聡明でありながら、悪徳に身をやつしていた。死を手招きした自らの生涯を悔いるといい。」

苦悶を顔に滲ませながらデュカは信条を口にした。

「復讐で満足出来るのか？ジファ。もつと歴史を俯瞰するんだ。そうすれば真実を見極められる。」

ジファがナイフを奥深く差し込むと、デュカは口をつむぎ、物言わずして絶命した。ジファは言う。

「俺は一人の理想主義者として行動する。そこに姑息な手段が介入する余地はない。俺はノルガバの政治的犯罪を裁く。あなたはその足掛かりだ。デュカ。デュカ・タガハシ。」

立ち尽くすジファの白いシャツを血が赤く鮮烈に染め上げていった。私は顔を覆い、悲鳴を挙げると、イメージから目覚めた。私は美術館のアトリエ。寝室の一つ。薄い濃淡を滲ませるシンプルブル

ーのベッドに腰掛けていた。私の手元は小刻みに震えていて、今、脳内に映されたイメージの衝撃を和らげようと気持ちをしずめていた。悲鳴を聞きつけたローズ・ジニーが寝室の扉を静かに開ける。彼女は私の状況、気持ち、シールが起こした作用について分かっているようで、私に歩み寄ると私の髪の毛に優しく触れて、頭を胸に抱き寄せてくれた。

「ジファが、また一つプランを遂行したのね。」

彼女は、今一度、私の首筋に貼り付けられていたシールの有無を確認した。

「意思伝達膜はもうはがしたはず。共鳴作用がまだ残っていたのね。裸留枷が軽く眠っていた分、ニューロンの化学反応が引き起こされた。未発達なテクノロジーに頼るなんてよほど裸留枷を心配してたのね。ジファは。」

ローズ・ジニーは私とジファの関係と、ジファの単独行動に心配りをして、美術館のアトリエに待機してくれていたのだ。彼女は少し私の緊張をほぐそうと、肩を引き寄せ、なだらかに私の髪に触れてくれた。静寂。わずかの静けさの後、カザの呼び掛ける声がアトリエに響いた。

「ローズ・ジニー。情勢通知が届いた。データを整理しよう。」

ローズ・ジニーは優しく口元に笑みを浮かべると私の肩に軽く触れて、寝室から出た。私の心はバランスをようやく取り戻したようだった。私はアトリエで物静かに情報交換するカザとローズ・ジニーの話し声に耳を傾けていた。ジファ一人だけでなく、ローズ・ジニーら反戦組織も追い詰められているようだ。二人は今後の展望を予測していた。カザの声だ。

「ノウ・ミラボウ、ナグマ・ゼイヤ、ニナ・シャラビィ、三人の拘束を手始めに反戦運動家の特定、逮捕が相次いでいる。カロメの指揮で「掃討計画」は進んでいる。カロメは最大限、権力を使って、組織の中枢に近づくだらう。事態は思わしくない。」

ローズ・ジニーは冷静で、動揺する素振りも声の抑揚もなく、淡

々と話した。

「抵抗運動の大部分は個別活動家の集合体だ。組織の母体へと？がる糸口を持ち合わせていない。ただ、（ここで一瞬の彼女の声に起伏があった）気掛かりなのは時計塔の地下街が全く干渉されていない点だ。なにか策略の一つが動いていると推察するのが妥当だろう。」

カザが応じる。

「彼女、カロメは俺達が攻撃的機制に及ぶのをむしろ望んでいる？民衆が国家間戦争のため団結するように、俺達を誘導しているのか？」

「その線が濃厚ね。私達は反戦家でありながら、武力蜂起もするし、要人を殺したりもする。過激で言論が通じない狂信的な集団だと認識される場合もままある。・・・ラナ・キャベラとは連絡を？」

「ラナ・キャベラ」。私はその名前にすぐ思い当たった。私の寓話「時計塔に眠る怪人」に登場するローズ・ジニーの義父だ。怪人と交流するジファに理解を示す数少ない大人の一人だ。実際はどうか。カザがすぐに答える。彼は効率を最優先する人物のようで、話に無駄は一切なかった。

「いや、まだだ。彼は潜伏地を点々と変え、組織の重要メンバーの一部にしか所在を明らかにしていない。俺達末端の人間が交渉する機会は限られるはずだ。俺達独自で対処するしかない。」

ローズ・ジニーは沈黙で応えた。ロマンティズムが溢れる美術館のアトリエに、皆の緊張感が染み渡って行く。ホログラムモニタ―では反戦活動家逮捕のニュースが報道されていた。体制と反体制側の対立を伝えるアナウンサーの声は、小さなヴォリュームに絞られ、無機質で機械的でさえあった。

「六日前に発動された「反戦活動家掃討計画」は逮捕者の続出により、一層の進展を見せ、ノルガバ宰相の提唱する挙国一致体制の具体化に貢献している模様。なおアノマ・カロメ第二執政官は反戦活動家二名の死傷者を出した「反戦組織掃討計画第七課」の突入作戦

を称賛し、国民に賛同を求めました。」

モニターにアノマが映る。彼女の透明感のある、白い肌の美貌の背中越しに、彼女が作り上げた反体制家への激しい憎悪が見え隠れした。

「『掃討計画』は急進的で苛烈なプロジェクトだ。反戦活動家に改心の機会さえ与えないだろう。私は彼らと対話するつもりすらない。市民生活の安全を脅かし、国政の妨害を図る、『国家意思に不従順な反抗者達』は、いかなる強硬な手段に訴えてでも排除する。私は寛大ではない。第七課の方法論を全肯定するのに一切のためらいがないと私はここに宣言する。加えて第七課のミッションは、すみやかに遂行された。彼らの絶え間ないトレーニングを称賛するのを私は惜しまない。第七課を筆頭とした計画遂行チームの能力は『不従順な反抗者達』の追隨を許さないものだ」と私はここに警告しておく。

「

アノマの映像が切り替わり、アナウンサーがコメントを添えた。

「アノマ第二執政官は、拘禁した反政府分子の徹底した尋問、追及を行い、反政府組織の巧妙なネットワークの全貌を速やかに把握すると約束して会見を終了しました。次のニュースです。」

映像が戦地での戦闘を映し出した。凄まじい迎撃戦が行われている。

「緩衝地帯イエルノ・E―300に侵攻した我が国第七機甲師団と敵国緩衝地帯監視軍との交戦は熾烈を極め、双方に多大な損害と死傷者を出しました。ギラルド国務大臣は今回の奇襲作戦は、緩衝地帯監視軍の軍事的挑発を発端とする自国の抗議活動であったと説明。国際法が破棄されるならば、突発的戦闘は今後も起こりうるとの推測を示しました。一方・・・。」

報道ニュースの殺伐とした声に私は耳をふさいだ。同時に私はこの国の内政、外交両面での混乱を目の当たりにして、深い憂いに胸を覆われた。さらには汎用技術協会や国家軍略機構とジファとの確執。ものごとが余りに複雑で、全容が掴めないジレンマを私は感じ

た。ローズ・ジニーとカザが話し合いをしていたが、私の耳は中身を聞き取れないほど、鈍くなっていた。私の意識は朦朧となった。私はローズ・ジニーに一言「少し眠ります。」と伝えると寝室に引きこもった。ローズ・ジニーが誰に言うでもなく口にした。

「意思伝達膜の副作用で交感神経、自立神経のバランスが崩れている。心身共に不安定な状態にあるから存分な休息が必要よ。ジファも伝達膜の副作用については熟知していたはずなのに。」

ローズ・ジニーの声が私には遠く離れて聞こえた。私はベッドに倒れ込むとすぐに眠り込んだ。それは甘く、濃密なほどの深い眠りに私を誘ってくれた。・・・夢。私はシルクのドレスを纏っている。原色で彩られたドレスは体に絡みつく砂の粒に包まれ、優しく揺れていた。砂丘は金色に輝いており、その美しさは限りがない。砂の中には真鍮の懐中時計が埋もれており、隣には少年の姿をしたジファが膝を抱えて座っていた。ジファは上半身裸のままで。彼の傍には大理石の柱があり、柱には白いシートが螺旋状に巻きつき、はためている。私は夢判断や、夢占いは信じないタイプだ。でもこの前見た夢と、今見ている夢の一致点からみるに、この夢には何かの意味がありそうだ。物憂げな瞳で遠くを見つめるジファが乾いた声で話を始める。私を彼自身の謎解きに招待するかのよう。

「DNA。DNAはRNA、糖質、蛋白質で構成された分子システムだ。この構造の柔軟性を活かして遺伝子を改造してみる。そうすれば人間に潜在するスキルを引き出すのも可能だ。」

私はジファのそばに立って尋ねた。

「ジファ、あなたは何をしたの？そして何をするつもり？」

ジファの赤とエメラルドグリーンの瞳が妖しげに、凄惨に一点を見つめた。その姿には痛々しいまでの艶やかさがあった。

「哀悼。全ては一つに絞られる。死に行く美德を哀切でもって埋葬し、かつてナイフを「ドロップング」した人々に抗議するつもりだ。そこに俺の標準は絞られている。」

砂丘の波が、私の視界を遮ると夢は幾つものカケラに分かれて見

えなくなつた。私はいくらか戸惑いながら、少し苦痛を伴う夢から目が覚めた。体はどこか鈍く、重い。意識もはつきりしない。目覚めたばかりの私はすぐにベッドの隣に人の気配を感じた。穏やかで、優しく、柔らかい。気配には温かな包容力を感じた。私はその人物がジファであるとすぐに気がついた。私が振り向くとジファは籐椅子に腰掛けていた。細長い指を組み合わせて、紺色のセーターを着ている。彼の激しい感情は、その穏やかな瞳からはうかがいしれない。彼の引き起こした惨劇は、まるで遠い過去に葬られたかのようにだ。彼は心地よい声の抑揚で私に話し掛けた。

「起きたかい？裸留枷。ずいぶん深く眠っていたね。リアリテイのある夢を見ていたみたいだ。REMが見受けられたから。」

模造の身体 2

私は体を起こし、乱れた髪の毛を手櫛で整えた。私は心を沈めるのに気持ちを集中させた。私とジファは普通の男女の間柄ではない。彼には尋ねたい質問がいくつもあるのだ。ジファは繊細に私を気づかせてくれた。

「喉が渴いてないか？何か飲み物でも用意しようか？」

椅子から腰を上げようとする彼に私はきいた。

「ジファ。国家軍略機構って？デユカ・タガハシさんって何をした人？どうして・・・殺したの？」

その瞬間、ジファの穏やかさが一変し、冷徹になった。彼の心の奥深くには重厚な影が潜んでいる。私にはそれが手に取るように分かった。彼は目を細め、冷淡な表情を見せた。彼は感情の起伏なく答える。

「国家軍略機構。名前の通り、国家の軍事戦略を決定する機関だ。俺の思想、信条に著しく背く国家組織。彼らの意思によって国政が左右されるのを俺は許せなかった。そしてデユカ・タガハシはその機構長。政情が不安定な状況下では時に、暴力に訴えなければならぬということもある。これで俺の行動の説明にもなっているだろう。」

私は彼が肝心なところを隠しているのが分かった。彼は私に全ての事実を明らかにするつもりはない。ならば私にも考えがある。私は率直に、シンプルな指摘をした。彼が、ジファが、おそらく不快になるであろう指摘を。

「国家軍略機構の規模、影響力がどれほどでも、あなたのしたことには犯罪。殺人よ。政治思想が全て一致するなんて、一個人に限定してもありはしない。それなのにあなたは、そのささいな違いで法を犯し、人をたやすく殺してしまった。激しい行動を控えて、普通の政治参加は出来なかった？出来ないはずはない。暗殺を重ねて、政府を動揺させるよりも簡単よ！」

ジファは私の言葉に淀みなく応じた。彼はモラルを軽視するどころか眼中にない。彼は自分の方法論が最適だと確信しているようだった。自分自身の怒りと憎しみを解消させるためにもそうであると彼は言う。

「君もこの国の政治の暴挙を感じているだろう。対話や交渉に応じる相手ではない。民主主義ではあっても限りなく全体主義に近い、権力は一極に集中している。君ならこの国の危険と暴虐を理解出来る。君は知的な女性だ。かたよったモラルだけで判断するのは間違いだと知っているはずだ。」

私は彼の冷たい行動を否定も肯定もしなかった。ただ私は彼に極端な手段以外にも方法があると気付いて欲しかった。彼自身が苦しまない為にも。本当に、私はそう思っていたのだ。私はジファに言った

「ドージ・カルメロはAIの軍事利用について話をしていた。あなたも何度か人工知能の成り立ちについて話をしてくれた。あなたはAIに対する嫌悪、憎しみから行動しているの？科学が軍事的に使われるのが許せないのね？」

ジファの瞳は軽く瞬きをした。ポイントを鋭くまとめた私に感心し、同時に軽蔑もしていた。彼は不遜でも、傲慢でもない。ただ彼が抱いている重い目的意識が、たかだか一人の女性の等身大の意見を受け入れるのを許さないようだった。ジファはすました顔を少しも崩さずに、淡々と私と会話を続けた。

「そう、君は賢い女性だ。観察力に優れ、問題点を多くの情報から整理する能力にも秀でている。君の分析は的確で、鋭い。ただ、君の提案。穏健な政治参加など、非現実的で空想的、夢想家のロマンティズムだ。強硬な手段が最善の場合もある。君との意見の違いは悲しむべきではあっても、その溝を埋め合わせる必要もない。なぜなら二人は世界の見かたが違う。そうだろう？」

私は彼の考えではなく、感情を、胸の内を、心を知りたかった。私は彼が隠し続ける真実に鋭く切り込んだ。

「デュガ・タガハシは「復讐で満足出来るか。」とあなたにきいた。殺人の動機は政治的でも、科学的でもなく、むしろ個人的なものではないの？」

彼の瞳は冷酷さを増し、口を固く閉ざした。

「答える必要はない。」

「あるわ。」

「なぜ。」

「あなたが苦しんでいるから。」

「俺は苦しんでいない。」

「あなたを助けたい。私には少しでも真実を知る権利があるはず。私もこの別世界の争いに関わってしまったのだから。」

「ならなおさら、答えられない。君は心身ともに傷を癒し、速やかに君の現実に戻らなければならない。それを手助けするのが俺の役目だ。」

「あなたは逃げている。」

「どこから。」

「本当の動機を隠し通して、自分がただの衝動的な暗殺者になり兼ねない状況を無視している。危うい現実認識に目をつむっている。」

「君の心理分析は物語世界でしか通用しない。現実はずっと複雑なものだよ。裸留枷。自己満足的な見かたで人を分析しないことだ。」

「じゃあ、その複雑な現実を解き明かして。」

「必要ない。」

「なぜ。」

「君には無関係だからだ。」

「関係あるわ。」

「ない。」

「逃げないで。」

「逃げてない。」

私は気付いたら紅潮し、叫んでいた。

「ならどうして簡単に人を殺すの！？あなたそんな人間じゃないで

しょう！」

ジファも瞬間的に激昂した

「よし！じゃあ答えよう。ただ裸留枷。君が俺の心に特別な位置を占めたとは間違っても誤解しないことだ。ドージ、デユカ、二人を暗殺。これは君の推察通り、俺の復讐心が動機になっている。この際、遠回しな言い方はしない。直截に答えよう。俺の父親、ロウ・

セラヴィナとその盟友カルツァ・ゼウは、軍略機構、そしてその司令官たる宰相ノルガバに謀殺された。AI技術の使い方に関する意見の違いが原因で。無残なまでに！それが俺の動機の一部だ。間違いない。君の推察は正しい。ただしだ！彼らの策略の全容を知り、「怪人」オルザヴァと面会すれば君の硬直した！愚直なまでのモラルとやらも覆るだろう。汎用科学技術協会、国家軍略機構、そして宰相ノルガバの策略がいかに人間を数や物の一部としてしか扱っていないかに気付く！君が割ってはいる余地などないのを実感せざるを得ないはずだ！」

私は微かに物怖じする心を覆い隠し、気丈に振る舞った。

「私はあなたに「まわりつく」。あなたが変わるまで。あなたがやってのける暗殺現場にだって出向いて、あなたを止めて見せる。あなたを悪徳から遠ざけるために。」

ジファの目はとても冷たかった。

「俺の憎悪と怒りは君のような小娘に感化されるほど軽くはない。ただ・・・よし！いいだろう。ついてくるといい。どこへでも。俺の行く先々、俺の犯す過ち、「悪徳」とやらを目に焼き付けるために。そして戦争、政治の暗部、テクノジーの乱用、人間の醜さ！全てを含めた過酷な現実には打ちのめされるといい！そうだ。君は自由なのだから。」

「分かったわ。」

私は彼を鋭く睨みつけると足早に美術館のアトリエから飛び出した。なぜか涙が零れて、止まらなかった。胸は締めつけられるように切なく、辛く、悲しかった。私とジファの心の間で何かが壊れた

んだと私は感じていた。アトリエから離れて回廊に歩を進めると、ローズ・ジニーが通路に背をもたれて立っていた。私とジファの一連のやりとりを耳にしていたらしい。二人の言い合いはよほど凄かったのだろう。ローズ・ジニーは頬を緩ませて私の気持ちをやさしく包んでくれた。私は後ろめたく、気が引けて、俯いた顔のままローズ・ジニーのそばを通りすぎようとした。すると彼女は私の華奢な腕を引き留めた。それからどういきさつがあつたのだろう・。気がつくと私はローズ・ジニーの「オフィス」の椅子に腰掛けてホットココアをご馳走になっていた。ローズ・ジニーは、私の少しスクウェアな言い分に静かに耳を傾けてくれていた。彼女はジファ、私、双方の考えに共感して中立の立場を取った。ごく自然で成熟した対応だったように思う。彼女は私とジファのどちらが正しいかには一切踏み込まず、口出しも、分析もしなかった。彼女自身、物事の善悪を決める立場にないのを自覚しているのだろう。そう、私達は本当に、危うい未来の可能性を幾つもはらんだ時間の岐路に立っているのだ。ローズ・ジニーは私の興奮がしずまるのを待って、彼女の現在の関心事、興味のある話題に話を変えた。彼女の好奇心は私の境遇、不思議な能力、私の世界と彼女達の世界との共通点、の三つに向けられていた。彼女は私にとっての「現実」にAMSO SIが襲撃してきた事実に謎解きの足掛かり、ヒントがあると考えているようだった。彼女は冷静に一つの推理を示してみせた。それはこういうものだった。私の「現実」より大きく科学が進歩している「彼女達の世界」では滑稽ではない、リアリティのある推測なのだろう。彼女は私に尋ねる。

「多世界宇宙という概念を？」

私はうる覚えの記憶を辿りに答えた。

「一般向けの物理学の本で斜め読みして、少し知っています。」

ローズ・ジニー、彼女の表情にはゆとりがありながらも真剣だった。

「「多世界宇宙」。私達の現実世界においてですらまだ実証されて

いない概念。それは、それぞれ密接な繋がりがあいながら、わずかな違いを持つ宇宙が限りなく存在すると仮定する宇宙観。タイムワープの「時間のパラドックス」を解消する為に誕生した宇宙像。あなたはそれを立証する存在かもしれない。」

私は首を軽く横に振った。

「複雑で良く分からない。」

「簡単よ。ある男がタイムワープをして過去に旅をする。そこで自分の両親の結婚を妨害したらどうなるか。古典物理学の「流れる時間」という見解によれば男はその時点で存在する要因をなくし、消滅してしまう。両親が結婚しなかったのだから彼は生まれない。」

「違うんですか。」

ローズ・ジニーは流暢に答える。

「違うわ。時空の正しい認識によれば男は生き続ける。三次元空間に時間を足した概念、「時空軸」はスライスされた食パン一斤に印付けられた一つの点に似ている。印された一つの点は無数に存在する多世界宇宙の時空軸を表す。全てのシチュエーション、つまり全ての「点」は男がどう行動しようと変化せずに存在し続ける。両親が結婚して男が無事生まれる時空軸も、両親が結婚せず男が生まれない時空軸も食パンに刻まれた一点に相当するに過ぎない。全ての宇宙が同等に等価値で存在する。それが多世界的宇宙像よ。」

私は半信半疑で尋ねた。

「難しくて良くわからないけど、こういうことですか？私の現実とローズ・ジニー、ジファの現実はそれぞれ異なった多世界の一つ。そういう意味ですか？」

「そう、その通り。」

私は立て続けに質問した。

「それが事実だとして、AMSSOIの襲撃、私の別世界への移動とどう関係があるんですか。そもそも隔たれた時空軸、別世界を行き来するなんて出来るんですか。」

ローズ・ジニーは確信をもって答えた。

「その研究をしていた人間はいる。汎用技術協会に所属していた三人の科学者。名前はロウ・セラヴィナ。カルツァ・ゼウ。そして、カザウジ・トウユ。彼らが多世界間を行き来する意識転送装置の開発、研究に取り組んでいたのは事実。完成、未完成を問わず、実際にあなたはここに存在するのだから、多世界宇宙、「マルチバース」の概念はあなたが荒唐無稽ではないと言えるわね。」

私は深く考え込み、ホットココアを口に含んだ。その瞬間、一つの閃きが電流のように私の身体中を駆け巡った。二つの世界の新たな類似性。ジファの父親、ロウ・セラヴィナ、謀殺されたカルツァ・ゼウと、もう一人。トウユ・カザウジ。その名前は私のごく身近で親しい人間を思い起こさせた。そう、「トウユ」。私の同業者であり、表向きはファンタジー小説家である、風氏塔？を。名字の風氏を音読みすれば・・・「カザウジ」。私は少し動揺して口をつぐんだ。ローズ・ジニーの鋭い瞳は宙を見つめ、この絡み合った出来事の真相を掴もうとしていた。彼女は素晴らしい集中力を持っていた。ローズ・ジニーは長い推理の結果だろうか、幾つかの疑問を口にした。それは私には答えられない内容だった。

「三人が意識転送装置の開発に成功したとして、あなた、優那裸留枷に接触を試みた理由は何だろう？三人の最終的な目的は何？ロウとカルツァの暗殺の原因とも関わりがある？AMSSOSIが多世界宇宙の一つ、あなたの現実に干渉したのなら、おそらくAMSSOSIと関わりを持つ科学者のグループもまた意識転送装置の開発に成功したと推測出来る。そして現在失踪中のトウユの居所は？彼は政府の追跡を逃れて何かの目的を達成しようとしている。初めの疑問に戻ってしまった。じゃあその「目的」とは？」

彼女の推理が終わるのと前後して、ディスプレイの一つに緊迫した表情のカザが映された。カザは、照明の薄暗い、小振りなコンサートホールのお客様（ライヴハウスとも言おうか。）から通信していた。彼の眼は緊張がみなぎり、闘争心でギラついていた、普段の少し穏やかな様子とはほど遠かった。彼は一つ一つの情報を整理し、

簡潔に伝える。

「ローズ・ジニー？間香夜区D842の拠点の一つが政府に見つかった。D842の地下施設には十名を超える反戦家が待機している。これからここは掃討計画チームの第三、第六、第七課の襲撃を受ける。激しい迎撃戦が行われるだろう。FVMでの援護を要請する。D842の地下施設の存在は同胞内でも機密の一つだった。情報漏洩の疑い、もしくは密告が起こった可能性がある。内通者がいる。警戒をおこなわないでくれ。」

「カザ、了解した。0：15には現場に到着する。内通者の特定は急がない。全ては砲弾の音が消失した後に。」
「分かった。」

ディスプレイからカザの映像が消えて、ローズ・ジニーは武器を装備し始めた。彼女も戦闘に加わるようだ。カザは援護を求めている。それは私の胸にくすぶる反戦家達へのシンパシーを引き起こした。私は毅然としてローズ・ジニーに伝えた。

「ローズ・ジニー。私も力になれるなら・・・。」

ローズ・ジニーは人指し指で私の朱色の唇を閉ざした。瞳には優美な笑みが浮かんでいた。

「裸留枷。これは私達の世界で起こった特殊な紛争。一過性の熱病にかかって、あなたが参加する必要はないのよ。安心して、第三、第六、第七課のフォーメーション、攻撃パターンは、ジファのくれたデータで把握している。軍事衝突は速やかに終わる。D842を閉鎖して、反戦家十名を安全圏に移送した後、私は帰還する。あなたはジファとの仲直りの方法でもゆっくり考えてみて。彼、意外とシャイで繊細。気がとがめても口には出さないタイプだから、あなたが積極的に。ね。」

ローズ・ジニーは肘に小型銃火器を装備すると、少し神秘的な面持ちで私に告げた。

「多世界宇宙の問題は、ほんの一瞬後回しにしましょう。ジファにも、私達反戦家にも、そしてもちろんあなたにも関係のあるコトだ

から。」

「ローズ・・・・ジニー。」

ローズ・ジニーは私の肩を軽く抱くと「オフィス」を後にした。私は言葉を失い、自分が彼女達の力になれないのをもどかしく感じて、ホットココア片手に椅子に座った。ホットココアがかすかに波打つ保温性のカップからは、まだ温かい湯気が立ち込めていた。

模造の身体 3

私はふと興味本位に、ディスプレイと？がつている機械の仕組みを調べ始めた。機械はたくさん配線を通じて多くの機能を担っている。一目見ただけでは雑然としても、「配線の繋がり」には秩序があつた。そのきめ細やかで美しい配線を見ているだけで私は無力感から解放されていった。そして私の心へ、ふいに多世界宇宙を巡る攻防の一つの答えが生まれた。それは私が抱く、ローズ・ジニーに協力したい気持ちを満足させるに充分だった。それが私の物書きとしての資質が大きく反映されたものだったとしても。その答えとは、こうだ。まず、風氏塔？と私が初めて出逢つたのは三年前だ。意識転送装置が完成したのが同時期であり、なおかつ彼がロウ、カルツァ同様、AMSOI、あるいは国家軍略機構の標的にされていたのなら、彼は別宇宙、つまり私の「現実世界」へと逃亡を試みるのは当然だと言える。政府組織、もしくは政府関連研究者よりも先に、意識転送装置を実用化出来たのなら、私の「現実世界」は格好の逃亡先だ。なにしろ敵対者に追跡の手段を与えないのだから。彼、「風氏塔？」が身をくらませた理由、それはロウ、カルツァと共有していた思想、研究内容、政府への反抗と関わりがあると推理していいだろう。そして国家権力、宰相ノルガバが彼ら三人の粛清をもくろんだ動機は・・・、おそらく、「AI」。人工知能の軍事利用における意見の違い。それはジファが暗殺した要人二人が仄めかしたことからもうかがえる。さらにジファが口にした断片的な情報から察するに、「AI」は「怪人・オルザヴァ」と密接な繋がりがあある。怪人オルザヴァがどのような存在であれ、オルザヴァが国家と三人の科学者との闘い、ジファの復讐、そしてジファの超人的な身体能力の三つ。この三つの謎を繙く鍵になっていると予測するのは的外れではないはずだ。二つの多世界宇宙を巡るせめぎ合いの理由は「怪人」オルザヴァに収束する。これが私の出した答え

だ。ならばもう一つの疑問。私の意識が「別宇宙」に転送された理由は？ちょうどジファが復讐を始めた時期、体制側の多世界間移動が可能になった時期と重なったのは誰かの、（思い当たる人物は風氏塔？以外にない）思惑によるのか。ならば、彼、風氏塔？はなぜ私を選んだのか。なぜ私を利用出来ると考えたのか。彼は多世界宇宙間を行き来出来る、「させられる」人物を秘密裏に、三年以上に渡り！探していた。私を自分の代行人に相応しいと決めた理由は何か。この疑問は、彼に直接会わずには解けそうにない。最後に・・・

話を初めに戻そう。ジファ、ローズ・ジニー達の世界と、私の寓話「時計塔に眠る怪人」と一致点がいくつも見出せるのはなぜか。塔？が意識転送装置開発とは別に作り出したテクノロジーでも使ったのか。それとも私の空想がまつたくの偶然にもジファの世界と一致しているだけなのか。これは憶測の域を出ない。ただ塔？が答えを知っている可能性は充分にある。この瞬間、塔？は私にとってのキーパーソンになった。ホント、風変わりなファンタジー作家に成り済まして私達に近づくなんて、韜晦趣味にもほどがある。きつく注意してあげなきゃ。そこまでイメージを膨らませた時点で私の思考は途絶えた。私の心は真っ白になり、心地よさで満ちていた。私は翻弄されるばかりだったシチュエーションに、初めて自分から関われたのだ。私はもう一度、椅子に腰を降ろして一息ついた。するとディスプレイの一片にローズ・ジニーからの連絡が届いた。彼女の潔く、手短なメッセージ。それは文章が左右逆向きの鏡文字で、彼女特有のセンスが反映されていた。鏡文字を読み解くと文にはこう記されていた。

「0：09間香夜区D842に到着。掃討計画チーム、第三、第六、第七課との交戦は熾烈を極めると予測される。裸留枷へ。もし仮に私が殉死を被ろうと憂えず、悲観しないこと。人の生死は気まぐれで移ろいやすい自然現象の一つに過ぎないのだから。後記・ジファとは必ず仲直りするよう。二人はあなたが思う以上にお似合いなのだから。」

私はディスプレイに映されたメッセージを優しく撫でた。私は目元が少し潤んでいくのを感じていた。食器棚にホットココアのカップを仕舞う私の胸は切なく締め付けられ、甘い思いで包まれていった。私は今一度、ジファの深い心の底に隠されている本心確かめたいと思っていた。私の足は「オフィス」を離れ、自然と、ジファのいる美術館のアトリエへと向かっていた。アトリエへの回廊の色合いは優しい濃淡を滲ませ、色とりどりの色彩を鮮やかに描き出していた。アトリエの扉を開ける時、私は少し心が臆するのを感じた。私とジファは激しい口論をした。しかもジファの、美德と悪徳の狭間にある彼の意志を挫こうとする言葉を私は彼に投げつけたのだ。それは私の狭い心から来た正義感。彼を不愉快にさせてしまったのは違いない。私は自分の胸が痛みに覆われるのを感じながら、アトリエの扉を開けた。美術館のアトリエでは穏やかな様子のジファが一枚の油絵を鑑賞していた。油絵はアルルカンの肖像画だった。アルルカンは口元を手で覆い隠し、謎めいた微笑みを浮かべている。アルルカンの顔半分は流線的なペイントを施され、顔のメイクは非対称だ。背景のトーン、群青色の紋様で絵画は哀愁を帯びていた。ジファは絵を見ながら、誰に話し掛けるのでもなく、静かに言葉を紡いでいった。

「高等学校を卒業する頃、俺は理論物理学者になりたかった。工学博士でもあり、汎用科学技術協会会員だった父に憧れ、科学者の道を歩もうと心に決めていた。」

私はジファに尋ねた。

「何か心変わりが？」

「当時の俺は科学の万能性、普遍性を信じて疑わなかった。科学は世界の共通言語であり、言葉の壁を超えたコミュニケーションの手段だと信じていたんだ。」

「ジファ、あなたに何が起こったの？」

ジファは清廉としていた。

「二つの人種の遺伝的な違いが解明された。ヒトゲノム配列の明確

な違いが解読され、人種差別がこの国を覆った。国は急速に右傾化し、偏執狂的な思想家である宰相ノルガバの台頭を許した。それは国家間戦争の引き金を引くものだった。その時、俺は科学が絶対であるところか、時に、淡く青い理想を粉々にし、人々を混乱におとしめる学問であるのを知ったんだ。」

ジファは物思いに耽りながら追想を続ける。

「そして父の謀殺。俺の心は拠り所を失い、物理学への愛着を隠すようになった。俺は大学を離れ、膨大な機密資料、情報を収集し、父の死の謎を解き明かそうとした。やがて俺は父が、彼の研究、理想主義が原因で、政府から国賊として粛清されたのを知った。関わったのはAMSSOI、国家戦略機構、汎用科学技術協会。そして国家中枢の首脳部。そう、その時から俺の復讐が始まったんだ。俺はA級不穏分子に特定されながらも影と闇の世界で暗躍するようになった。」

私は寂しげに彼に聞いた。

「科学への信頼もその時、失ってしまったのね。」

ジファはしばらく沈黙した後、優しく首を横に振った。

「俺は科学的事実を政治利用する人間、デマゴーグに利用する人間に怒りを感じるだけだ。理論物理学への愛着は今も俺の胸の奥で光り輝いている。だから、だからこそ裸留枷、君には、俺の行為に真義があるのかどうか見極めて欲しい。そして俺が裁かれるその瞬間を見届けて欲しい。全てが終わった後も、君が俺の隣にいてくれるならばそれ以上の幸せはない。」

私はジファから一点も視線を逸らさずに見据えた。

「世界の終わりでも、未来の最果てでも、私は・・・ジファ、法もモラルも壊してしまったあなたが倒れてしまわないように、そばで見守るつもり。あなたが自分自身の心さえ壊してしまわないように。」

シファは静かに頷くとアルルカンの肖像画を指でなぞった。

「無言劇のアルルカンは果たして、言語、人種、民族、国家、あら

ゆるカテゴライズの制約を超えたグローバルストなのか。もしかすると沈黙の要塞に立て籠もる憂愁の人かもしれない。」

アルルカンが妖しげに、人々が信じる真理を時にくつがえすかのような不敵な笑みを浮かべていた。・・・それから七日後の朝、寝室には柔らかい光が差し込んでいた。私は窓辺のベッドに腰掛け、記憶の奥底に沈んでいた夢の手触りを感じていた。私の意識はかすみ、ここ数日の慌ただしい変化を思い返していく。一週間前、間香夜区D852における、ローズ・ジニー達と掃討計画チームとの銃撃戦。反戦家達の脱出ルートを確保したローズ・ジニーとカザは、一人の負傷者と一人の逮捕者を出したが、十余人に及ぶ反戦家達を逃亡先へ逃すのに成功した。「オフィス」に戻ったローズ・ジニーとカザはネットワークをもう一度整え、協力するグループとの意思疎通につとめ、「オフィス」から出てくることはなかった。次に五日前、ジファは周到に用意していたプランを私に話してくれた。中身はこうだ。ターゲットは汎用科学技術協会会長、ノマ・ゲルマノ。彼は研究所の防護施設内で隠遁生活を送り、学問に励んでいる。彼は外部との接触はなく、厳しいセキュリティで守られている。彼の姿を目に出来る唯一の機会とは三ヶ月に一度だけ訪れる。ジファいわく。

「ノマ・ゲルマノは三ヶ月に一度、研究所の宿泊施設から自邸に帰宅する。五人の孫、三人の息子、妻を含む総勢十五名の縁者と会食するためだ。そのわずかな隙にチャンスがある。彼はAMSSOIの警護車三台を伴走する。なおかつ彼の公車は特殊防弾ガラス、特殊合板を使用した最高峰のテクノロジーで守られている。ただ、俺のスキルがあれば彼に危害を加えるのは可能だ。」

ジファは自信に満ちた表情で話をして、こう付け加えた。

「日時は五日後。裸留枷、君を連れて行く。その為に駆動機の基本操作、性能を短期間で習得して欲しい。決断すべき時だ。俺に背くか、俺をコントロールするべくあえて協力するか。君次第だ。」

私は当然後者を選んだ。ジファの心の変遷を深く心に刻み、彼に

ヒューマニズムを思い起こさせるのが、私の役目だと確信していたからだ。それからの五日間、私は駆動機の操縦方法を覚えるのに追われた。ジファは分かりやすく駆動機のシステムを私に教えてくれた。彼は一切の躊躇なく、大きな殺傷能力を持つ武器の使い方をも私に教えてくれた。AIを搭載した「FVM」の性能と比べると駆動機は少し見劣りする。だけどオートメーション機能は優れていて私の未熟な操縦テクニックをカバーしてくれた。ジファは光高密度エネルギーと電磁波燃焼装置は差し迫った時以外では使わないように私へ勧めた。それともう一つ、特殊防護膜を使った時、体に起こる負担も、心の片隅に置いておくようアドバイスしてくれた。私とジファの奇妙で親密なコミュニケーション。つまり「トレーニング」は終わり、そして計画実行の日は訪れた。出撃する時、私の操る駆動機に乗り込んだジファは物憂げに一言零した。

「俺も平穏を望んでいた。ただ歴史がそれを許さなかった。そして裸留枷さえも……。」

そう言って彼は口をつぐんだ。駆動機は滑走路を走り抜け、大空へと飛び立った。陽差しのきらめく青空は残酷なほどに輝いていた。それは私とジファの胸の傷をえぐるように痛ましく、そして切なげでもあった。駆動機は「FVM」同様、遮蔽膜でおおわれており、人工衛星による座標特定が出来ないようにになっていた。ジファは操縦桿を私に委ねると、私の手の甲に右手を乗せて、駆動機のバランスを取った。彼はどんな状況でも、私自身が判断するよう暗に望んでいるようだった。ジファを助けるにしても、私一人が逃げるにしても。銀色に光輝く都市を眺めながらジファは呟いた。

「もし、全てが終わった時、俺が心のバランスを保っていられるならば、裸留枷の心が俺を嫌悪し、憎んでいないのならば、その時は……」

それ以上彼は何も言わなかった。出逢った当初、彼が仄かに持ち合わせていた独善的なファクターはなくなっている。自然で優雅な物腰と繊細な気づかいが彼のパーソンをもう一度形作っていた。で

も彼の色違いの瞳の奥には野性味と獰猛さが潜んでいるのも私は見逃さなかった。彼の本質は幾つものファクターで覆い隠されている。ジファの本質は時折見せる優しさと激しさの合間にかすかに垣間見えるだけだった。その時、私の胸に一つの思いが芽生えた。「傷ついたジファの心に再生する機会が訪れるのなら、私はひたすら彼を助けよう。」と。「私が時に戸惑い、無力感にくじかれようと、彼のそばにいよう。」と。私は淡いロマンティズムに身を委ねていた。同時に戦闘区域に向かう二人の気持ちがかぶっていくのも私は感じていた。冷たい面影を残す未来都市の景色は遠のき、やがて視界から消えて行く。駆動機はボディをのけ反らせ、空を高らかに仰ぎ見ていた。そして私達二人は乃之樹区Cの64区画。ノマ・ゲルマノの帰宅ルートの一角に辿り着いた。ジファは駆動機を、辺り一面を見渡せる尖塔の頂きに移動させる。後はノマ・ゲルマノの公車が通るのを待つだけだった。ジファはプランを手短に伝える。

「ノマ・ゲルマノは習慣的に助手席に座る。俺は公車のボンネットに飛び乗り、特殊防弾ガラスを破砕し彼を絶命させ、速やかに退避する。君の援護が必要だ。駆動機を尖塔から降下させて、俺が操縦席へ乗るのをサポートして欲しい。無闇に動揺しなければ簡単だ。」

若干緊張した面持ちの私に、ジファは瞳と口元に優しい笑みを浮かべてアドヴァイスした。

「トレーニング通りに実行すればいい。君は自分が思っている以上に理解力に優れているのだから。全てはスムーズに、だよ。」

私は小さく頷くだけだった。1:35、三台の警護車に護衛された黒塗りの車、ノマ・ゲルマノの公車が予定通りCの64区画を訪れた。ジファは大きく息を一度吸い込むと、操縦席から身を乗り出し、ゲルマノの公車を標準にして空を舞い降りていった。彼の衣服を風がたなびかせていく。その時、私は初めて、彼の復讐劇における演者の一人になったのだ。それは不安と恐れを私に抱かせるに充分だった。私はひっそりと息を飲んだ。ジファが凄まじい勢いで飛び乗ったボンネットは、その圧力で激しくくぼんだ。公車は balan

スを失い、蛇行し始める。ジファが防弾ガラスに手を振り上げた瞬間、残っていた意識伝達膜の作用だろう。私はジファの視覚を通して光景をイメージ出来た。ジファは防弾ガラスを一突きで粉碎すると、ひび割れたガラスを両手でこじ開けた。助手席に視点を合わせ、車内を確認するジファ。そこにはノマ・ゲルマノがいるはずだった。刹那、小さな呟きがジファの口から零れた。「いない!」。助手席には鍛練された黒服の男が、運転席には屈強な体の男が座っている。ノマ・ゲルマノ、いや彼らはジファの襲撃を予期していたのだ。次の一瞬には運転席の男がジファの胸ぐらをつかみ、車内に引きずり込むと、助手席の男がシミュレーション通りであるかのように、小型砲弾をジファ目掛けて発砲した。ジファは驚異的な反射神経で飛び退く。だが狙われた胸元をかわしただけで、砲弾はジファの右足を貫通した。ジファの右足がズタズタになったのが私にははつきりと見てとれた。ジファはうめき声を上げて前部座席の二人を押し退けると、ボンネットから空へと舞い上がった。助手席の男は何度も砲弾を発射するが、ジファは軽やかにかわしていく。私とジファが警護車だと思っていた車体は可変型駆動機で、直立型二足歩行のマシンに変型した。尖塔で待機する私は慌てて操縦席を開ける。ジファは空に流れるような曲線を描いて駆動機に飛び乗った。ジファがコックピットに乗り込むと同時に、私は駆動機を起動させ、襲い来るマシンを迎え撃とうとした。ジファが苦痛に顔をゆがめながら私に指示を出す。彼の息は絶え絶えだ。

「裸留枷、後部座席に透明の薄膜がある。『細胞修復膜』だ。それを俺の右足に貼付してくれ。止血し、細胞を増加させ、死滅を防ぐ効果がある。マシンは俺が撃退する。・・・早く!」

私は急いで「ア・フィルム・リストラクションング・セルズ」と印された薄膜を引きずり出しジファの右足、もぎ取られ、筋肉、骨血管が剥き出しになった右足の傷にあてた。ジファは多量の出血を被りながらも冷静さを失わず、駆動機を操ると二足歩行型マシンに向かい合った。彼はマシンの放った追尾レーザーをかわすとすぐに、

電磁波燃燒装置を起動させた。放たれた電磁波と光波は交錯しながらほとばしり、高温、高密度の熱エネルギーを運び、二足歩行型マシンを一突きにする。溶けていくマシン。焼け爛れていくマシンの姿は電磁波燃燒装置の威力を私に実感させ、私に不気味な印象をも与えた。ジファは追撃を逃れるべく、駆動機を遙か遠方にしりぞかせて、乱れた呼吸を整えていった。彼の顔からは汗が滴り落ちていく。痛みで下唇を噛み締めるジファに私はただこう呼び掛けるだけだった。

「ジファ、きっと平気だから。大丈夫だから。足だって義足をつければ機能は回復するはずだから！だから・・・！」

ジファは操縦席に背をもたれると妖艶な笑みを浮かべた。彼の息はまだ不安定で、痛々しかった。

「義足？裸留枷、今、この時代で医療技術はどれだけ進歩してると思う？速やかにトラブルは解消されるだろう。行こうか。人知の一つの到達点へ。」

ジファが操縦桿を握る駆動機は北東へと進路を取っていた。ジファは激痛に耐えながら一言こう零した。

「裸留枷。ありがとう。」

それから駆動機は都市部から遙か遠く離れ、特殊な建物が密集するコミュニティへと向かっていった。

見るとこの一帯の建物はオリエンタリズムで統一されている。この国は調和を重んじる中央集権的エリートと、権力を嫌う特殊な文化圏の人々とで二つに別れているように私には思えた。時計塔の地下街の住民にしてもそうだ。国民は決して一つにはまとまっていな。これが戦争の賛否をもわけているのだろうか。そう私は想像を巡らせていた。ジファは民間運営のエアポートと交信している。どうやらジファは滑走路への着陸をメインコントロールに許されたようだ。この地域には、国の規律に従順でない身軽さがあって、相手がジファのようなA級不穏分子でも別に気にかけてもないようだった。ジファは駆動機を滑走路に着陸させると、鉄製の義足を足にはめ込み、操縦席から降りて両足で歩きだした。一連の動きを彼は寡黙にとり行い、平然としていた。彼にとっては足の重傷程度はたいたハブニングではないらしい。私は慌てて彼の後を追った。ジファは管制官に申告して、駆動機の格納庫収納を求めた。交渉相手は決して模範的とはいいがたい民間企業。身分が確認出来て。なおかつそれ相応のお金をくれればOKを出すようだった。遠巻きにジファが小切手を切るのが見えた。ジファはプライバシー守秘義務を確かめると、私をエアポートから町へと連れ出していった。彼は道路の端に停まっている業務用エアバイクに乗り込み、私にも乗車を促した。私がジファの隣、後部座席に座るとジファは行く先を運転手に告げる。エアバイクは砂煙を上げ、上昇し、目的地へと向かった。運転手はお喋りな男性で政治、社会情勢について延々と話を続けた。ジファは外向的に話題をふくらませるつもりなど全くなく、ただ頷いて聞いているだけだった。運転手もジファの態度を気にかけてはいない。私にはその距離感がとても心地良く感じられた。やがてエアバイクがモスクを思い起こさせる建物の前に辿り着いた。ジファは速やかに支払いを済ませエアバイクを降りて建物へと入っ

ていく。私がジファを追いかけて入ったその建物は医療施設のようだった。中では数名の患者が診察を待ち侘びている。ジファは受け付けの女性に言った。

「フラカナ・モチエ医師はいらっしゃいますか。ジファ、ジファ・セラヴィナが来院したと伝えて下さい。」

女性は洗練された物腰、仕種、語り口でジファに応じた。

「モチエ医師は現在、研究室におられます。ご案内いたします。」

女性はスマートな振る舞いで、私とジファを研究室へと連れていってくれた。通路は斜めに交わり、鈍角に曲がるなどして少し設計が不自然だった。通路の壁は赤褐色で塗られており、そこには生物学の最先端の知識が記されていた。私には細胞への核移植について解説したパネルが特に印象深かった。女性は診療所から遠く離れた別施設へと私達を案内すると、別施設の扉を感光キーでスライドさせて部屋に入るよう勧めた。

「こちらがモチエ医師の研究室です。」

女性はその言葉を最後に、会釈をすると診療所へ戻っていった。そして私とジファは「ドクター・フラカナの研究室」へと足を踏み入れていった。研究室はセピア色の電灯で仄かに照らされており、そこが研究室などではなく、実際は医療施設であるのがわかった。そこには半球型の機械装置が五台、ミクロ顕微鏡が一つ。何かの培養機器が三つほどある。立ち並ぶガラス管の中には臓器や器官が青色の溶液にひたっていた。「再生医療」。ごく聞き慣れた言葉が私の脳裏をかすめた。「その人物」は研究室の片隅で回転椅子に腰掛け、ホログラムディスプレイに映る医療情報を整理している。彼は私達が部屋に入ったのを確かめると振り返った。白衣を着た彼は髪を短く調髪し、前髪に8:2程の割合で綺麗に分け目を作っていた。顔立ちは幼く女性的な雰囲気さえ漂っていた。青白い肌、切れ長の瞳は艶やかな印象さえあった。きゃしゃで小柄な彼はユニセックスな魅力に溢れていた。彼はジファを目にとめると、柔和に話し掛けた。だけどその語り口には知性にプライドを持つ人間特有の響

きがあった。

「ジファ、酷い足だ。大変だったね。君が取り組んでいる一大事業は大きな危険を伴う。この程度のケガくらい、覚悟していただろう？」

彼とジファはもとからの知り合いらしい。ジファは馴れ親しんだ様子でその男に歩み寄り、要件を告げた。

「失われた右足を修復して欲しい。フラカナ、君の技術と医療設備があれば二日もあれば出来るだろう。」

「フラカナ」。ジファは確かにそう言った。この優しげで知的な人物こそ、ドクター・フラカナ。フラカナ・モチエだったのだ。彼、フラカナは口元を緩ませながら言った。でも目はとても厳しかった。「高額の医療費はさけられないよ。最先端の手術を政府に無認可、無許可でどこしているんだ。僕にも相応のリスクがあるんだよ。」

「金銭的問題はない。早く手術してくれ。」

フラカナは頷くと、私の存在に気付いた。（まさに彼にとって「私」は「人」ではなく、ただの「存在」だった）フラカナは友情には厚いようだが、どこか全幅の信頼を置けない危うさがあった。ドクター・フラカナはジファに尋ねる。

「彼女は？」

ジファはためらいなく答えた。それは私にとって嬉しい言葉だった。

「俺の最良のパートナーだ。今回のピンチも彼女に助けられた。聡明で勇敢な女性だよ。名前は裸留枷。優那裸留枷だ。」

フラカナは私に歩み寄り、握手を求めた。その瞬間、不意に私の口から言葉がついて出た。

「フラカナ・モチエ。ジファの級友で良き理解者。司祭ストルツアの策略からジファを守る青年。」

私は言ってしまうてすぐに口をふさいだ。フラカナは目を丸くして笑い声を立てた。

「面白い人だ。そう僕は確かにフラカナ・モチエだ。ジファの親友

でもある。汎用科学技術協会会長ストルツアとも面識があり、大切にしてもらっている。ただ・・・ストルツアは司祭ではないし、彼の策略からジファを守るなんて、そんなドラマティックな情熱を僕は持ち合わせていないよ。裸留枷さん。」

彼は優しく微笑んだ。そして一言付け加えた。

「あなたは興味深く、「ファニー」、面白い女性だ。君なら僕の医療技術進歩のお話も心楽しく聞いてくれるだろう。よろしく。」

彼の笑顔は愛らしく童顔そのものだった。手は冷たく、皮膚は透き通っていた。

「彼女も特殊なスキルを持っているんだよ。フラカナ。君同様にね。」

そうフラカナにジファは呼び掛ける。フラカナは一言「そうか。」とだけ言うとともにジファの右足の切断部を診察し始めた。それが私の想像を超えたハイテクノロジーの「補修医療」の始まりだった。フラカナはジファを診察台に座らせると、尖端から光を発する器具で、ジファの足の傷跡から細胞を採取した。そして培養機器にその細胞を浮かべると顕微鏡で観察を始めた。フラカナは淡々と再生医療技術の歴史について話を始める。

「裸留枷さん、幹細胞という言葉は知っているだろう？ 俗に万能細胞と呼ばれる。実際、幹細胞の研究から再生医療の発展は始まったんだ。幹細胞は万能。つまり何にでもなれる。肝臓にだって、心臓にだって、もちろんもぎ取られた足にだって。」

フラカナはそう言って微笑んだ。彼は続ける。

「その幹細胞を「分化」させる、つまり肝臓か心臓か、「もぎ取られた足か」。なりたいものを決めてあげるんだ。すると幹細胞は決めてあげた組織や器官になってくれる。後はそれを傷ついた組織や器官と交換してあげる。そうすると、当たり前だね。病気は治ってしまう。そのシンプルなアイデアこそが再生医療の原点なんだ。」

フラカナは白い手袋をはめて細胞を分離させていく。フラカナは話を続ける。

「二つの例を引き合いに出そう。まず川に生息するプラナリアという生き物。」

フラカナの治療と話はテンポがいい。

「プラナリアは体を二つに分離させると、二匹のプラナリアに変わる。「彼ら」は分裂して増えていく生き物なんだ。それは「彼ら」がどんな細胞にも変われる全能性幹細胞を持っているからなんだ。」

培養機器の円筒状パーツから青紫色の光が、培養液の中の細胞に射し込む。フラカナは手なれていた。

「一方も一つの例。イモリだ。」

フラカナは無邪気に笑った。

「イモリの手足も切られたら再生する。それは知ってるよね。「彼らの」筋肉は蘇り、軟骨や腱や靱帯に再構成される。でも「彼ら」は全能性幹細胞を持っているのではない。不思議だね。じゃあ一体「彼らは」どうしているのか。」

フラカナは一瞬だけ手を止めるとすぐに治療を続けた。

「それは「彼ら」の分化した細胞が未分化な細胞に戻るからなんだ。つまり一度手になった細胞が足にもなれる能力を「彼ら」は持っているんだ。人間には残念ながらそんな能力はない。」

フラカナは一度だけ手を拭った。

「さて全能性肝細胞を持つプラナリアとイモリの再生能力の仕組みは分かった。じゃあ人はどうする？人間はプラナリアのように全ての細胞が全能性幹細胞なのでもなければ、イモリのような特殊な能力を持っているのでもない。」

フラカナは培養機器を操り、ジファの細胞を乗せた薄い膜を半球型のプラスチックで保護した。

「答えは簡単だ。卵子の核を取り出し、核移植をした受精卵を作ればいい。受精卵は五日後には内部細胞塊を持つ胚盤胞段階に入る。

この内部細胞塊から取り出した細胞こそ、今となっては懐かしい響きさえするES細胞だ。ES細胞は全能性を持つ。どんな器官にも組織にもなれる。万能だ。さあこれで問題解決だね。」

フラカナはプラスチックで覆われた細胞をより詳しく調べ始めた。有害な不可視光線でも使うのだろうか、彼はゴーグル型の色眼鏡を着けた。

「でも何かおかしいね。ES細胞を使った再生医療がビジネスで大成功を収めたという話は聞いたことがない。なぜか。それはES細胞には三つ問題があるからなんだ。まず一つ目。ES細胞は元は受精卵だ。そのまま育てれば胎児になる。「コンプライアンス的に無理」という奴だ。二つ目、他人の卵子を使った臓器を移植すれば、患者には当然拒絶反応が起こる。そして最後の三つ目が、もし仮に自分の卵子を使ったら、それはクローン技術を進歩させる可能性がある、というもの。・・・危ういね。」

フラカナはゴーグルを外し、回転椅子に腰掛けると一呼吸置いた。「そこで生物学者は生殖細胞を使わない多能性細胞の研究に取り組んだ。・・・さて少し休憩しよう。僕の経歴でも話そうか。戯れにそして少し「自慢げに」。」

私は冗談紛れに「いえ、結構。」と口にした。するとフラカナは目を丸くして「そう?」と言った。どうやら彼は冗談が通じる相手らしい。優しいで軽やかな医学講義をするはずだ。私は人柄を直感的に見抜けるようだ。作家になって良かった。するとジファが手短かにフラカナの経歴を話してくれた。

「フラカナは再生医療に携わる新興企業をおこして、医学の最先端を走ってきた。ただ裸留枷もフラカナの人柄が分かっただろう。彼の性格上、企業間の経済競争は肌に合わなかった。結果、今は独立した医療施設を作り、独自の技術で治療を行っている。この異文化的コミュニティの僻地でね。それがフラカナの現状だ。」

私は神妙な面持ちで聞いていた。フラカナはフェアで開放的な人物のようだ。ビジネスで相手を出し抜くような人間ではない。企業間の争いが性に合わなかったのだろう。フラカナは検査の終わった細胞を、もう一度ことまかに観察し、話を始めた。

「さて再生医療の話の続きだ。ES細胞が使えないと分かった生物

学者、医学者達は別のアプローチを始めた。そして見つけたんだ。細胞の未分化性を持つ蛋白質をね。」

フラカナは、今度は培養液の中の細胞に何か手を加えている。

「細胞の未分化性を持つ蛋白質。つまり「なんにでもなれる」蛋白質だ。じゃあその蛋白質を作ってしまった方がいい。その方法が「ナノグ」と呼ばれる遺伝子を培養細胞に挿入するというものだった。」

フラカナは頬を布で一度拭った。

「さあこれで「なんにでもなれる」細胞の出来上がりだ。これが再生医療の一つの到達点、多能性幹細胞「iPS細胞」だ。」

フラカナは特殊な処理をされた細胞を培養機器から取り出すと、半球形状の機械装置に取り分けた。

「だが細胞に遺伝子を直接挿入したiPS細胞は癌になる危険があるってね。これもそのままでは使えなかった。けど今では「ナノグ」を使わずにiPS細胞を作る方法が出来上がっている。そう「iPS細胞」は安全に使えるようになったんだ。」

ジファが付け加える。

「その手法を確立した人物こそ、ドクター・フラカナ。フラカナ・モチエ大先生だというわけだ。裸留枷。」

フラカナは甘い表情で屈託なく笑った。私も彼の陽気さにつられて笑った。ジファが不自由な足どりで、フラカナが細胞を取り分けた機械装置に歩み寄った。フラカナはイタズラっぽく目配せして機械装置を指差した。

「たった一つの細胞から「もぎ取られた足」を短期間で再生出来るのかどうか疑問に思うだろう？その疑問を解決するのが、この機械装置「高速空間細胞分化システム」だ。」

「はっ？」

私は聞き返した。彼は目を輝かせて笑った。

「早口言葉みたいだろ？「高速空間細胞分化システム」だよ。」

「「高速空間細胞分化システム」？。」

彼は満足げだった。

「そう。このシステムを使えば、機械内では時間が僕達より何倍も早く経過する。この機械装置内ではノットに近いスピードで時間が経過するんだ。」

私は前のめりになってきいた。

「どうやって？」

フラカナは謎めいた笑みを浮かべた。

「僕は理論物理学者ではないからね。その点は秘密にしておきたいんだ。」

私は秘密を解き明かしてほしかった。でも次のフラカナの言葉でその気持ちは消えた。

「それに・・・人生にミステリーの一つや二つ。あった方がいいだろう？」

私は目を輝かせた。フラカナは最後に締めくくる。

「このシステム内では血管、筋肉、骨、靱帯、種々の組織が短期間で復元される。時間が早く過ぎていくからね。成長期間も僕達には短く感じられるというわけだ。後は組織の位置情報、繋がり、構造をインプットすれば、幾つもの組織で作られた身体部位を再生出来る。これでジファの足も元通りという筋書きだ。明快だろ？」

私は元氣よく返事をした。

「はい！ドクター・フラカナ。あなたは賢いんですね！」

「そう！僕は賢いんだ！」

そう言い合って二人は元氣に笑った。「アッハッハッハッ」。

ジファがその様子を、少し距離を置いて見つめていた。彼は足を引きずり、フラカナに尋ねた。

「フラカナ、何日かかる？」

「ジファ、慌てるなよ。僕は今この愛らしいお嬢さんとお話し中なんだ。・・・分かったよ。そう深刻な顔をするな。うん、そうだな。三日もあれば充分だ。」

「急いでくれ。」

「任せてもらって結構。その間、僕がこの医療施設内に宿泊先を確

保するよ。しばらく寝泊まりするといい。」

フラカナは茶目つ気を見せてジファに見えないように手を広げて、私にアイコンタクトをしてきた。私は小さく頷いて応じた。私はジファとフラカナの微妙な関係が分かった気がした。フラカナがメイ・ンコントロールセンタ―に連絡を取り、宿泊室を手配してくれた。それを確かめて私とジファはフラカナの研究室を後にした。私は笑顔でフラカナに手を振った。フラカナも笑って手を振り返してくれた。私はひとときの医学講義から気持ちを入れ換えて、ジファと私の境遇に思いをさせた。するとジファが突然、口元を抑え、声を押し殺して笑い出した。

「裸留枷。無理しないでいい。笑いたい時は笑うといい。フラカナは知的で面白い男だ。ユーモアを感じるのも当然だ。」

私はほっと一安心してジファと一緒に笑った。それは二人にとってほんの束の間のひとときだった。私はジファのもう一つの魅力を見つけた気がした。それは少し温もりがあつて、柔らかかった。彼の冷静で時に残酷でさえある特長とはまた少し違う赴きがあった。私は心温まる思いでジファと二人で宿泊室へと向かっていった。

模造の身体 5

宿泊室はメインコントロールで記録したジファの声紋を聞き分けて滞在者を特定していた。アーチ型の両開きの扉がスライドすると、そこには穏やかな空間が広がっていた。室内は科学にアイデアを得た近代的アートでインテリアされている。額縁型のモニターには、夜闇に浮かぶ赤い薔薇の月光写真が映っている。薔薇は花開いては、しほみ、また花開く循環映像になっていた。その美しさに私は見惚れて足を進めた。部屋の中央にある円筒には幾種類もの深海生物のホログラムが浮かんでは消えて、浮かんでは消えていく。彼らの生息域も映し出される。「深海8500m・深海1万2000m・深海……」。再現された静かな深海世界は魅惑的だった。視線を上げると、宙に浮かぶ六面体のスクリーンが浮かんでいる。スクリーンにはニューロンが結合する映像が映り、その奥には、なんだろう……、膨大な数式、何かの数学的証明がスクロールして映し出されていた。六面体スクリーンの底に「リーマン予想の証明と数学者の脳生理学的関係」と書かれていた。良く分からないけど、多分数学者が数学の証明をする時に、ニューロンがどう結合していくのかをシミュレートしたものだろう。そしてジファが目に向けた窓際には、七色に彩られた置物が飾られている。置物には曲線的な文字で「蛍光色素で染色した脳構造」と書かれていた。それは抽象的な水彩画をイメージさせた。ベッドに歩み寄ろうとした私にふわふわとした手触りの白い物体が浮かんで近づいてくる。手を伸ばすと粒子のように離散し、また別の場所で再形成された。ジファが言う。「雲生成のシミュレーション映像だ。単純なプログラムを組み込み、生物のように動く。これらの室内装飾は全てフラカナの趣味嗜好だ。雑然としながらも秩序立っている。彼の思考様式の反映だ。」

私はフラカナの持つ独特の美意識に魅了されて吐息混じりに零した。

「フラカナ。ドクター・フラカナ。彼は科学を信じているのね。遊び心があつて楽しい。」

ジファは私のベッドから幾分離れた場所にある、もう一つのベッドに腰掛け、簡易義足のメンテナンスを始めた。彼は沈黙していた。ジファとフラカナは人間的には相通じて、思想、信条上では相容れないのだろうか。私は少し陰のあるジファの横顔を見つめていた。夜が更けると、宿泊室に天窓から月明かりが差し込んだ。月明かりに照らされて私とジファ、二人のベッドを隔てるフロアにガーベラの水로그램が浮かび上がった。「神秘」の花言葉を持つガーベラは鮮やかに花開いていた。私はふとジファに問い掛ける。

「ジファ、あなたは科学が嫌い？」

彼は淡々と答えた。

「いいや。」

「あなたのお父さん、ロウ・セラヴィナ。そしてカルツァ・ゼウが殺された理由。それは科学的アプローチの違い。それなのにあなたは物理学への愛着は失っていないと言った。」

ジファは天窓からのぞく半月を仰ぎ見て静かに言葉を紡いだ。

「科学やテクノロジーに危険性、悪が潜むんじゃない。悪徳は常にそれを利用する人間の方法論に潜むんだ。」

私は呟く。

「だから・・・、あなたは復讐をやめないのね。」

ジファは黙って何も答えなかった。彼は体の向きを変え、ガーベラを恍惚とした瞳で見つめた。

「時に思う事がある。全てが「神秘」のヴェールで覆われたままだったら、人間は幸せでいられたらどうかと。」

私の心に古代の数学者の言葉がよぎった。

「数で記述された宇宙の神秘を繙けば、人は永久不変の光の領域に、永遠に！留まることが許されるだろう。」

私はただ口をつぐみ、神秘の明かりに灯されたガーベラを見つめるだけだった。フラカナ・モチエの医療施設に泊まって一日目、ジ

フアはネットを使って情報収集にひたすらはげんでいた。政府の発表では、ノマ・ゲルマノ襲撃者は近日中にも特定され、逮捕もしくは殺傷処分が行われるだろうとのことだった。アノマ・カロメの「反戦組織掃討計画」も着実に進んでいて、検挙された活動家は多地域に及んだという。性別、年齢を問わず不審な点があるか、反戦組織とのコミットの疑いのある人物は次々と逮捕されていった。ただ、反戦組織の重要人物が多数いるはずの琥珀の広場・地下街は現時点ではあえて放置されており、計画チームのブレインが何か計略を立てているのがたやすく分かった。ローズ・ジニーやカザは安全圏に現在、潜伏しているらしく、彼らが逮捕されたというニュースは聞かない。ジフアは内政に敏感なわりには外交上の紛争、つまり国家間戦争には興味が余りないらしく、私に国境沿いの砂漠地帯で軍事衝突が起こったと短く伝えただけだった。彼はギラルド國務大臣の好戦家振りを少し風刺しただけで基本は無関心だった。一方私は医療施設内の図書館で一日を過ごした。これもフラカナの趣味だろうか、蔵書の充実ぶりから、デジタルメディアだけではなく、アナログメディアも大切にされているのが私にはわかった。私は半日を掛けて「記号論と脳認知力の発展」と「カッティング・エイジ（最先端）における人間の定義」という二作の本を読んだ。「記号論・・・」の方は、自然の知識は記号として認識するのが望ましく、近い将来には自然言語はいらなくなるとの予測をしていた。「カッティング・・・」は遺伝子改良、医療技術の進歩により人類は進化の過渡期にあるとし、科学の最先端では「人間は新しい存在」として定義されるべきだ、と書かれていた。私の現実世界とジフア達の世界がマルチバースの内の二つだとしても、両者にはかなりの違いがあるように私には思われた。ジフアの世界はとても急進的だ。ジフアの世界は変わっていく人間観を受け入れ、加速させるのにとっても熱心で、熱狂的だった。一方私達の世界では、「新しい人間観」についてはまだ議論の余地がある。様々な人々が慎重に話し合いを重ねている。私は、それはそれで好ましいと思った。ジフアの世界は何か

「異質」なのだ。夜半を過ぎ、ベッドに横たわり、毛布にくるまっていた私はその感想を素直にジファに伝えた。ジファはその中身に心惹かれたようで、私の現実世界の考え方がジファの世界の百年前の考え方に似ていると言った。そして彼は一つの単語に着目した。

「「異質」？という観点から？人間性、人間味に欠けているという観点からか？それとも生理的な感覚？いずれにせよ、俺も裸留枷、君の言う「異質」さを感じているのかもしれない。潜在意識下で俺を突き動かすのは理性ではなく、やはり本能的な「何ものか」だからだ。例え、遺伝子、ヒトゲノム、蛋白質の働き、脳認知学、神経生理学の全てが解明されようと俺のスタンスは変わらない。」

ジファはそう言うのと頬に手を充てて物思いに耽った。私はその姿に、彼の考えと、彼の劇的な半生を垣間見る思いだった。同時に私はジファとカタチのない「感覚」を共有出来たのがとても嬉しかった。ジファは最後に呟いた。

「真理が思いのほかシンプルだったとしたら、人類のあらゆる争いは過去の遺物になるだろう。悲しくも、喜ぶべくもありながら。」

私は天窓に映る朧月夜を言葉少なに見つめていた。医療施設滞在二日目、ジファは医療施設から出て、裏通り界限に出掛けていった。そこに立ち並ぶ店舗の内一つ、ミリタリーショップで銃火器を中心とした軽装備を買ったようだった。意思伝達膜の効果はまだ私に残っていて、その光景は私の心に時折映し出された。私は医療施設の簡易マップで院内構成を確かめた。施設はとても充実していた。スポーツシミュレーションフロア。リラクゼーションフロア。音楽、絵画、彫刻などの美術道具一式が取り揃えられたクリエイティブルーム。舞台、ライブコンサート、映画、ドキュメントなど資料映像が見られるモニタリングルームなど。特に私の興味を惹いたのが、半透明のドームで覆われた中庭だった。色鮮やかな花々が栽培されていて、その赴きはさながら「庭園」だった。私は中庭で陽差しを浴びて休んでいる車椅子の男性に歩み寄った。男性は壮年にさしかかり、肌のきめ細やかさとは対称的に髪には白髪が数多く見られた。

表情は穏やかで、自らの境遇を達観しているようでもあった。私は中庭を羽ばたく蝶々を見つめた。蝶々の紋様は独特で、私の記憶にはない亜種に思えた。私は独り言のように呟いた。

「あの蝶々は『ジファの世界』でだけ進化したんだろうか。『私の世界』にはいないはず。」

男性は私の言葉を耳にとめてくれたのか話に応じてくれた。

「あの蝶々は正式学術名称『黒極彩色点粒アゲハ』と言います。約五億年前に絶滅した種族です。ドクター・フラカナの再生プロジェクトの一環で復元されたんですよ。化石に残る遺伝子を抽出する方法で。」

私は男性に話した。

「ドクター・フラカナは最新テクノロジーを使うのに積極的です。生活環境をも変えていく。とても素敵な人ですね。」

男性は私の問い掛けには直接応じなかった。

「あの花。花びらが非対称に育った紫色の花をご覧なさい。あの濃紺の花は種子植物と裸子植物の進化の過渡期にあります。おしべが退化し過ぎて花粉を生産する能力がなくなったのです。しかし美しい。あの花を含めてこの庭園の植物、昆虫達は全て三億年以上前に絶滅した品種なのです。」

私は紫紺と紅色の混ざった花。赤とグレーに彩られた花。極彩色に彩られた花。名前も知らない花々に目を向けた。男性は言う。

「これらは全て、生命の多様性を認めるドクター・フラカナが再生させたのです。」

私は幻想的な装いさえある景色に見ほれていた。私は男性に尋ねた。

「随分お詳しいんですね。生物学にご関心が？」

「何度も通院していれば次第に興味も沸いてきますよ。院内にある検索機で院内情報は全て分かりますので。私は浅学です。素人の趣味の域を出ませんよ。」

「そうですね……。お体の具合はいかがですか？」

彼は少しふさぎ込んだ面持ちを浮かべたが社会的ではあった。

「私は先天的な遺伝子異常による血流障害が頻繁に起こる病気でしてね。組織、身体部位が何度も壊死を起こすのです。私が生きていられるのはドクター・フラカナのおかげです。私の肝臓、腎臓、膵臓は全てiPS細胞から作り上げた臓器です。右足と両腕も結合して頂きました。特に右足は今回で三度目です。」

「遺伝子医療で病はなくならないんですか？」

「遺伝子医療もまだ発展途上です。疾患遺伝子が分からない症例もまだたくさんあるのです。特に私の病は原因遺伝子が分かっているのです。」

男性は落ち着いていながら物憂げでもあった。

「私は科学が人類の難題を解決すると信じて疑いません。ただ臓器と身体部位をツギハギした体を持つ私は本当に私自身なのか疑問に思うこともあります。今では、かつて「心」「意識」「精神」、あるいは「魂」と呼ばれた「何か」が私のアイデンティティーの拠り所ですよ。」

男性はやや精気を取り戻し、毅然とした。

「その「何か」でさえ脳生理学と遺伝子学で、科学的に分析され、再生される組織の一つになるかもしれません。その時人間はより高いレベルの生命体に進化するでしょう。新しい人間像が必要となるはずです。文明揺籃期に人類が宗教を必要としたように。」

私は男性の言葉に心地良く耳を傾けながら、色とりどりの羽根をはためかせる幾種類もの蝶々の群れを見つめていた。夜、私はベッドに横になるとジファに男性の話をした。ジファは私に背を向けてかすかな寝息を立てている。彼は驚くほど淡泊だった。でも私は彼の言葉に、ある種の覚悟が秘められているのも感じ取った。

「科学的パラダイムは新しい知識、新しい技術が生まれればたやすく覆される。その新しい世界観、「ネオ・ジオ」をどう健全な方向へ舵取りするかが人間の役目だ。すさんだ思想を育めば無為な犠牲者が大量生産されるだけだ。俺はそう思っている。」

彼、ジファは科学と人間の共存を願いながらも、どこかそれ否定的だ。私は尋ねた。

「武器は何を買ったの？」

「レイソード、レイガン、簡易制御の爆発物を数個。君にも装備してもらおう。君の安全を守るのは俺の最低限の義務だ。それと君への親愛の情もある。」

私はジファが素直に「親愛の情」と口にしたのが嬉しかった。でも私には彼が依然闘いのただなかにあるのが分かった。すると自然とは隔たれたはずの宿泊室にどこからか虫の鳴き声が届いた。それは澄みきった響きを宿泊室に染み渡らせていった。

模造の身体 6

・・・医療施設滞在三日目。「それ」・・・は、ガラス管の中、青紫色の培養液に浮かんでいた。フラカナに呼び出されて、私とジファはフラカナの研究室へと訪れていた。「それ」。血管、筋肉、骨、種々の組織が形作った「それ」は、ジファの身体部位「脚部」にほかならなかった。たった一つのiPS細胞から作った、「それ」は何の差し障りもないキレイな足に成長していた。診療はiPS細胞を培養し、ジファの足を作るプロセスを経て、いよいよ脚部をジファの体に結合するところまで来ていた。フラカナはどんな治療も日常の一部だからか、特になんの感慨もなく、医学的説明をした。

「このジファの足を保存している培養液は特殊な等張液だ。窒素やカルシウム他、多種の元素を配合して作ってある。緻密な数学的計算が必要だがたやすく出来るしろものだ。再生したジファの足の細胞活性度は、原型と10のマイナス10万乗の違いさえないほど近似している。かつ、細胞間の連携も万全で、すこぶる健康体だ。拒絶反応、細胞の連携のバランスが崩れることは10割がたない。さあ、後はこの足を君の患部と結合するだけだ。ジファ。君のオーダーメード、お眼鏡にかなったかい？」

「フラカナ。充分だ。感謝するよ。」

「君の性格からすれば随分なほめ言葉だ。」

フラカナはガラス管から培養液を排出し、脚部を滅菌膜で包みこんで取り出した。ジファは簡易義足を取り外し、診察台に体を横たえる。診察台は特殊抗菌ガラスで保護されていた。フラカナが結合手術のプロセスを説明する。

「抗菌レーザーを照射しながら、患部と脚部の結合を行う。各組織の接合はオートメーション機器「AOS」が行う。「AOS」は各組織の配置データから結合手術をすでにシミュレート済みだ。安全は確保されている。ものの十五分も経たない内に君の足は復元され

るだろう。手術後、時間にして十分程度だろうか。義歯をはめた時にも似た違和感を覚えるかもしれない。それは移植細胞が自己修復力、自己治癒力を使つて、体に適応を始めた証拠だ。すぐになくなる。速やかにジファ、君の健全な体は復元される。さあ、始めようか。」

フラカナは、彼が「AOS」と呼んだ機器を診察台に近づけると自動稼働に任せた。抗菌レーザーは眩しい光を瞬かせて、結合手術を始めた。「AOS」はまるで人間の手足のように、いやそれ以上に緻密に動いた。ジファの世界における機械工学はとも進歩していて、機器のミス、手術の危険性は0に近いようだった。結合されていく「足」を見つめながらジファは個人的な想いを口にした。

「陰惨でも、非人間的でも、無機質でもない。これが発達する医療技術との共存だ。人間は身体的、神経的疾患を嫌う。それを補うのが医学の役目だ。人間の心は変わっていく。時に利己的に、時に無情に。それが本能だからだ。生存の欲求を満たすための。ノスタルジーに浸っていれば、人類は生態系の頂きから転落する。闇に脅え、少ない獲物で飢えをしのぎ、生殖だけに意義を見出す原初的哺乳類に退歩するだろう。」

フラカナはジファが模索しつつ手に入れた考えに共鳴していた。フラカナは穏やかな瞳でジファの話に耳を傾けている。ジファは続けた。

「文明の後退をまぬがたいのならば、生命倫理を再構築しなければならぬ。これは進化の途上にある人類が淘汰されるか、されなにかに関わる問題だからだ。だから、人は、変わらなければならぬ。」

フラカナは黙って聞いていた。医療現場の実情、科学の最前線について詳しいのは当然、専門職にあるフラカナの方だ。それなのに、彼は自分の意見を口にはしなかった。それはジファの言葉に、激変を重ねた人類史の面影を見たからだろう。彼はジファの考えに口を出すような人間ではなかった。彼自身、合理的で矛盾のない生命観

の持主であつたとしても、ジファの言葉の重みを充分理解していたのだろう。やがて「AOS」による結合手術は終わり、診察台からジファは立ち上がった。ジファは体の一部として？がった右足の感触を確かめていた。彼は足を二、三度踏み鳴らし、満足したようだった。フラカナがジファに語りかける。

「ジファ。君の結合手術は今回で二度目だ。不都合はないと保障する。もし仮に僕の手術に不満があつたのならまた来てくれ。真っ先に対応するよ。それが親しい間柄にある君と僕との約束だ。」

「ありがとう。ドクター・フラカナ。君の医療技術、知性には常に敬意を払っている。今度会う時には、一人の友人として話をしよう。脳認知学や数理論理学について。もっと軽くポップソングの移り変わりや、メインカルチャーとサブカルチャーの関係について。君の大好きな舞台女優ボーア・ニルヴァナの話もしよう。」

フラカナは笑った。

「君は嫌いだろう？彼女のこと。ボーアの瞑想的で神秘掛かった瞳が「シャーマン」をイメージさせるって。」

「俺は親友が大切にする人間は好きになれるんだ。」

手術の終わったフラカナは、ジファとの会話を心から楽しんでリラックスしていた。彼はジファに手を差し出す。

「それじゃあ、ジファ。また。」

ジファはフラカナと握手を交わし、私を優しくエスコートするとフラカナの研究室を後にした。ジファと私は医療施設の扉を開けて、街に足を踏み出した。照りつける陽差しを仰ぎ見たジファの瞳は獐猛で猟奇的でさえある鋭さを取り戻していた。ジファのわずかな休息は終わりを告げ、権威との凄まじい闘いへと再び彼を駆り立てていた。路傍でジファは業務用エアバイクを停めると、後部座席に乗り込んだ。私も慌てて彼の後を追った。運転手の男は肌が薄黒く日焼けしていた。愛嬌のある黒く大きめの瞳をした男性で、時事問題や社会風潮について陽気に話してくれた。ただジファは上の空で、私も男性の話に相槌を打つ気分ではなかった。私はジファと視線を

そらして、移り行く街の景色を眺めた。そして無意識的に何の意図もなく、ジファの右手に私の掌をそつと添えた。ジファは拒みもせず、特別な関心も払わなかった。彼は黙っていて、二人は静かに冷えきった手を触れ合っていた。多分お互いに違う方向を見つめていたのだろう。見るとこの街の建物の作りは街全体の調和よりも奇抜なデザインを大切にしていた。この街は商業が盛んな様子で客の目をどう惹き付けるかに建築家の関心は向いているようだった。街は活気に溢れ、慌ただしくありながらも、情感豊かだった。住民の言葉は独特のイントネーションで心地よいトラディショナルミュージックのように私の耳に響いた。この街の目に映る景色、一つ一つが魅力的だった。私は背を座席にあずけた。目に映るままに任せた建物の数々は、陽差しを浴びてとても美しかった。ジファの表情を間近に確かめられはしなかったけど、彼は澄んだ晴れやかな微笑みを口元にきつと浮かべている、そんなイメージをこの街は私に抱かせてくれた。エアバイクがエアポートに着くとジファは支払いを済ませ、私の手を取ってバイクから降ろしてくれた。ほんの一瞬だけ垣間見えた彼の表情は陰りがなかった。ジファは一つの決意を胸に秘めた澄んだ瞳をしていた。彼はエアポートで事務的な手続きを済ませて、関わった従業員全てに多めのチップを手渡していた。それは彼のこの街への愛着、感謝の気持ちの表れに見えた。私とジファの二人は格納された駆動機に乗り込んだ。駆動機はエスコーターの手引きで滑走路を疾駆し、青く澄み渡った大空へと飛び立っていった。ジファは一つの区切りがついたのを確かめるように官能的に空を仰いだ。彼は私の体のバランスが崩れないように私を抱き寄せた。そして彼は濃密なカタルシスを感じさせる瞳を薄く見開いて呟いた。

「今、何も不可能はない。君が愛の果実を摘み取る時。百花繚乱の花園に君は抱かれている。」

「誰の言葉？」

「800年頃前、農夫で画家でもあったフォルフ・ガンの詩句だ。彼は詩才にも恵まれていてね。多くの詩集を活版印刷で発表した。」

商業的に大きな成功は得られなかったが、俺の好きな芸術家だよ。庶民の素朴な情感を描いた男だ。今でも人は時に愛着をもって彼の詩を引用するほどだ。」

ジファの瞳に純粋な輝きが増した。

「目に見えぬ風よ。この刹那に私の想いを抱き寄せてくれ。いまだ見ぬ海の最果て。孤島の島国へと二人を運ぶべく。」

駆動機は雲を突き抜け、上昇していった。私はジファの腕に抱かれていた。そして私は確かに、決して目には見えない、感じとれないはずの、吹き抜ける風を感じていた。やがて駆動機は琥珀の広場、時計塔の地下街へと戻った。時計塔の地下街、美術館のアトリエに帰ったジファを待ち受けていたのはローズ・ジニーの平手打ちだった。彼女は心配の余り血色が悪く、激しい口調でジファを問いとがめた。三日間に渡る不在、音信不通、報道から来る不安。彼女の穏やかではない心が厳しい顔つきに表れていた。ジファは身振り、手振りで右足の医療手術の事実を伝えたと笑みを浮かべた。彼の瞳は本当に微笑んでいた。自分を心底気づかう人間がいるのが嬉しかったのだらう。ローズ・ジニーはジファの純粋さに戸惑ったのか、額に指先をあてて言った。

「私は「掃討計画」の対策に追われているから。」

そう言う彼女はその場を立ち去った。彼女はジファのリラックスした表情を見て明らかに戸惑っていた。よほど心配していたのだらう。理性的な彼女には似合わない取り乱し方だった。ジファは窓辺にある籐椅子に腰掛けると少し愛おしげに、ぶたれた右の頬をさすっていた。私はジファとローズ・ジニー、二人が適度な距離を保ちつつ、深い親愛の情で結ばれているのを知った。ローズ・ジニーは反戦闘争のさなかにありながらもジファに純愛にも似た感情を持っている。私はそれを羨ましく感じ、そして二人の仲にほんの少しだけ嫉妬した。私は柔和な瞳をしているジファを見つめていた。ジファは美術館のアトリエに帰ったその日の午後から夕暮にかけて、ずっと機嫌良さそうに窓越しから地下街の景色、人通りを眺めてい

た。彼は心地良さそうに指でリズムを取っていた。夕食時、私は食卓を挟んでジファと食事をとった。私はジファにきいた。

「幸せがすぐそばにあるの、分かっているんだ。」

ジファは笑って何も答えなかった。クリームスープを口元に運んで料理を楽しんでいるだけだった。彼は命をかけた闘いで心が占められている、それが私には分かった。彼、ジファはいつまで私のそばにいてくれるだろう。明日になれば彼はいなくなってしまうかもしれない。明日になれば彼は永遠に姿を消してしまうかもしれない。私は彼に伝えたい思い、伝えたい言葉があつたはずなのに、カタチに出来なかった。私はただもどかしくて顔を伏せるだけだった。時を刻む秒針の音がアトリエに淡々と響いていた。夜半、ベッドに横たわる私に壁を隔てて呼び掛ける声が聞こえた。ジファだ。

「裸留柳。俺の身に何が起ころうと、俺がどんな暴拳を犯そうと俺の本質は変わらない。・・・決して忘れないでいてくれ。」

私は手に触れると壊れそうな、消えてしまいそうな繊細な瞬間を手放したくなくて、すぐに体を起こした。その途端、「その瞬間」、ジファとの大切なやり取りは、時間は、跡形もなく、余韻や感傷さえ一切残さずに消えていた。何事も無かつたかのように。素知らぬ顔をして、それは消えた。私は静寂に包まれたアトリエに、二人の距離を感じて、胸元を強く握り締めた。切なく、甘い情緒が私の心を締め付けていた。・・・次の日、まだ早い朝、私はぼんやりと目覚めた。射し込んでくる陽差しを私は仄かに感じていた。私は乱れた髪、眠たげな瞳のまま、毛布にくるまり、ベッドに腰掛けていた。私の頭は様々な情報、出来事を素早く整理するとベッドから飛び起きて、ジファの寝室の扉を開けた。ベッドは綺麗に整えられ、毛布はたたまれていた。ジファの姿はもうそこにはなかった。私は彼がまた復讐を始めたのを知った。そして最終的な目標に向けて再び動きだしたのも。私は胸が切なくて、ただ立ち尽くしていた。私はジファの心をつなぎとめられない。その事実をもう一度強く思い知らされた。そして私は体の力が抜けて籐椅子に腰掛けた。私は青いガ

ラス細工で縁取られた窓の向こうを眺めた。地下街の賑わいと活気が徐々に増していくのを私は感じた。私は瞳を閉じてジファの行動がイメージされるのを待った。私は意志伝達膜の効果がまだ残っているのを期待したのだ。私が幾度か瞬きをすると、ぼんやりと情景が心に浮かんで来る。意思伝達膜の作用だ。ジファのいる場所……

。ここは……。どこだろう。綺麗に刈り取られた芝生が広がり、足元にはなだらかな起伏がある。ジファの視線の先には旗のはためくポールが立っている。私はおぼろげに分かった。ここは……。ゴルフ場だ。芝生はティーグラウンド。ポールがあるのはグリーンだ。ジファはグリーン脇のバンカーに歩み寄っていく。バンカーでスイングを繰り返している人物は年老いた男で、白銀に染まった髪の毛を綺麗に調髪していた。身だしなみは緑色のポロシャツ、灰色のズボンという軽装だった。彼はバンカーからのアプローチショットを自分のペースで何度も練習している。彼は数少ない人生の余暇を楽しんでいるようだった。ジファが足を止めると男はショットの手を休めてジファと向かい合った。男の眼差しは濁りがなく、悪意や敵対心を一切感じさせなかった。深いシワの刻まれた顔には彼の知性と成熟した人格が滲み出ている。それが彼の人生が決して平坦ではなかったのを物語っていた。彼はジファに気さくに話し掛けた。

「ジファ。足はもう治ったのか。」

ジファにも激情は感じられなかった。

「ええ、おかげさまで。ゴルフは老年期の趣味としては最適だ。頻繁に？」

「多忙でここ数十年クラブは握っていない。人生の終わりくらい好きなスポーツに打ち込もうと思ってね。」

男は会話に適度な間合いを持たせて、余裕があった。男はどこか達観した口振りで話を続けた。

「それにしても見事だった。君を計略におとしめるプランは完璧だった。君の超人的な身体能力にAMSSOSIのエリート達ですら対応出来なかった。鮮やかだ。素晴らしかったよ。」

ジファは率直に、素朴な疑問を彼に投げ掛けた。それは多分ジファは、ターゲットが誰であろうと、その人物の人格を尊重するからだろう。

「先日の罠に比べて、今朝は行き過ぎるほど無警戒で無防備だ。護衛どころか、キャディーさえ付き添っていない。一人の孤独な時間を過ごしている。危機感がなく、防衛本能にも欠ける。何か心境の変化でも？」

男は身の危険を少しも感じていない様子だった。淡々とジファの質問に答える。

「この年齢になると自分の引き際、死に時があらかじめわかってね。役目が終わつたと実感する時があるんだ。それに・・・あの罠は私のアイデアではない。」

ジファはこの老いてなお、潔い男との会話にかすかな心の平穏を感じているようだった。

「死に従容と向き合えるのは高尚な美德だ。ノマ・ゲルマノ。あなたのイデオロギーを確かめたい。ゲルマノ。あなたは政治と科学が？がるのは悪だとの信念を持っていたはずだ。それなのにAIと脳生理学を使った陰謀に協力した。思想の移り変わりの理由を、俺の心にとどめておきたい。」

男、ノマ・ゲルマノ、汎用科学技術協会会長ノマ・ゲルマノは力の抜けた理想的なスイングでバンカーショットを一度、試みた。ゴルフボールはグリーンをなめらかに転がり、ピンそばにほどよい距離を残して止まった。彼は深みのある声で語る。

「私は、「信念」という考え方自体、長年に渡るAIの研究でなくしてしまったんだ。実際私は人間の脳と行動認知学の関係について興味深い結論に達した。人間の脳は興奮作用をもたらす行為や思考に愛着を持つが、その電気反応が途切れる、もしくは少なくなれば、それらの行動や思考への愛着はなくなる。」

ジファは冷たく言い放つ。

「それはずいぶん殺伐とした見解だ。」

ゲルマノはジファの辛辣な言葉を一切意に介していない。

「人間、一つの物事に関心を持ち続けるのは稀だ。それなのに人間は欲望に突き動かされてそれを持続させようとする。金。物欲。功名心。そして「信念」。実に滑稽で哀れだ。」

ジファは何も言わずにゲルマノを見つめている。ゲルマノは言う。「私は「信念」という幻想、ただのニューロンの発火現象に過ぎない現象から開放されたのを嬉しく思っている。今は自由な気風を味わっているよ。老境にさしかかって諦観をえたのも何かの巡り合わせだろう。」

ジファはゲルマノの主張をしつかりと聞き届けて、静かに彼へ銃口を向けた。ゲルマノは全く動じずに彼自身の社会、政治分析を披露した。

「それに君は科学への政治的圧力について詳しくない。政治が科学を発展させるのであって、科学が政治を変えるのではない。私達、科学者でさえ哀れな人間の集合体の一部ではないんだ。無力で、力学に翻弄される一器官に過ぎない。蟻のように働いただけ。役目が終われば、死を迎える。」

ジファは怒りと失望を押し殺し、重厚な声でゲルマノをとがめた。「あなたは科学と哲学を行き来する活力ある思想家であり、賢人だった。AI。そして「怪人」との関係があなたを無力にしました。その凋落振りは痛ましい。あなたはまるで無知に酔狂を見出す浮浪者のようだ。正直、落胆している。そして軽蔑も。」

ゲルマノの瞳は穏やかさで満ち満ちていた。

「私もだよ。聡明な子、ジファよ。私は誠意と熱意を失ってしまった。学問という分野に。人間という生命体に対してさえも。人類への責任感でさえも！ジファ、君は未だに理想化された人間像を追及している。それが脳の神経作用の一種に過ぎないとしても称賛に値する。この勝負・・・、君の勝ちだ。君は人生に勝利するだろう。その確約を私の遺言としよう。君の復讐劇の結末は私にも予想出来ない。ただ有意義な結果をもたらすのは変わりない。その蛮行と

もに。さあ、私に死の制裁を下すといい。」

ジファは最後にゲルマノにきいた。

「幼い頃の純粋な科学的好奇心は未だに忘れていない？」

ゲルマノの顔に一瞬だけ明るさが戻り、そして消えた。

「ああ、今もって鮮明だよ。忘れない。」

「せめてもの・・・救いだ。」

ジファはそう哀しげに口にして、無抵抗なゲルマノに引き金を引いた。発砲された数発の弾丸は彼の老いた体を貫き、ゲルマノは乾いた砂の上に倒れ伏した。黄金色の砂は染み渡る血で、赤く染められていった。それは残酷でありながらも、綺麗な血の紋様を砂の上に描き出していった。その光景を目に焼き付けた後、私は瞳を開いて、深いイマジネーションから目覚めた。指先は冷えきっていたが潤っている、胸の鼓動がイメージの確かなリアリティを私に感じさせた。私は静かに両指先を絡め合わせて、ジファが終焉まで駆け抜けるのを今一度予感していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0041z/>

時計塔に眠る怪人

2011年12月2日17時55分発行